

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河ロコレクション発掘調査報告書 (6)

市来貝塚

(川上貝塚)

昭和 36 (1961) 年調査

(いちき串木野市市来町川上)

2023年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、令和4年度に文化庁の補助金を受け実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、「よみがえる『河ロコレクション』の世界」と呼称する事業に伴い、昭和36年に発掘された市来貝塚の調査成果をまとめた記録です。

『河ロコレクション』とは、昭和20年代から半世紀以上の長きにわたり、鹿児島県内の考古学的調査に携わってこられた、故河ロ貞徳氏が収蔵・保管されていた考古関係資料のことで、平成24年12月に遺族の方々のご厚意により、当センターに「河ロ貞徳氏所蔵考古関連資料」として寄贈されました。この資料は、「考古資料」・「書籍類」・「地形図類」・「写真類」からなり、一括資料として『河ロコレクション』と呼ばれてきました。

本事業では、この寄贈資料の中から学史的に重要で、全国的にも著名な遺跡に関する資料を選び、あらためて調査内容の整理を行い、その情報や評価について県内外へ発信し、有効活用するための基礎・土台作りを目的としています。

今回報告する市来貝塚は、縄文時代後期の南九州を代表する遺跡で、「市来式土器」の標式遺跡にもなっています。過去7回にわたって実施された発掘調査のうち、昭和36（1961）年3月に実施された資料が『河ロコレクション』に収められており、今年度に整理作業を踏まえ、発掘調査の記録を刊行することとなりました。

本書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となることを願っております。

最後になりますが、本書の刊行にあたりご協力をいただきました南さつま市教育委員会及び関係機関に厚く御礼を申し上げます。

令和5年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 中 原 一 成

報告書抄録

ふりがな	いちきかいづか							
書名	市来貝塚							
副書名	県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口コレクション発掘調査報告書(6)							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第218集							
編集者名	前迫亮一							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦2023年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 起因
		市町村	遺跡番号					
いちきかいづか 市来貝塚 (川上貝塚)	かごしまけん 鹿児島県 いちきくしのし いちき串木野市 いちきちょうかわかみ 市来町川上	46219	219-55	31° 42' 27"	130° 18' 48"	1961. 3. 22 ～ 1961. 3. 31	53. 5	学術 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
市来貝塚 (川上貝塚)	貝塚	縄文時代後期前半期		集石遺構2基 埋葬遺構3か所(各1体)		縄文土器：市来式土器・ 出水式土器・指宿式土器 石器：スクレイパー・打 製石器・磨製石斧・打 製石斧・石錘・円盤形石 器・磨石・棒状敲石・砥 石・擦切石器・軽石加工 品・特殊石製品 貝製品：貝輪・貝刀・へ ら状加工品・有孔垂飾品 骨角器類：へら状加工 品・釣針・簪・歯牙製刺 突具・切断痕、擦痕のあ る加工品・サメ椎骨製 品・鯨椎骨製品		市来式土器 の標式遺跡
遺跡の概要	<p>市来貝塚は、鹿児島県いちき串木野市の標高約7～12mの河岸段丘上に位置する遺跡である。県内の縄文時代後期前葉から中葉を代表し、市来式土器の標式遺跡となっている。</p> <p>本遺跡は、大正10(1911)年3月に発見され、山崎五十磨による初めての発掘調査が実施されて以来、考古学専門家による発掘調査が7回実施されてきた。調査成果に関する資料や遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターやいちき串木野市教育委員会、鹿児島県歴史・美術センター黎明館等に保管されているが、本報告は昭和36(1961)年3月に、河口貞徳を調査責任者として実施された発掘調査の調査成果をあらためて整理したものである。</p> <p>2つ設定されたトレンチ(AとB)からは、面積の合計が53.5㎡と狭小にもかかわらず、大量の貝類と共に縄文土器・土製品や石器・石製品、貝製品や骨角製品が数多く出土した。また、3体検出された人骨は、調査から60年以上経過した今日においても、類例が少ない縄文人骨の検出例として極めて貴重な資料となっている。平成6(1994)年3月に、鹿児島県の史跡に指定された。</p>							



市来貝塚の位置 (●印：5万分の1)

例言・凡例

- 1 本書は鹿児島県が文化庁の補助を受け、本県で「よみがえる『河口コレクション』の世界事業」と呼称する事業に伴う発掘調査報告書である。
- 2 市来貝塚は、鹿児島県いちき串木野市市来町川上に所在する。
- 3 報告書作成（整理作業）は、鹿児島県教育委員会が事業主体者となり、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、全章にわたって「埋文センター」）が担当し実施した。
- 4 本文中での人名敬称は、河口貞徳氏を含め基本的省略する。
- 5 本書は、これまで7回にわたって実施された市来貝塚の発掘調査のうち、河口が責任者として発掘調査を実施した昭和36年の発掘調査報告書である。「河口コレクション」として収蔵・保管されている遺物・現場での実測図・現場写真等を中心に取扱い、併せて遺跡の調査成果全体の総括も記した。
- 6 掲載遺物番号は種類ごとに通し番号とした。また、石器・石製品には「S」、貝製品には「K」、骨角製品には「H」をそれぞれの番号の前に付した。本文・挿図・表・図版中の番号は一致する。
- 7 遺物観察表の法量において、括弧内に記載してある数値は残存値である。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。また、挿図の一部は市来町教育委員会作製の図面を使用し、その出典については、当該図のキャプション等で示した。
- 9 発掘調査での各種実測図は、河口の他、池水寛治・上村俊雄等の調査担当者が作成したものである。
- 10 出土遺物の実測・トレースは、「河口コレクション」担当の埋文センター職員（会計年度任用職員を含む）を中心として行い、石器実測の一部を株式会社サポートシステム委託した。
- 11 本書掲載の遺物の縮尺は、以下のとおりである。ただし、縮尺が異なる場合もあるので、各図に示した縮尺を参照頂きたい。
土器：1/4、石器（剥片石器等）：4/5、石器（礫石器等）：1/3、貝製品、骨角製品：1/3
- 12 自然科学分析は、株式会社古環境研究所に委託した。
- 13 本書図版で用いた現場写真は、「河口コレクション」として収蔵・保管されているものを使用した。
- 14 出土遺物及び人骨（全身骨格）の写真撮影は、西園勝彦が行った。ただし、P76所収の写真1～3は、「河口コレクション」所蔵の写真（撮影者不明）を使用した。
- 15 出土人骨の全身骨格調査にあたっては、鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授の御指導を得た。
- 16 骨角製品の同定にあたっては、（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターの宮崎大和文化財専門員の協力を得た。
- 17 本書の編集は前迫亮一が行った。
- 18 本書の執筆分担は、以下を除きすべて前迫が行った。
第3章第2節（2）② 中原一成
第3章第2節（4） ㈱古環境研究所
- 19 本報告を整理・刊行するにあたっては、鹿児島県文化財保護審議会の本田道輝会長から多くの資料提供をはじめ、多大な御指導・御協力をいただきました。心から感謝いたします。

本文目次

序文	
抄録	
例言・凡例	
目次	
第1章 事業の経緯と経過	1
第1節 事業の経緯と内容	1
第2節 整理・報告書作成業務	1
第3節 整理作業の方法と報告書の構成	1
第2章 市来貝塚研究史	2
第1節 発掘調査の履歴	2
第2節 出土品の整理と研究	2
第3章 昭和36年調査の概要と成果	4
第1節 遺跡の位置と環境	4
第2節 調査の概要と成果	4
(1) 遺構	9
① 集石遺構	9
② 埋葬遺構	9
(2) 遺物	9
① 土器・土製品	9
② 石器・石製品	44
③ 貝製品	54
④ 骨角製品	61
出土遺物観察表	64
(3) 自然遺物及び人骨	75
① 動物遺体	75
② 貝類	75
③ 人骨	76
(4) 自然科学分析（放射性炭素年代測定）	77
第4章 総括	79
第1節 遺跡としての市来貝塚	79
第2節 発掘調査の成果から	79
第3節 市来式土器について	82
写真図版	83

挿図目次

図1 市来貝塚と周辺の主な遺跡	4	図11 縄文土器4（Aトレンチ）	13
図2 古地図に見る市来貝塚付近の変遷	5	図12 縄文土器5（Aトレンチ）	14
図3 市来貝塚と周辺の地形	6	図13 縄文土器6（Aトレンチ）	15
図4 市来貝塚発掘調査地点位置図	6	図14 縄文土器7（Aトレンチ）	16
図5 市来貝塚発掘調査トレンチ位置図	7	図15 縄文土器8（Aトレンチ）	17
図6 集石遺構及び人骨の検出状況図	7	図16 縄文土器9（Aトレンチ）	18
図7 土層断面模式図	8	図17 縄文土器10（Aトレンチ）	19
図8 縄文土器1（Aトレンチ）	10	図18 縄文土器11（Aトレンチ）	20
図9 縄文土器2（Aトレンチ）	11	図19 縄文土器12（Aトレンチ）	21
図10 縄文土器3（Aトレンチ）	12	図20 縄文土器13（Aトレンチ）	22

図21	縄文土器14 (Aトレンチ)	23	図45	縄文時代の石器 4	48
図22	縄文土器15 (Aトレンチ)	24	図46	縄文時代の石器 5	49
図23	縄文土器16 (Aトレンチ)	25	図47	縄文時代の石器 6	51
図24	縄文土器17 (Aトレンチ)	26	図48	縄文時代の石器 7	52
図25	縄文土器18 (Bトレンチ)	27	図49	縄文時代の石器 8	53
図26	縄文土器19 (Bトレンチ)	28	図50	貝輪の製作工程	54
図27	縄文土器20 (Bトレンチ)	29	図51	縄文時代の貝製品 1	55
図28	縄文土器21 (Bトレンチ)	30	図52	縄文時代の貝製品 2	56
図29	縄文土器22 (Bトレンチ)	31	図53	縄文時代の貝製品 3	57
図30	縄文土器23 (Bトレンチ)	32	図54	縄文時代の貝製品 4	58
図31	縄文土器24 (Bトレンチ)	33	図55	縄文時代の貝製品 5	59
図32	縄文土器25 (Bトレンチ)	34	図56	縄文時代の貝製品 6	60
図33	縄文土器26 (Bトレンチ)	35	図57	縄文時代の骨角製品 1	62
図34	縄文土器27 (Bトレンチ)	36	図58	縄文時代の骨角製品 2	63
図35	縄文土器28 (Bトレンチ)	37	図59	暦年較正結果	78
図36	縄文土器29 (Bトレンチ)	38	図60	試料No.3の出水式土器胴部片実測図	78
図37	縄文土器30 (Bトレンチ)	39	図61	縄文時代の推定海岸線	79
図38	縄文土器31	40	図62	市来貝塚発掘調査地点位置図	80
図39	縄文土器32	41	図63	「昭和36年調査」と「平成2年調査」の トレンチ位置と貝塚推定範囲	81
図40	縄文土器33	42	図64	「昭和36年調査」の3月31日付日誌	81
図41	縄文土器34	43	図65	各地の市来式土器(深鉢) 及び関連土器	82
図42	縄文時代の石器 1	45			
図43	縄文時代の石器 2	46			
図44	縄文時代の石器 3	47			

表 目 次

表 1	市来貝塚発掘調査履歴一覧	2	表10	出土土器・土製品観察表(8)	71
表 2	市来貝塚関連の文献一覧	3	表11	出土土器・土製品観察表(9)	72
表 3	出土土器・土製品観察表(1)	64	表12	出土石器・石製品観察表(1)	72
表 4	出土土器・土製品観察表(2)	65	表13	出土石器・石製品観察表(2)	73
表 5	出土土器・土製品観察表(3)	66	表14	出土貝製品観察表(1)	73
表 6	出土土器・土製品観察表(4)	67	表15	出土貝製品観察表(2)	74
表 7	出土土器・土製品観察表(5)	68	表16	出土骨角製品観察表	74
表 8	出土土器・土製品観察表(6)	69	表17	市来貝塚の放射性炭素年代測定結果	78
表 9	出土土器・土製品観察表(7)	70			

図版目次

写真 1	1号人骨	76	図版 7	市来貝塚出土の土器 1	89
写真 2	2号人骨	76	図版 8	市来貝塚出土の土器 2	90
写真 3	3号人骨	76	図版 9	市来貝塚出土の土器 3	91
図版 1	遺跡の近景	83	図版10	市来貝塚出土の土器 4	92
図版 2	遺跡の遠景・近景	84	図版11	市来貝塚出土の石器・石製品	93
図版 3	遺跡の遠景及び発掘調査風景	85	図版12	市来貝塚出土の貝製品	94
図版 4	発掘調査風景	86	図版12	市来貝塚出土の骨角製品	95
図版 5	人骨の検出状況	87	図版12	市来貝塚検出の縄文人骨 3 体	96
図版 6	遺物の出土状況	88			

第1章 事業の経緯と経過

第1節 事業の経緯と内容

本書は、鹿児島県の考古学界に多大な功績を残された河口貞徳氏の収蔵品、いわゆる「河口コレクション」の中にある市来貝塚（鹿児島県いちき串木野市市来町川上所在）に関する考古学的情報について整理した報告である。

氏は平成23（2011）年1月に101歳でご逝去された。明治42（1909）年生まれの氏は、埋蔵文化財保護行政が確立される以前から、鹿児島県内の遺跡調査に携われ、多くの考古学的・歴史的知見を確認し、整理・発表されてきた。

昭和23（1948）年から昭和42（1967）年まで鹿児島市立玉龍高等学校教諭として教壇に立たれる一方、昭和24（1949）年には寺師見國氏や三友國五郎氏らと鹿児島県考古学会を創立。そして、昭和46（1971）年から亡くなる平成23（2011）年まで、その考古学会の会長として、鹿児島県の考古学界を牽引されたのであった。

長年にわたる調査・研究の成果は、結果として多くの考古資料が考古学会の事務局を兼ねていた氏の自宅に蓄積されることとなり、研究や蔵書保管のためのスペースはもちろん、専用の収蔵庫も設け、資料の保管管理に尽力されたのであった。

幸いこれらの資料は、遺族の方々のご厚意により、平成24（2012）年12月に、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「県立埋文センター」とする）に寄贈され、その今日的評価を検討・提示すべく、緊急雇用創出事業や文化庁の国庫補助事業等を活用し、調査・整理を進めてきた。

氏が調査された遺跡は、昭和24（1949）年9月の笹貫遺跡（鹿児島市）をスタートとして、最後の調査となった昭和59（1984）年10月の中甫洞穴（知名町）第3次調査まで、97遺跡、延べ139回を数える。これまで、県立埋文センターでは、『山ノ口遺跡』（2018）、『吐噶喇・奄美の遺跡』（2019）、『出水貝塚』（2020）と報告・刊行してきた。令和2（2020）年度からは、文化庁の国庫補助事業を活用した『よみがえる「河口コレクション」の世界』事業をスタートさせ、『上加世田遺跡1』（2021）と『上加世田遺跡2』（2022）の報告を刊行し、本年度は『市来貝塚』を整理・刊行することとなった。

第2節 整理・報告書作成業務

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業については、令和4（2022）年4月から令和5（2023）年3月にかけて、県立埋文センターで行った。ただし、基礎的な整理作業は、令和元（2019）年度から着手し、寄贈された

資料と既報告（発表）分の資料との照合作業等を行った。

本整理・報告書作成に関する業務体制は、以下のとおりである。

〈令和3年度 業務体制（整理作業）〉

事業主体	鹿児島県	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	中原 一成
調査企画	次長兼総務課長	大口 浩嗣
	調査課長	寺原 徹
	第一調査係長	黒川 忠広
調査担当	文化財主事	前迫 亮一
事務担当	主査	和田 賢
調査指導	鹿児島女子短期大学 教授	竹中 正巳
	文化庁文化財部文化財第二課	
	主任文化財調査官	近江 俊秀

なお、本報告書の刊行にあたり、掲載内容の妥当性等について下記の委員会を開催し、検討を行った。

報告書作成指導委員会 令和4年11月21日他、4回。

寺原調査課長他6名

報告書作成検討委員会 令和4年11月24日

中原所長ほか6名

第3節 整理作業の方法と報告書の構成

対象となる市来貝塚の資料は、河口貞徳氏宅の収蔵庫に保管してあった状態を基本として受け入れ、平成25年度に約250箱の遺物ケースに整理・収納された。

今回の再整理作業にあたり、まず出土品の種類ごと、つまり土器類・石類・貝類・獣（魚）骨類に分類した。さらに土器以外については、石器・石製品・貝製品・骨角製加工品・魚骨製加工品（いわゆる遺物）の抽出・選別を行った。

獣骨や魚骨類は、今回対象としている昭和36（1961）年調査を含む、これまで数回の発掘調査で出土した資料が保管されていた鹿児島大学総合博物館から、令和3（2021）年度に当センターに移管された資料が中心となっている。これらは「河口コレクション」とは別の収蔵品ではあるが、対象となる昭和36年調査資料ということで、本報告で取り扱うこととした。

なお、この移管された獣骨・魚骨類には、西中川駿鹿児島大学名誉教授を中心として分析・同定されたもので、平成2年と4年に当時の市来町教育委員会が調査した資料も含まれており、今回、製品数点を確認した。機会を見て紹介していきたい。

第2章 市来貝塚研究史

第1節 発掘調査の履歴

市来貝塚における考古学的な発掘調査は、これまで7回実施され、今回の報告はそれらの中の5回目の調査が対象となる。

まずは遺跡が発見された経緯について整理したい。本貝塚は、大正9（1920）9月、当時の西市来尋常高等小学校に首席訓導として着任した有村栄助によって発見された。そのいきさつについては、第4章で改めて触れることとするが、有村は大正10（1921）年3月に考古学研究者である山崎五十麿に調査を依頼し、初めての発掘調査が実施されることとなった。

山崎は考古学の専門誌である『考古学雑誌』（表2文献1）にその調査成果を発表し、市来貝塚は広く学界に知られることとなった。

山崎は、大正15（1926）年3月に清野謙次とともに再び発掘調査を行っている。この資料の発表（表2文献24）は清野の死後、昭和44（1969）年のことで惜しまれるが、山崎と共に、のちに市来式土器と呼ばれることとなる標式土器の特徴をよく伝えていることは特筆すべきであろう。なおこの資料は、奈良県天理市の天理参考館に保管されているとのことである（表2文献45）。

その後、昭和12（1937）年3月には寺師見國によって小発掘が実施された。寺師はその後調査した熊本県水俣市の南福寺貝塚の調査成果（表2文献9）等と合わせ、南九州の縄文土器を整理するきっかけとなった。出土品は鹿児島県歴史・美術センター黎明館に寄贈され、「寺師コレクション」の一部として保管されている。

本報告の対象となる昭和36（1961）年調査の調査総括者である河口貞徳は、昭和25（1950）年12月に当時勤務していた鹿児島玉龍高等学校の教え子である池水寛治ら3名と現地調査を行っている。河口によると、「従来の発掘では貝層のみの発掘に止まり、市来式以前の様相は不明であったが、昭和25年の発掘では貝層下の包含層まで調査し、市来式の下層に指宿式並行の文化が存在することを検出した」として、小発掘ながらもその意義のあ

る成果について述べている（表2文献36、44）。

それから10年ほど経過した昭和35（1960）年、「貝塚の盗掘が行われ、貝塚が荒らされるという事件」（表2文献36、44）が起こった。市来町は県と協議し、当時県文化財専門委員であった河口に調査を依頼。昭和36年3月に発掘調査が実施されることとなった。これが本報告の調査である。

その後、市来町教育委員会は、平成2（1990）年と4（1992）年に遺跡範囲を確認するための発掘調査を文化庁の国庫補助事業として実施し、それぞれ調査報告書を刊行し、遺跡の実態把握を大きく進めることとなった（表2文献43、47）。

その後、発掘調査は実施されていない。

第2節 出土品の整理と研究

市来貝塚からは、貝塚ということもあり土器・土製品や石器・石製品の他に貝製品や骨角製品、人骨や獣魚骨・貝類など、多様な資料が出土している。

中でも本貝塚を標式遺跡とする市来式土器は昭和13（1938）年に三森定男が初めて用いて以来（表2文献7）、南九州の縄文時代後期を代表する土器型式として、全国的にも古くから知られてきた存在となっている。

「市来貝塚」や「市来式土器」をキーワードとする主な文献をまとめた表2からもわかるように、文献18、19、27、31、48、50、51、54のような考古学の用語辞（事）典型的なものや、文献8、10、11、14、16、20、21、23、28、30、32、39、41、53、55のような考古学概説書等にも頻繁に取り上げられていることから、その重要性を知ることができよう。

また、石器（表2文献37、44）や貝製品（表2文献44～46、52）に関するものもあるが、多くは市来式土器及びその周辺の土器型式（例えば松山式土器・草野式土器・丸尾式土器・鐘崎式土器等）に関する文献が多い。市来式土器についての研究史については、本田道輝による表2の文献35、40、44に詳細に記されており、ここでは文献紹介にとどめておく。

表1 市来貝塚発掘調査履歴一覧

番号	調査期間	調査起因等	調査主体	備考
	大正10(1921)年3月	地元の江夏盛吉の情報を得て、当時西市来尋常高等小学校訓導であった有村栄助が発見		
1	大正10(1921)年3月	学術調査	山崎五十麿	
2	大正15(1926)年3月14日	学術調査	清野謙次・山崎五十麿	
3	昭和12(1937)年3月6日	学術調査	寺師見國	
4	昭和25(1950)年12月	学術調査	河口貞徳	
5	昭和36(1961)年3月22日～3月31日	学術調査	河口貞徳	
6	平成2(1990)年10月1日～11月6日	遺跡範囲確認調査	市来町教育委員会	調査担当(県教委の新東晃一・堂込秀人)
7	平成4(1992)年5月14日～7月23日	遺跡範囲確認調査	市来町教育委員会	調査担当(県教委の新東晃一・児玉健一郎)

表2 市来貝塚関連の文献一覧

番号	刊行年	文献名	著者	備考
1	大正10(1921)	「薩摩国日置郡西市来村貝塚に就て」『考古学雑誌』11-12 日本考古学会	山崎五十麿	表1-1の調査概要報告
2	昭和3(1928)	「薩摩国日置郡西市来村大字川上宇宮の後貝塚」『日本石器時代人研究』岡書院	清野謙次	表1-2の調査概要報告
3	昭和5(1930)	「薩摩国日置郡西市来村大字川上宇宮の後貝塚人人骨の人類学的研究」『人類学雑誌』45-8附 日本人類学会	田幡丈夫	表1-2の調査概要報告
4	昭和6(1931)	「古代史 西市来の貝塚」『鹿児島県郷土史大系』2		未確認
5	昭和7(1932)	「薩摩国西市来貝塚」『史蹟名勝天然記念物』7-4 史蹟名勝天然記念物保存協会	横山将三郎	
6	昭和10(1935)	「九州に於ける縄文土器の一形式」『ドルメン』4-6	三森定男	
7	昭和13(1938)	「先史時代の西部日本(上)」『人類学先史学講座』1 雄山閣	三森定男	市来式土器の型式設定文献
8	昭和14(1939)	「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11 雄山閣	小林久雄	
9	昭和14(1939)	「肥後水俣南福寺貝塚 -南福寺式土器-」『考古学』10-7 東京考古学会	寺師見國	
10	昭和14(1939)	「鹿児島県先史時代の研究」『昭和13年度鹿児島県中等学校教育研究会発表資料』	木村幹夫	『木村幹夫考古学論文集』(1980)所収
11	昭和18(1943)	「九州縄文式土器の分類」『鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺蹟表』鹿児島県縣立國聖跡調査會	寺師見國	
12	昭和24(1949)	「鹿児島県桜島武貝塚」『日本考古学年報』2 日本考古学協会	小林行雄	
13	昭和27(1952)	「草野貝塚発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』1 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
14	昭和29(1954)	『南九州の縄文式土器』	寺師見國	
15	昭和30(1955)	「先史時代」『鹿児島のおいたち』		河口貞徳
16	昭和31(1956)	「各地域の縄文式土器 九州」『日本考古学講座』3 河出書房	賀川光夫	
17	昭和32(1957)	「南九州後期の縄文式土器 -市来式土器-」『考古学雑誌』42-2 日本考古学会	河口貞徳	
18	昭和34(1959)	「市来貝塚」『図解 考古学辞典』 東京創元社		小林行雄
19	昭和37(1962)	「市来貝塚」「市来式土器」『日本考古学事典』 東京堂	河口貞徳	
20	昭和40(1965)	「縄文文化の発展と地域性 九州西北部」『日本の考古学』II 河出書房新社	乙益重隆	
21	昭和40(1965)	「縄文文化の発展と地域性 九州東南部」『日本の考古学』II 河出書房新社	賀川光夫	
22	昭和41(1966)	「鹿児島県日置郡市来貝塚」『日本考古学年報』14 日本考古学協会	河口貞徳	表1-5の調査概要報告
23	昭和44(1969)	「後期縄文文化 -九州-」『新版考古学講座』3 雄山閣	乙益重隆・前川威洋	
24	昭和44(1969)	「薩摩国日置郡西市来村大字川上宇宮の後貝塚」『日本貝塚の研究』 岩波書店	清野謙次	表1-2の調査概要報告
25	昭和46(1971)	「沖縄県浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について」『古代文化』23-9・10 古代学協会	新田重清	
26	昭和49(1974)	「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』9 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
27	昭和54(1979)	「市来貝塚」『世界考古学事典(上)』 平凡社	河口貞徳	
28	昭和54(1979)	「九州後期縄文土器の諸問題」『九州縄文文化の研究』 前川威洋遺稿集刊行会	前川威洋	
29	昭和56(1981)	「市来式の祖形と南島先史文化への影響」『鹿児島考古』15 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
30	昭和56(1981)	「縄文土器II -市来式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣	本天道輝	
31	昭和56(1981)	「市来貝塚」「市来式土器」『鹿児島大百科事典』 南日本新聞社	河口貞徳	
32	昭和56(1981)	「九州地方」『縄文土器大成3 後期』 講談社	木村幾多郎	
33	昭和57(1982)	「一 縄文時代 I 市来貝塚」『市来町郷土誌』		
34	昭和59(1984)	「南西初頭における古代人骨の人類学的研究 -市来縄文人骨よりの考察-」『鹿児島考古』 鹿児島大学考古研	内藤芳篤	表1-5の調査報告
35	昭和60(1985)	「市来式土器の基礎的研究(Ⅰ)」『人文学科論集』22 鹿児島大学法文学部紀要	本天道輝	
36	昭和61(1986)	「市来貝塚あれこれ」『鹿児島考古』20 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
37	昭和61(1986)	「市来式と擦切技法」『シンポジウム 市来式について』『考古月報』1 鹿児島県考古学会	河口貞徳・出口浩他	
38	昭和63(1988)	「薩摩半島西岸城の遺跡 市来貝塚」『日本の古代遺跡』38 鹿児島』 保育社	河口貞徳	
39	昭和63(1988)	「(入門講座)縄文土器 -九州地方 南九州(2)-」『考古学ジャーナル』296 ニューサイエンス社	新東晃一	
40	昭和63(1988)	「市来式土器の基礎的研究(Ⅱ)」『人文学科論集』28 鹿児島大学法文学部紀要	本天道輝	
41	平成元(1989)	「市来・一湊式土器様式」『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』 小学館	本天道輝	
42	平成元(1989)	「土器様式変化の一類型」『横山浩一先生退官記念論集Ⅰ 生産と流通の考古学』	松永幸男	
43	平成3(1991)	「川上(市来)貝塚」『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書』1 市来町教育委員会	市来町教育委員会	表1-6の調査報告
44	平成3(1991)	「特集 市来貝塚」『鹿児島考古』25 鹿児島県考古学会	河口貞徳・本天道輝他	表1-5の調査概要報告を含む
45	平成3(1991)	「貝類から見た川上貝塚の環境」『南九州縄文通信』5 南九州縄文研究会	坂下泰典	
46	平成3(1991)	「南九州の縄文後期の貝輪 -特に川上貝塚出土の貝輪製作工程について-」『南九州縄文通信』5 南九州縄文研究会	新東晃一	
47	平成5(1993)	「川上(市来)貝塚」『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書』2 市来町教育委員会	市来町教育委員会	表1-7の調査報告
48	平成6(1994)	「市来式土器」『市来貝塚』『縄文時代事典』 東京堂出版	木崎康弘	
49	平成6(1994)	「異系統土器の一接点」『南九州縄文通信』8 南九州縄文研究会	前迫亮一	
50	平成7(1995)	「市来貝塚」『日本古代遺跡事典』 吉川弘文館	本天道輝	
51	平成8(1996)	「市来式土器」『日本土器事典』 雄山閣	本天道輝	
52	平成11(1999)	「鹿児島県の古代貝文化」『鹿児島考古』33 鹿児島県考古学会	木下尚子	
53	平成17(2005)	「市来貝塚」『先史・古代の鹿児島(資料編)』 鹿児島県教育委員会	新町 正	
54	平成20(2008)	「市来式土器」『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション	前迫亮一	
55	平成22(2010)	「縁帯土器群について 市来式」『西日本の縄文土器 後期』 真陽社	水ノ江和同・前迫亮一	
56	平成31(2019)	「“市来の中の市来”式土器を考える」『中山清美と奄美学』 奄美考古学会	前迫亮一	

第3章 昭和36年調査の概要と成果

第1節 遺跡の位置と環境

市来貝塚は九州島南西部に位置するいちき串木野市市来町に所在する。いちき串木野市は東シナ海に面する薩摩半島の西海岸に位置する自治体で、いわゆる平成の大合併の際、串木野市と市来町が合併して誕生した。

遺跡は旧市来町の中心部を流れる八房川の中流にあり、河口から直線距離で約3kmの左岸、標高約12~13mの河岸段丘（微高地）上およびの斜面に残されている。中でも遺跡を特徴づける貝塚部分は、標高7~12mの傾斜面を利用して形成されており、後世の削平により、概ね3段の平坦面を有する景観となっている。現在でも、満潮の際は遺跡附近まで潮が上るとのこと。貝塚が形成されて当時は、すぐ近くまで潮線が来ていたものと考えられる。

第2節 調査の概要と成果

本報告は市来町から委嘱を受けた河口貞徳を調査総括者として実施された昭和36年度調査を対象とする。

貝塚自体は大正年間から知られていたわけであるが、前章で述べたように、調査前年の昭和35（1960）年に盗掘事件が発生したことがきっかけとなつての発掘調査実施であった。

調査主体者は市来町、調査総括は当時鹿児島玉龍高等学校教諭であるとともに鹿児島県文化財専門委員であった河口貞徳が担当した。調査は昭和36（1961）年3月22日から31日までの10日間実施された。調査には、池水寛治・上村俊雄・荒武克彦・麓川昭憲等の玉龍高等学校考古学クラブ員やそのOBを中心として、教員や地元高校生、地元住民など、多くの方々が参加した。発掘調査の面積は53.5㎡であった。

調査区の設定については、表2文献44の中で河口が詳しく記しているので、以下に引用する。

「貝塚は台地の北斜面と東側にあり、基盤の岩石に赤ボッコが堆積し、その上に形成されている。今回の発掘は、北斜面の貝塚について行った。北斜面は、谷状の地形に三段の畑があり、貝塚は台地の北斜面から、第一段、第二段の畑にかけて拡がっている。

発掘調査は第一段の畑の中央に略東西方向に2m×16mのトレンチと、傾斜面西よりの部分に略南北方向に2m×6mのトレンチを設け、前者をA、後者をBとした。さらに各トレンチは、2m四方を単位として区画し、Aトレンチは東よりⅠ~Ⅷ区、Bトレンチは南よりⅠ~Ⅲ区とした。

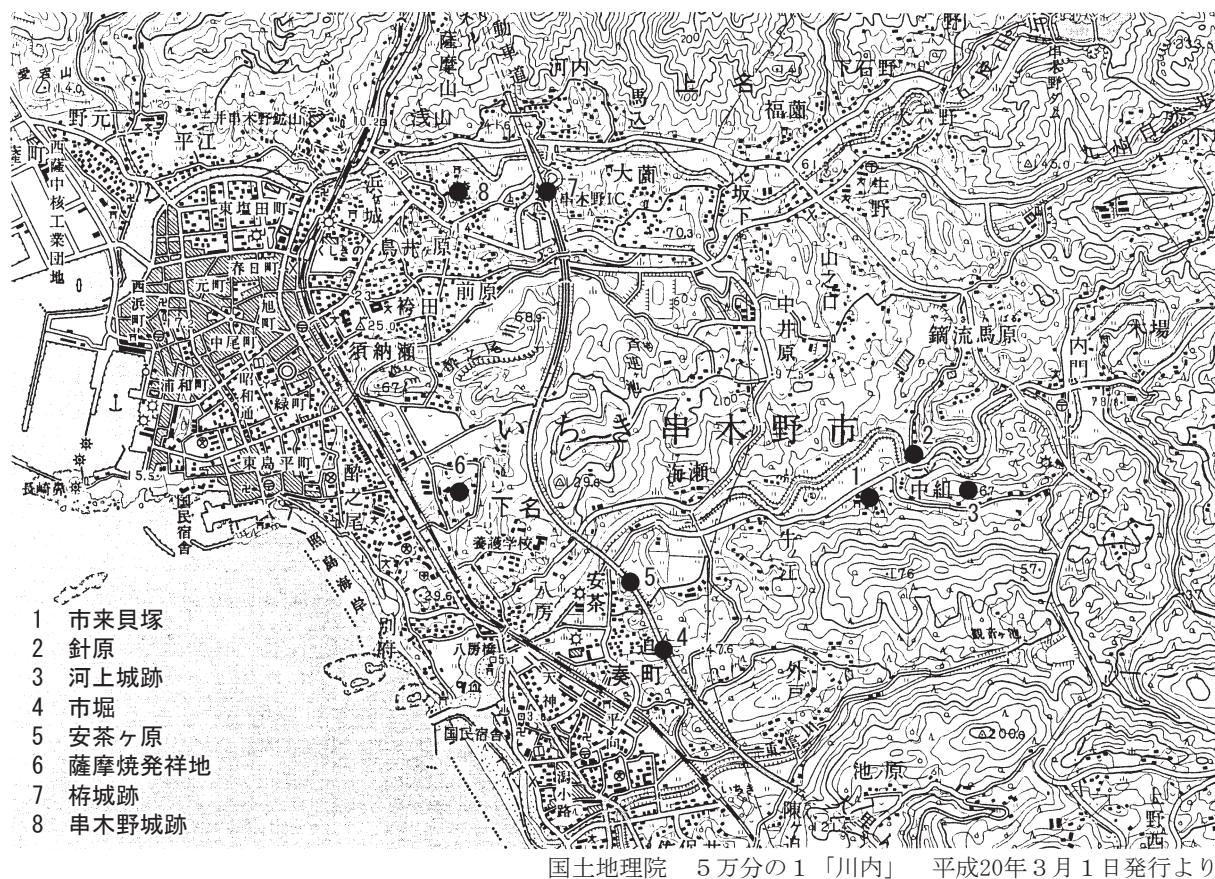


図1 市来貝塚と周辺の主な遺跡



大日本帝国陸地測量部 5万分の1「川内」 明治42年7月20日発行より



地理調査所 5万分の1「川内」 昭和34年3月30日発行より

図2 古地図に見る市来貝塚付近の変遷 (●印が市来貝塚)



鹿兒島県日置郡市来町作成「市来町全図Ⅰ」 昭和42年8月測図より

図3 市来貝塚と周辺の地形 (●印が市来貝塚)

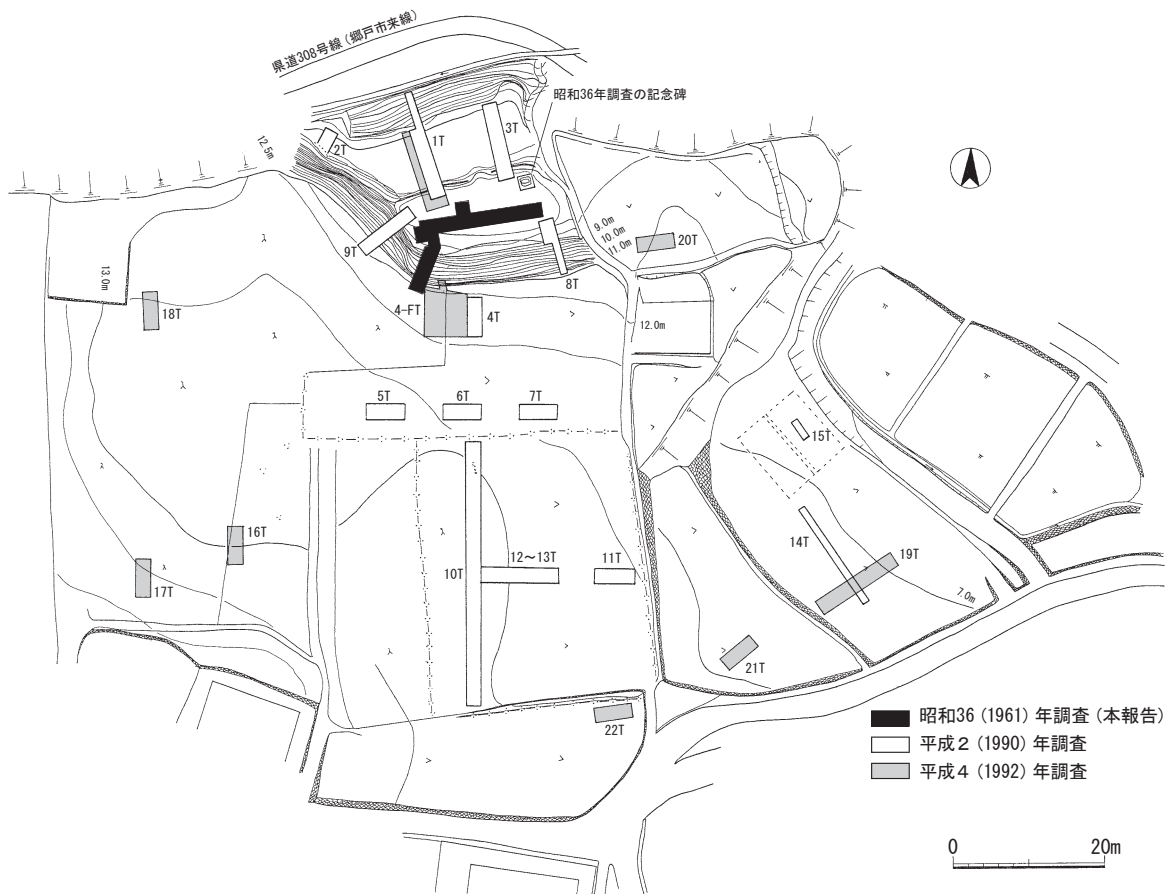


図4 市来貝塚発掘調査地点位置図 ※表2 文献47第3図を一部改変

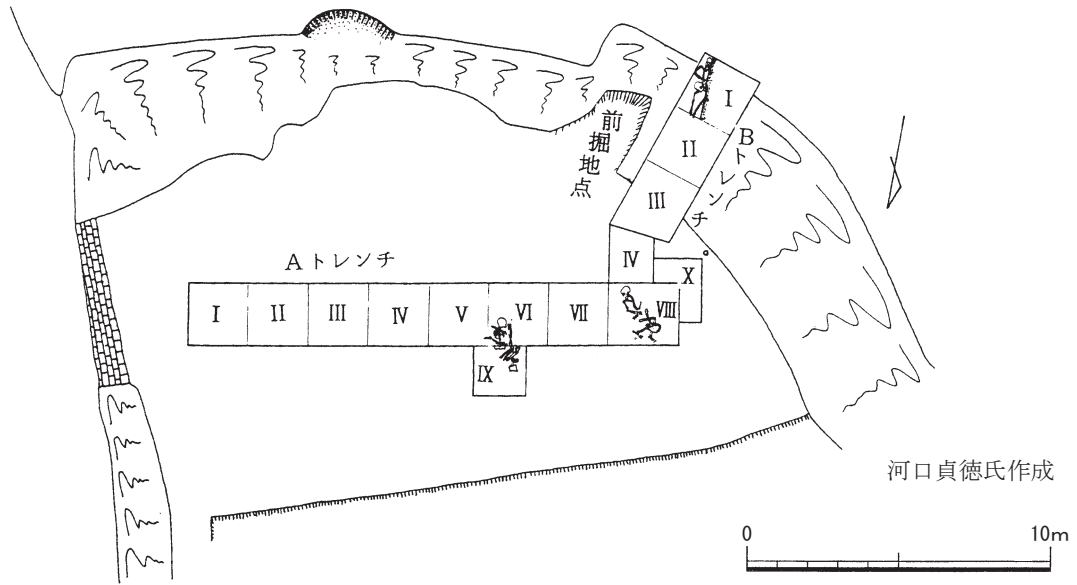


図5 市来貝塚発掘調査トレンチ位置図（昭和36年）※表2文献44より転載

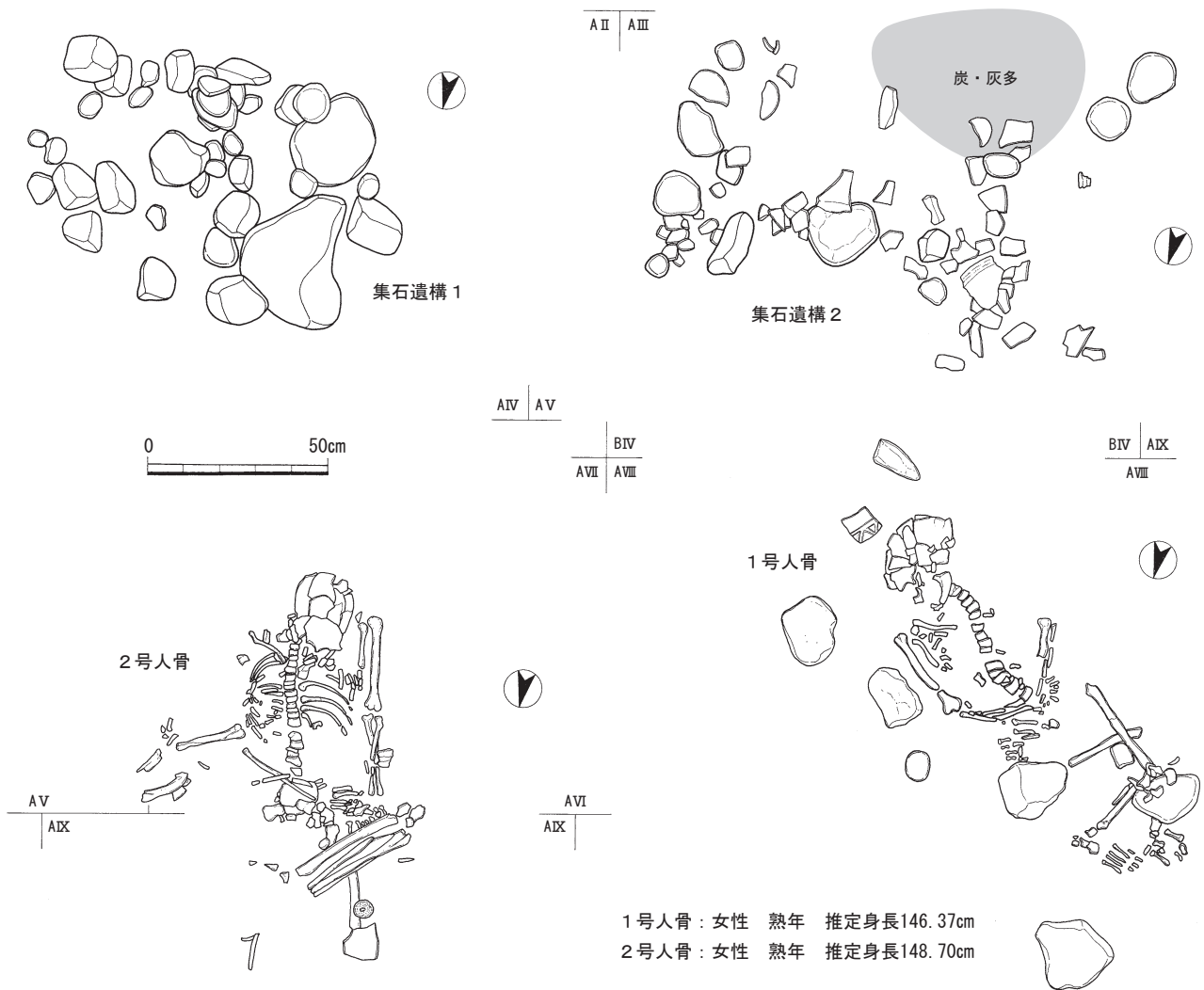
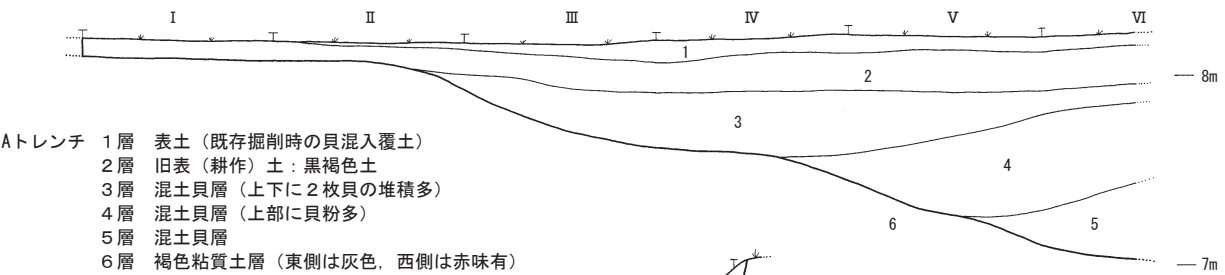


図6 集石遺構及び人骨の検出状況図

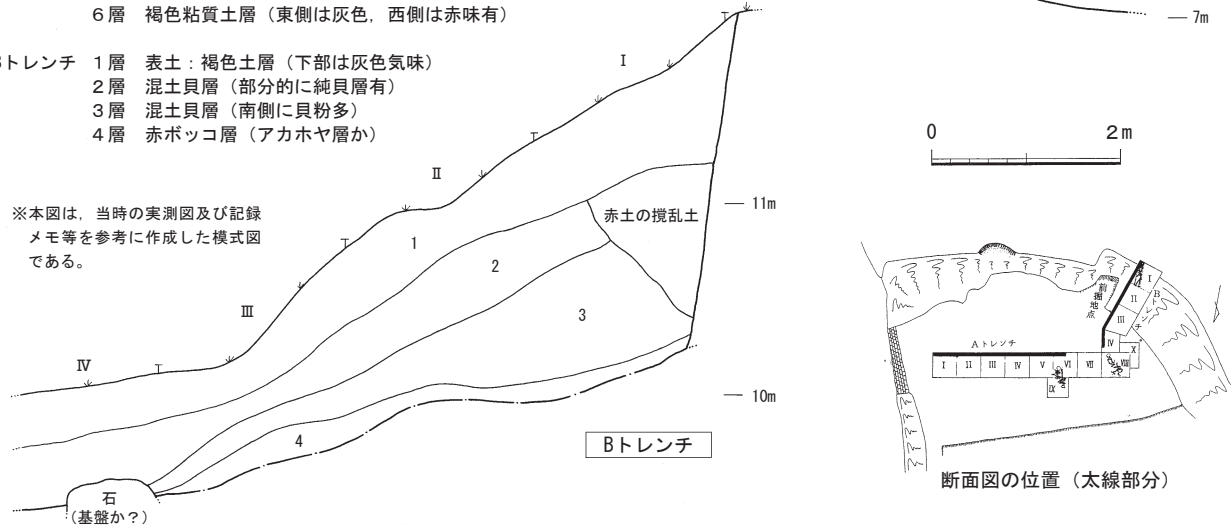
Aトレンチ



- Aトレンチ 1層 表土（既存掘削時の貝混入覆土）
 2層 旧表土（耕作）土：黒褐色土
 3層 混土貝層（上下に2枚貝の堆積多）
 4層 混土貝層（上部に貝粉多）
 5層 混土貝層
 6層 褐色粘質土層（東側は灰色，西側は赤味有）

- Bトレンチ 1層 表土：褐色土層（下部は灰色気味）
 2層 混土貝層（部分的に純貝層有）
 3層 混土貝層（南側に貝粉多）
 4層 赤ボッコ層（アカホヤ層か）

※本図は、当時の実測図及び記録メモ等を参考に作成した模式図である。



Bトレンチ

図7 土層断面模式図

AトレンチⅥ区では貝層下に人骨が出土したので、この部分を北へ拡張し、1.5m×1.5mのⅨ区を設けて完掘した。さらにⅧ区でも人骨が出土し、南西へ拡張してⅩ区とした。一方BトレンチとAトレンチの間隙があり、この部分にBⅣ区を設けてABトレンチを接続した。」

以上が調査区設定の説明で、図5がその具体を図示したものである。ちなみに図4は、昭和36（1961）年の調査区と平成の2回の調査区を合体して図示したものである。これについては、第4章で述べることにする。

基本層序について（図7）

市来貝塚の基本層序について、当時の実測図と表2文献44の中で河口が報告した記録を参照に模式図化したのが図7である。トレンチごとに概要を説明したい。

Aトレンチ

1層 表土

発掘調査のきっかけとなった盗掘により散乱した貝混じりの堆積覆土層。図版2の写真を見ると、表面はほぼ白い貝殻で覆われたような様相を呈していたことが分かる。Ⅱ区より東側で見られ、厚さ10～20cm。

2層 旧表土で黒褐色を呈する。桑畑時代の耕作土がベースとなっている。厚さ20～40cm。

3～5層 いずれも混土貝層で、いわゆる遺物包含層と

なっている。文献45では、「Ⅱ区西端より貝層が始まり、次第にレンズ状になって、Ⅶ区にいたって最高に達し厚さ2.6mを計る」とある。「この貝層を上中下三層に分け」とあり、それぞれ3、4、5層とされているが、上中下の基準についての記載はない。実測図によると、3層の上下に二枚貝の堆積層が見られ、4層の上部には貝粉が多くみられる。

6層 褐色の粘質土層で、東（Ⅰ区）側は灰色、西側は赤みが強くなっている。無遺物層である。

Bトレンチ

1層 褐色の表土層で傾斜角45度の斜面を覆う分厚い土層となっている。下部は灰色気味である。厚さ70～150cm

2～3層 いずれも混土貝層で、分層の基準についての記載はないが、2層には部分的に純貝層があり、3層には南側で貝粉が多いという特色がみられる。これらの貝層は「Aトレンチに比べて貝の量は極めて少なく、貝塚と呼ぶには抵抗を感ずるほどである」との記載もある。2つの層で40～260cm程の厚さがある。

4層 赤ボッコ層。いわゆるアカホヤ層該当かと考えられる。「厚さは20～40cmで基盤の岩盤に達している」とある。

(1) 遺構 (図6)

① 集石遺構 (図6上)

集石遺構1 AトレンチⅣ区の4層で検出された。約40個の礫を100cm×73cmの楕円形状に配したものである。内部に木炭や灰が多く出土したことから、炉としての役割が想定されており、表2文献44では、「炉跡」として紹介されている。

集石遺構2 AトレンチⅢ区の2層で検出された。円礫を長楕円形に配置した形で検出されたが、トレンチの壁面に含まれており、全形は把握できていない。表2文献44では、「楕円形配石遺構」として紹介されている。

② 埋葬遺構 (図6下)

人骨を埋葬したと考えられる遺構が3か所(3体)検出された。埋葬人骨については、昭和50年代後半に長崎大学の内藤芳篤教授により同定されている(表2文献34)が、その際の1号と2号の人骨番号が河口の報告と逆になっている。本来、調査時の号数が優先されるべきと考えるが、人骨の同定資料が広く公開されていることや、人骨片そのものに同定時の番号が多数注記されていることから、混乱を避けるために本報告では同定時の番号で掲載することとした。

1号人骨 AトレンチⅧ区の5層(混土貝層下部)から検出された。東南方向に頭を向け、仰臥屈葬の姿勢で埋葬されている。人骨の東側側面を中心に長さ30~50cmの礫が配されたように出土した。意識的に配石したものと考えられる。市来式土器期のもので、推定身長148.70cmの熟年女性と同定されている。

2号人骨 AトレンチⅥ区からⅨ区の3層下部から検出された。南向きの仰臥屈葬である。下肢付近で有孔の円形軽石製品(図48-S52)が出土した。市来式土器期のもので、推定身長146.37cmの熟年女性と同定されている。

3号人骨 BトレンチⅠ区の4層中(掘り込みと考えられる)で検出された。基盤をなす巨岩の陰に埋葬された状態であった。頭を南側に置いた仰臥伸展葬である。「沈線文土器と共伴」したとあり、指宿式土器期(これについては第4章でも記す)のもので、推定身長163.46cmの熟年男性とされる。

保存状態がやや不良とされる1号と2号の女性人骨に対し、3号の男性人骨は保存状態の良好で、屈強な体格を呈している。いずれにしても頭蓋骨の残存状況は良好で、南九州縄文人の姿を伝えてくれる貴重な資料となっている。3号人骨と共伴したとされる「沈線文土器」を特定するまでに至らなかった。また「共伴」を示す状態の記録がなかったことは残念であった。

(2) 遺物 (図8~57)

市来貝塚の出土品については、これまで、表2文献44で約270点の遺物が紹介されている。本報告では、それらの一部も含め、あらためて整理・抽出を行い、土器・土製品574点、石器・石製品70点、貝製品88点、骨角製品26点の計758点を掲載した。

① 土器・土製品 (図8~41 1~572)

掲載遺物全体の約75%を占めるのが土器・土製品である。ページ数が限られているので、個々の詳細については表5~13の観察表を参照していただきたい。

土器・土製品は、大きくAトレンチ出土の遺物、Bトレンチ出土の遺物、どちらのトレンチか不明の遺物の3種類に分けて掲載した。調査面積の約70%を占めるAトレンチの方が遺物量も多かった。

Aトレンチ出土の遺物 (図8~24 1~281)

Aトレンチで最も多く出土したのは、縄文時代後期中葉の市来式土器である。28~110, 152~212, 229~239, 市来式土器の範疇に含まれると考えられる草野式土器(111~119)や当該期の無文土器などを加えるとトレンチ全体の約60%を占める。

その他については、1が本報告全体の中で最も古い縄文時代前期の轟B式土器の口縁部である。前期の資料はこの1点のみ確認できた。2は南福寺式土器、3~14は出水式土器と考えられるものである。9の突帯付口縁部片は市来式系の可能性もある。15~17は岩崎上層や指宿式土器、19~27は松山式(系)土器と考えられる。136~151は鐘崎式土器をはじめとする磨消縄文系土器である。縄文時代晩期前葉の入佐式土器の浅鉢(228)も出土した。

Bトレンチ出土の遺物 (図25~37 282~492)

Bトレンチで最も多く出土したのは、289~441を中心とした縄文時代後期前葉の出水式土器であった。トレンチ全体の約70%を占める。

そのほかについては、283,284の阿高式土器、285~288の南福寺式土器、442~446の岩崎上層式土器、447~456の指宿式土器、457~464の磨消縄文系の土器、465の丸尾式土器、466の西平式土器が出土した。

トレンチ不明の遺物 (図38~41 493~572)

遺物カードや収納袋の劣化等により、残念ながら出土地点が不明となってしまった遺物もまとめて掲載した。

A, Bが混在していることもあり、上記2つのトレンチを合体した様相を呈している。493~503の出水式土器、504~512の磨消縄文系土器、514~518の指宿式土器、519~524の松山式土器、526~538の市来式土器、548の西平式土器等がそうである。

いずれにしても、平坦面のAトレンチが市来式土器、斜面のBトレンチが出水式土器と、トレンチは隣接しながらも、主たる時期が異なるという大変興味深い様相を提示する結果が得られている。



図8 縄文土器1 (Aトレンチ)

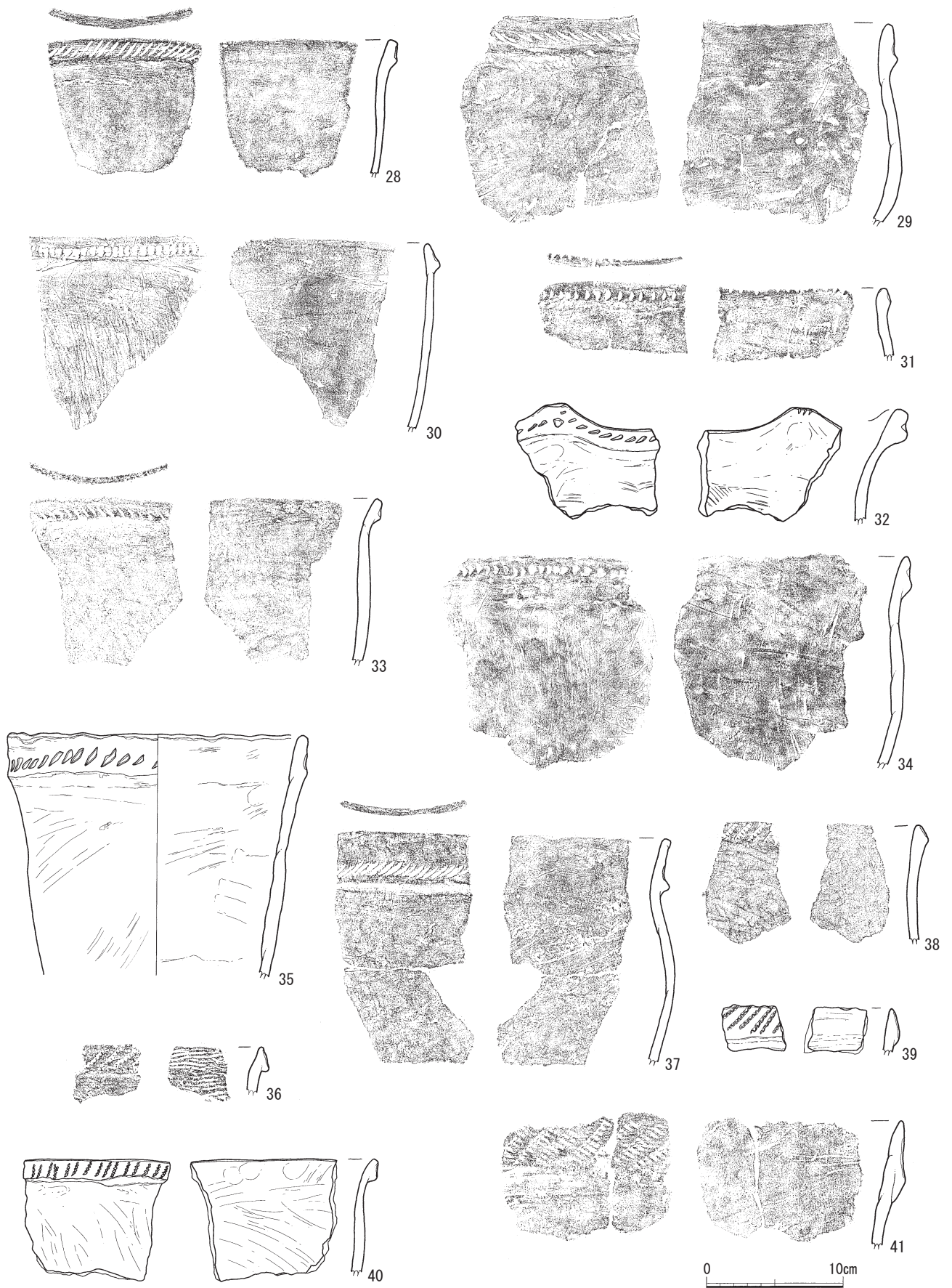


図9 縄文土器2 (Aトレンチ)

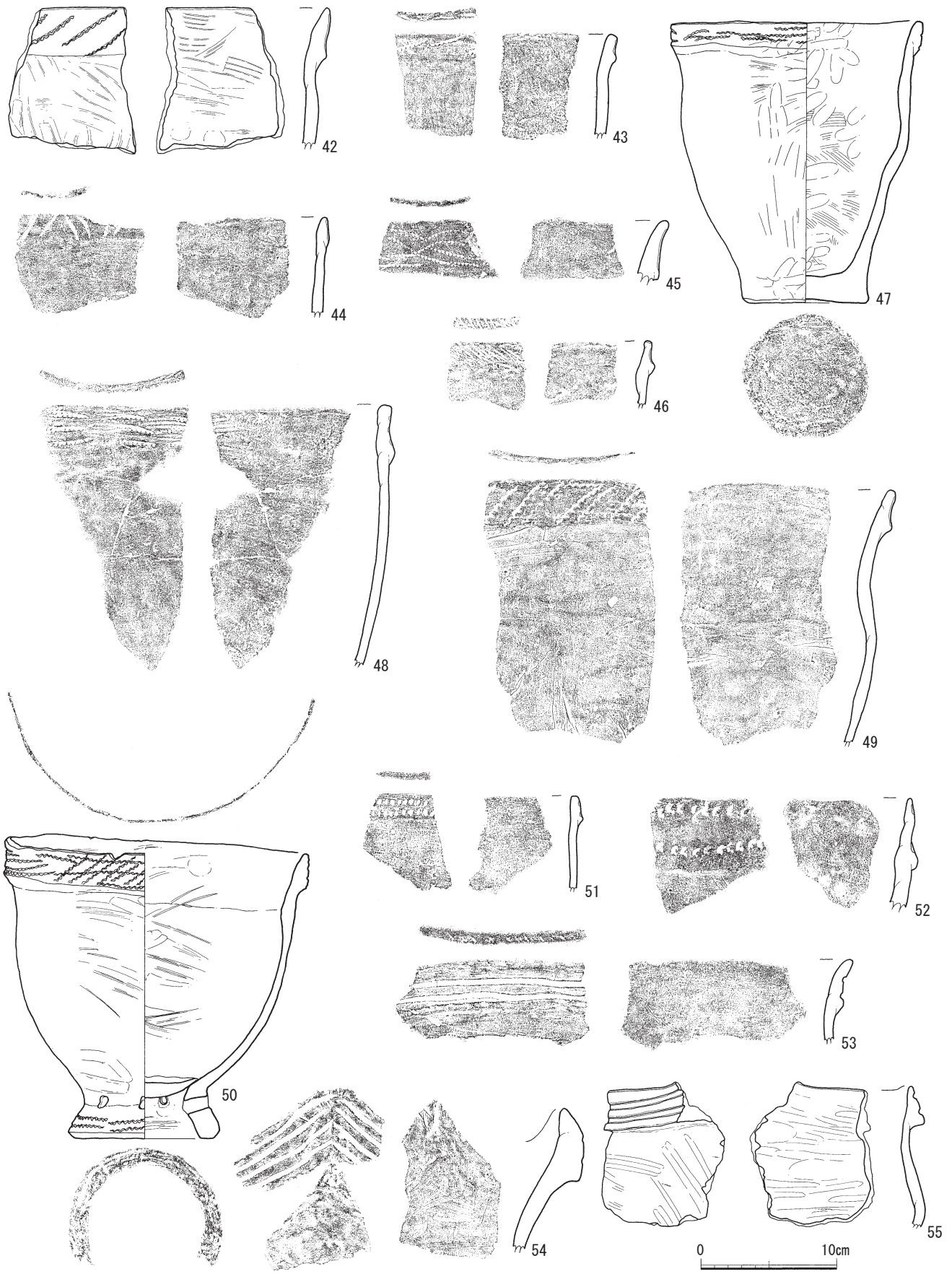


図10 縄文土器3 (Aトレンチ)

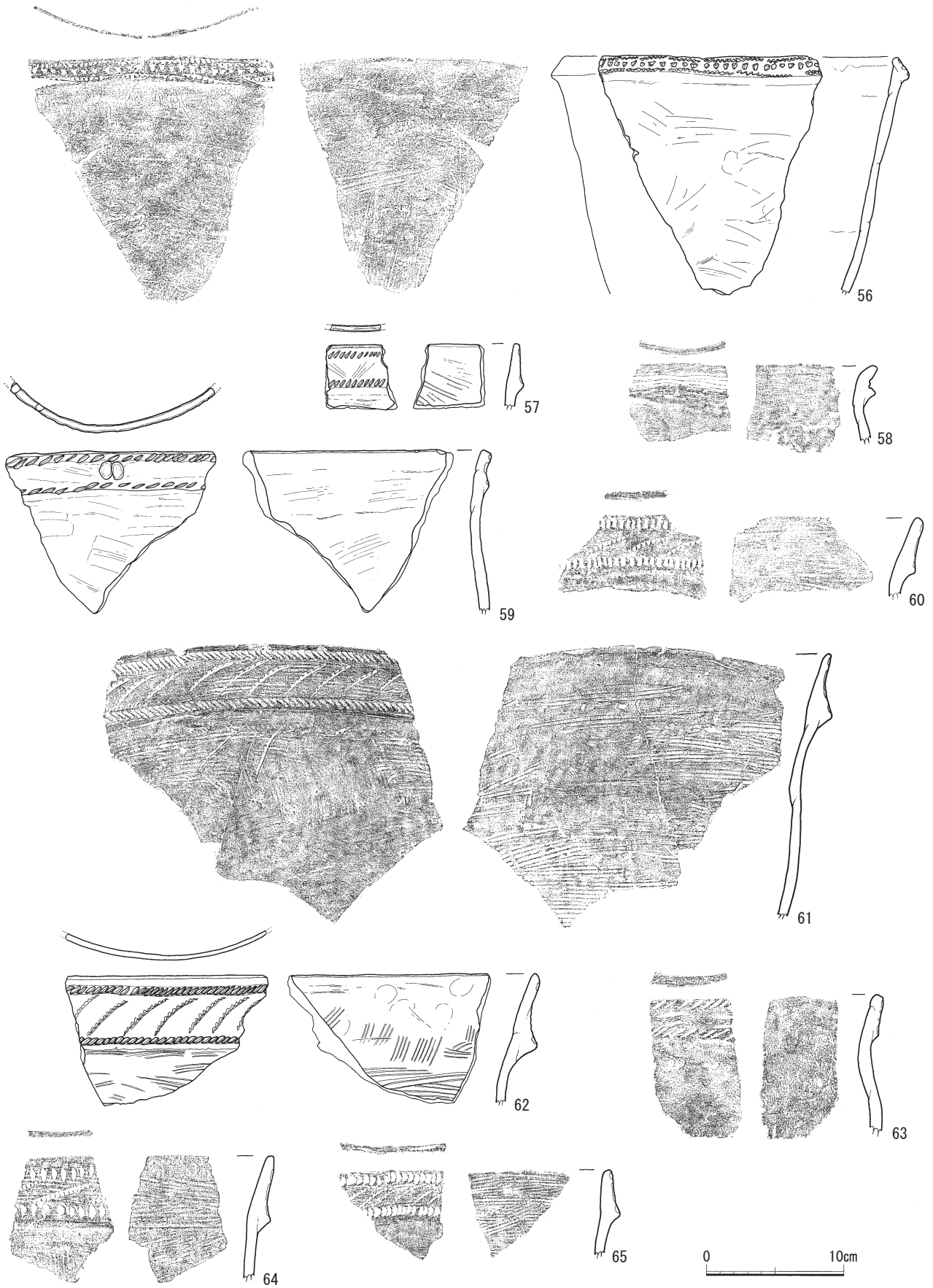


図11 縄文土器4 (Aトレンチ)

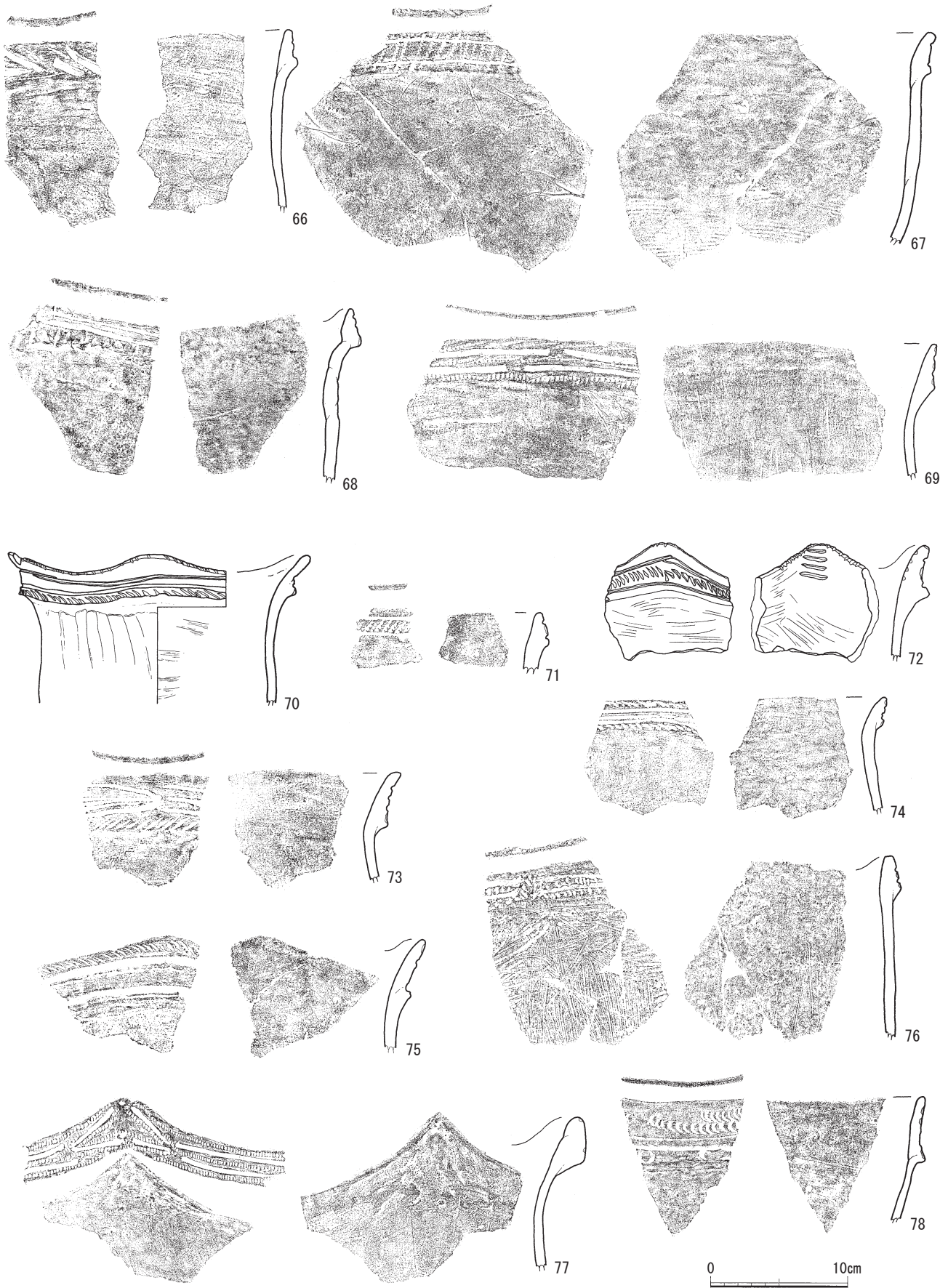


図12 縄文土器5 (Aトレンチ)

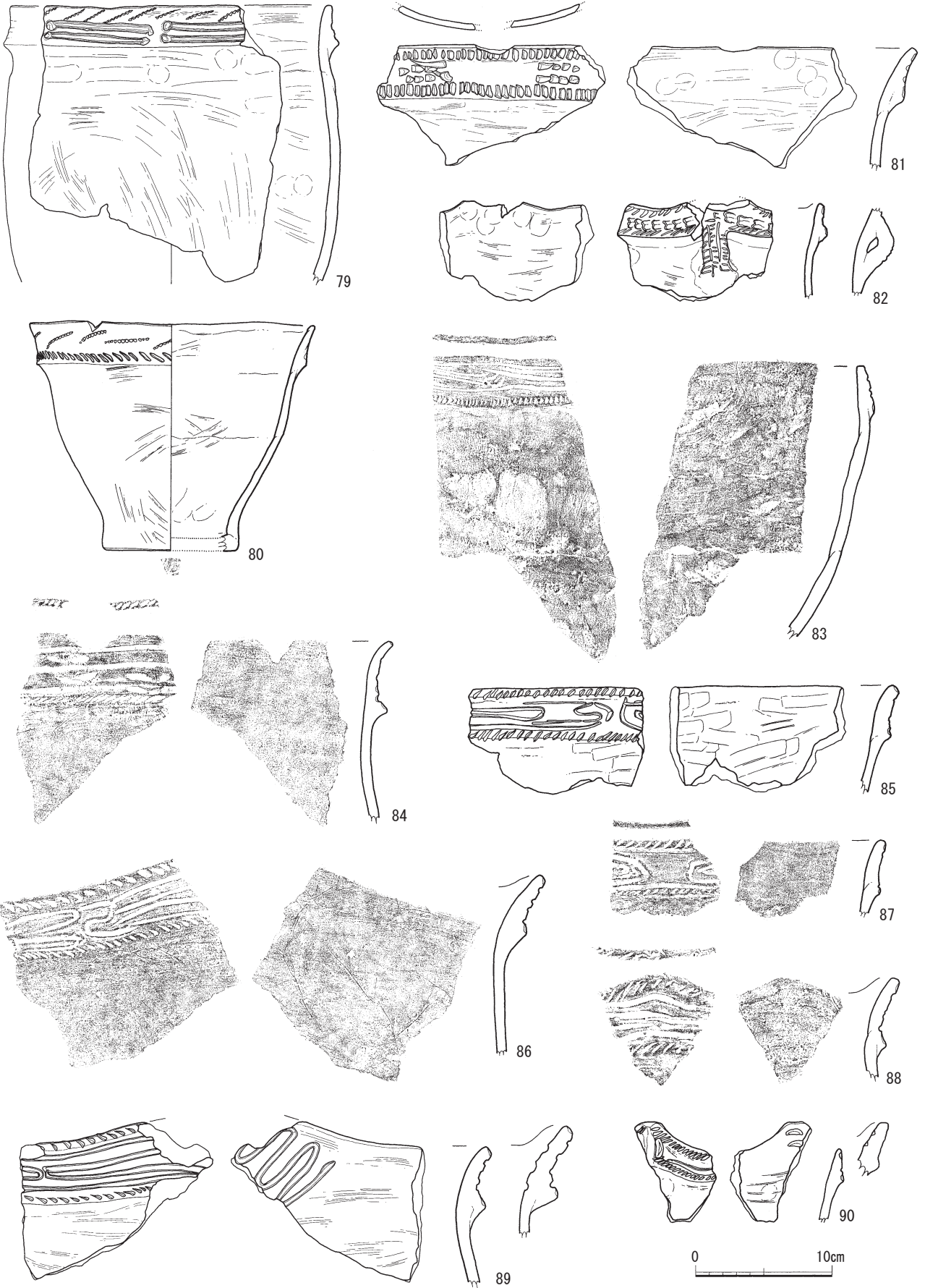


図13 縄文土器6 (Aトレンチ)

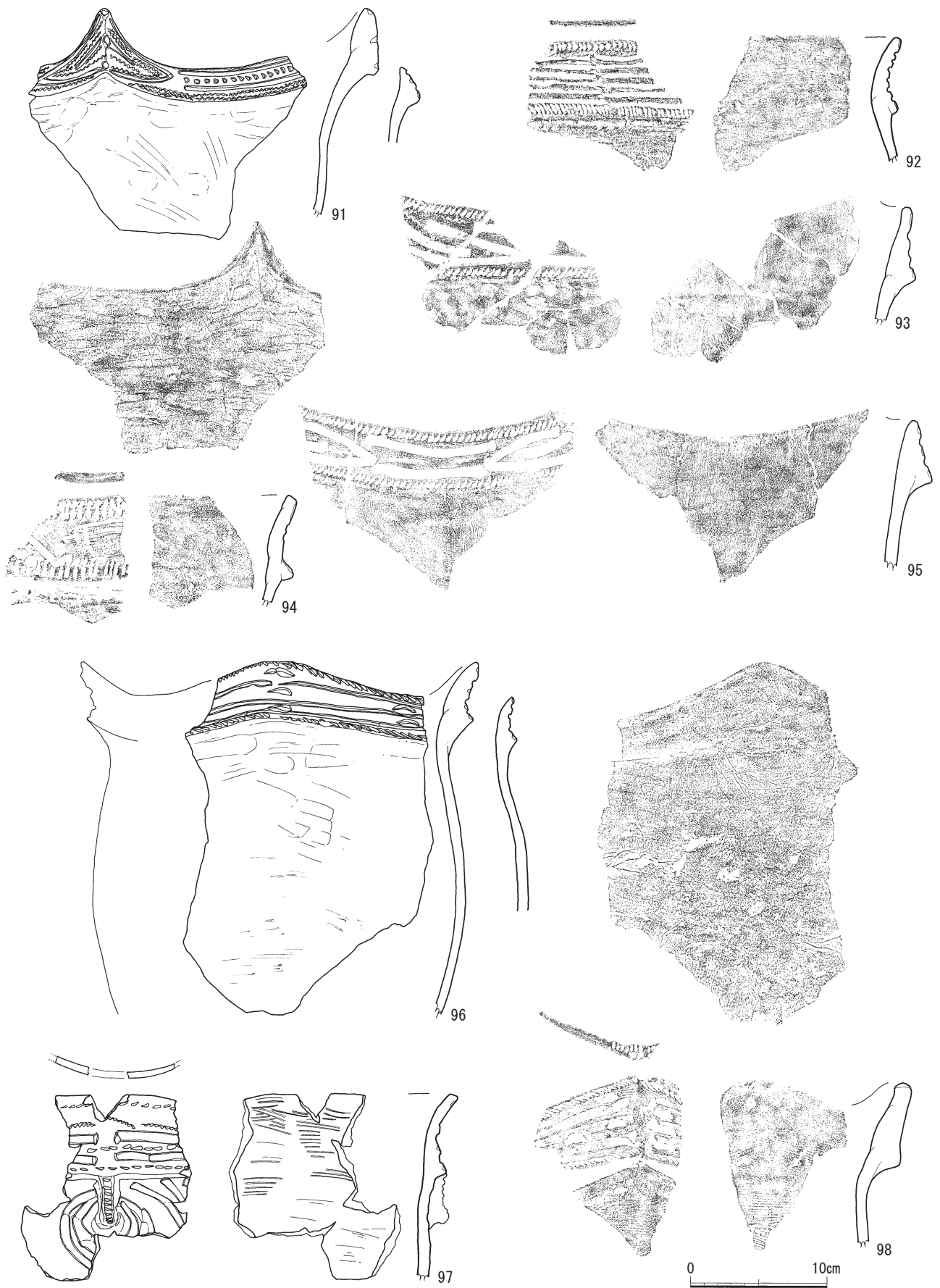


図14 縄文土器7 (Aトレンチ)

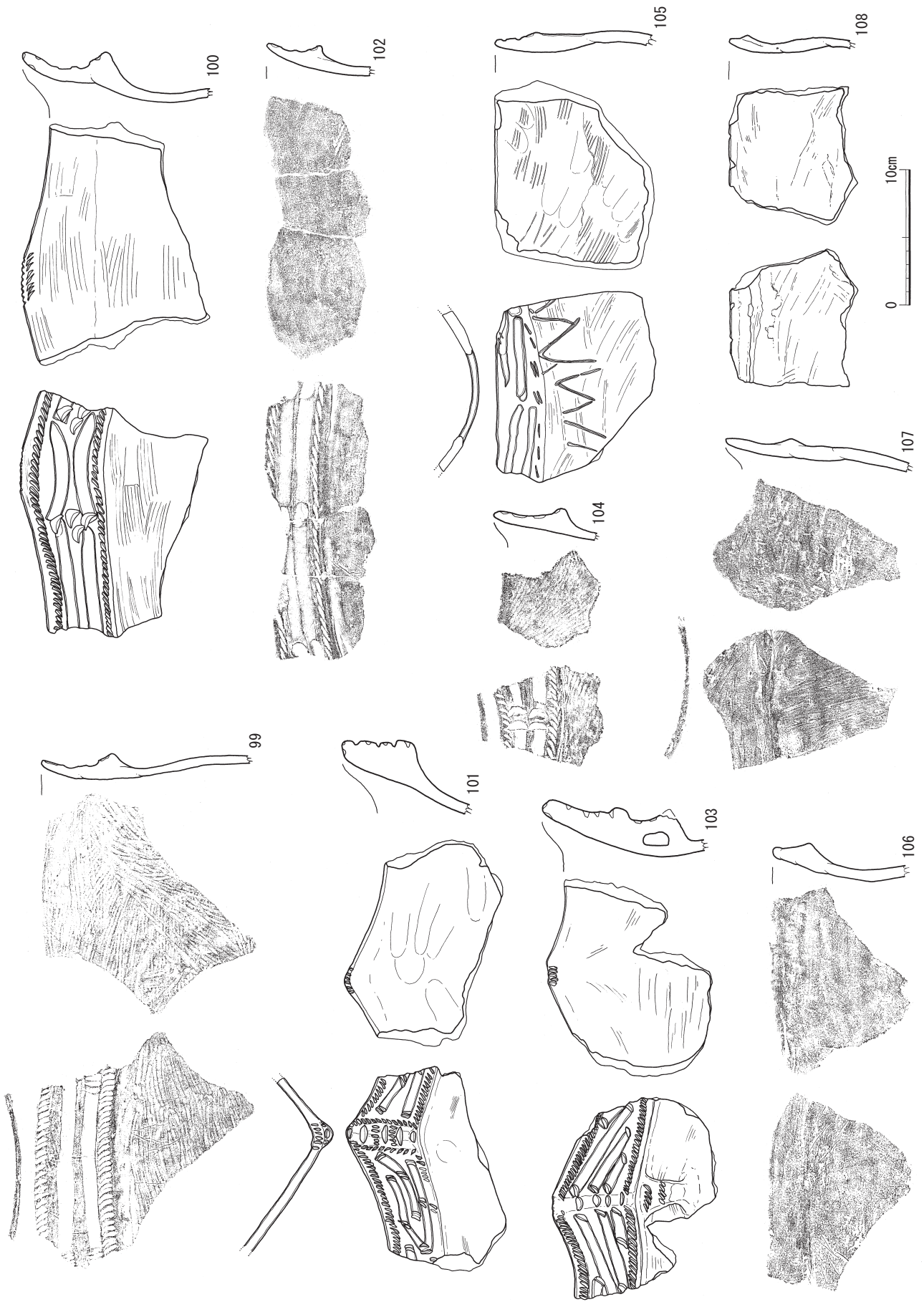


図15 縄文土器8 (アトレンチ)



図16 縄文土器9 (Aトレンチ)

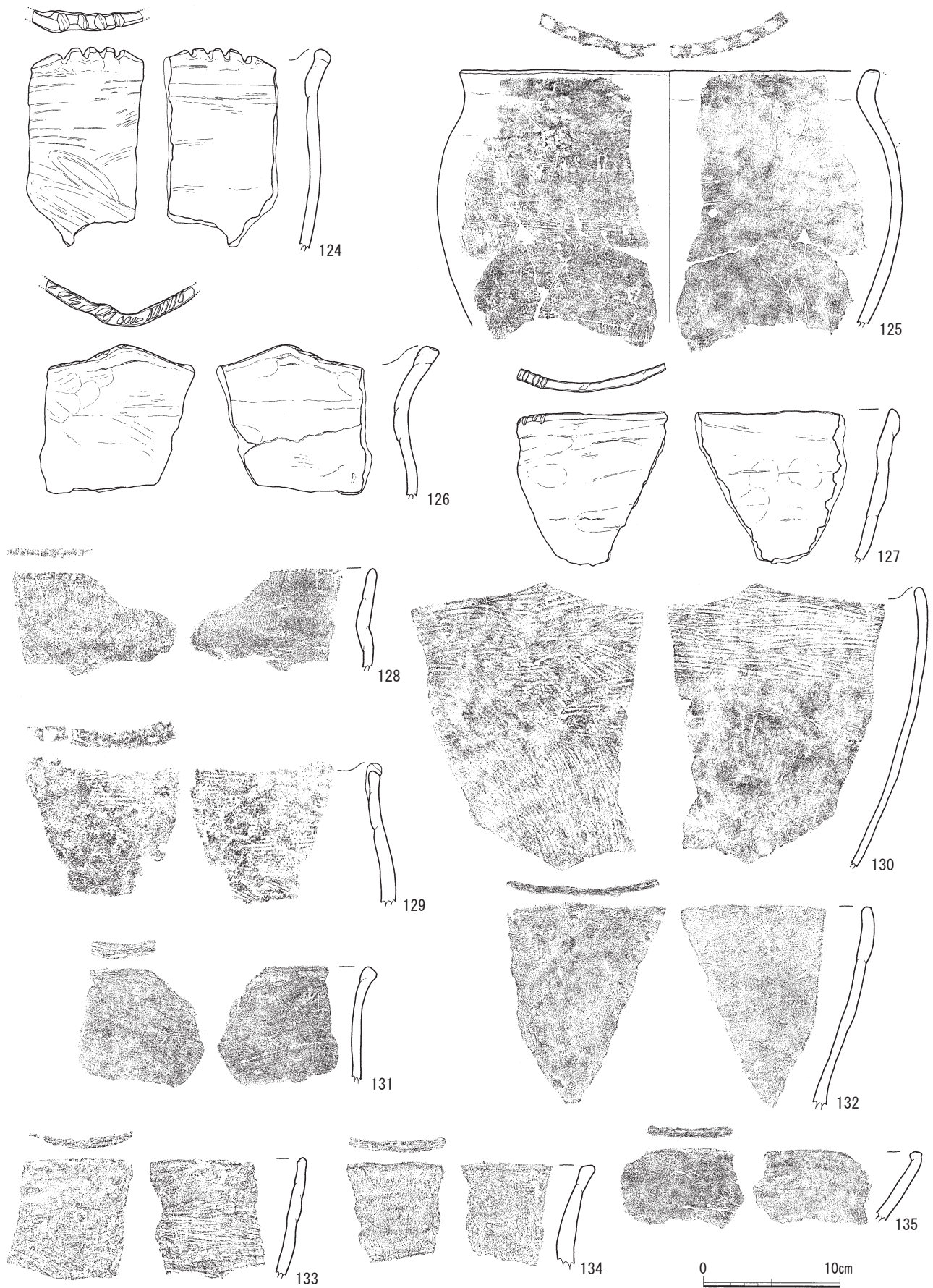


図17 縄文土器10 (Aトレンチ)

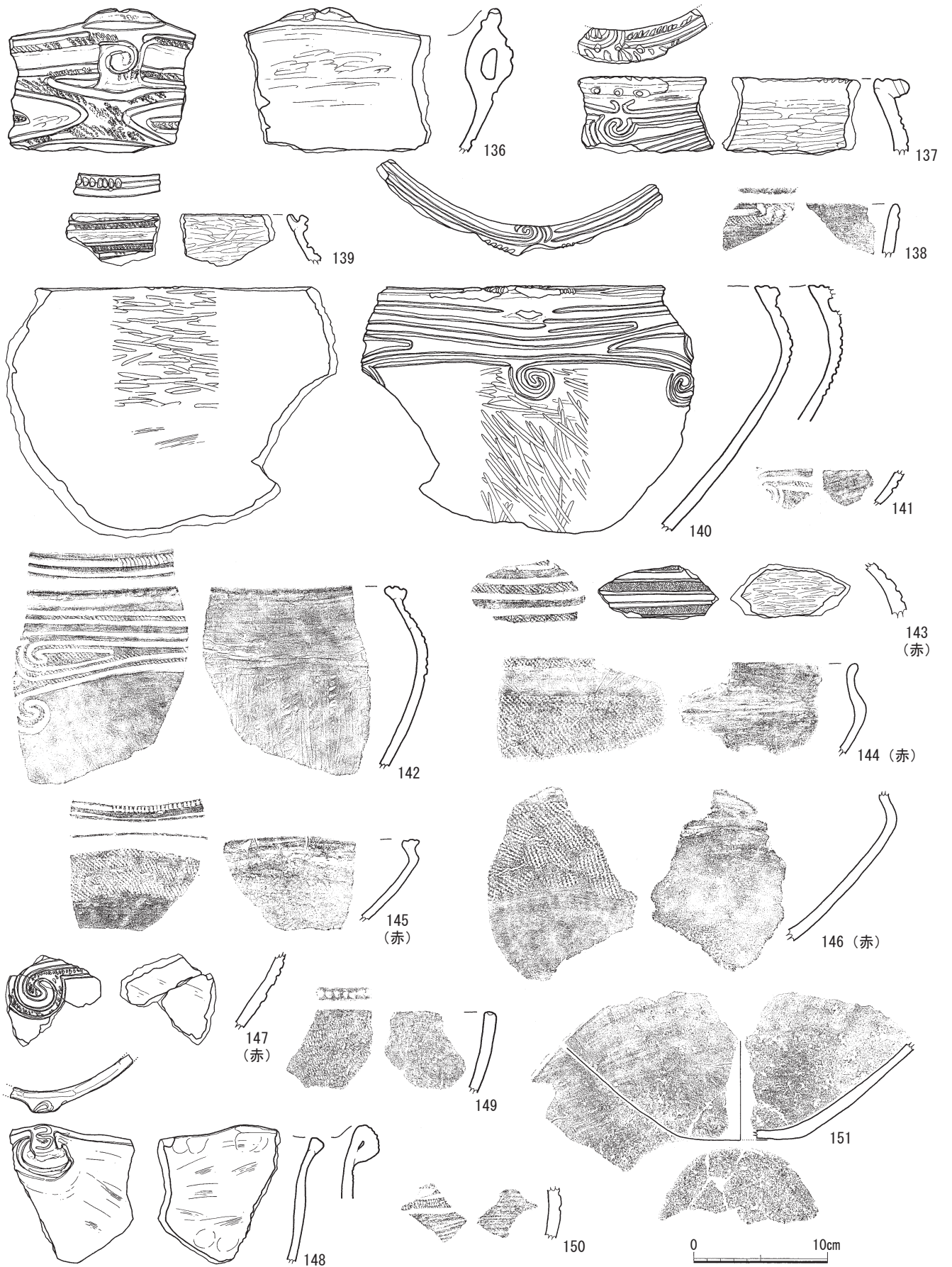


図18 縄文土器11 (Aトレンチ)

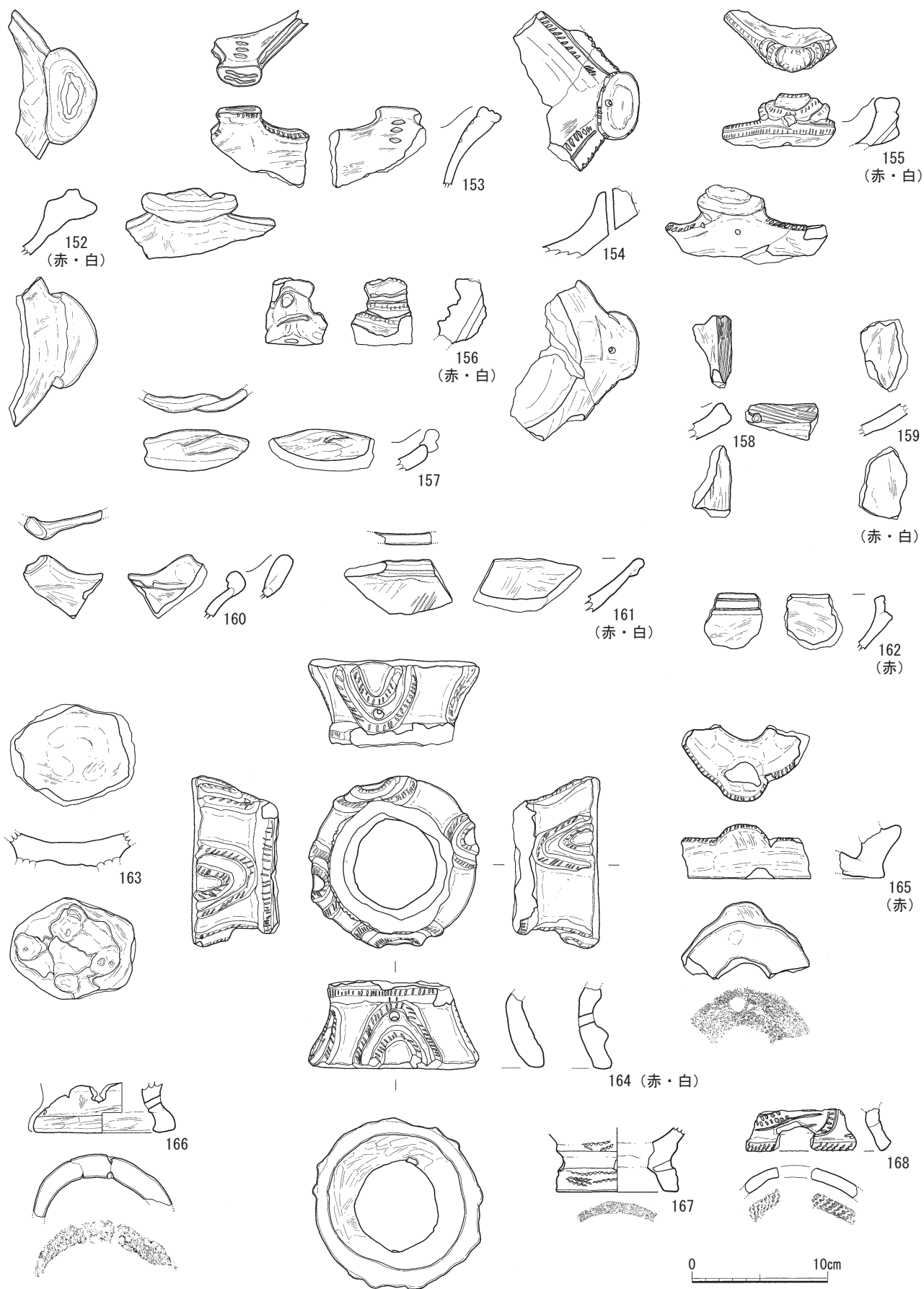


図19 縄文土器12 (Aトレンチ)

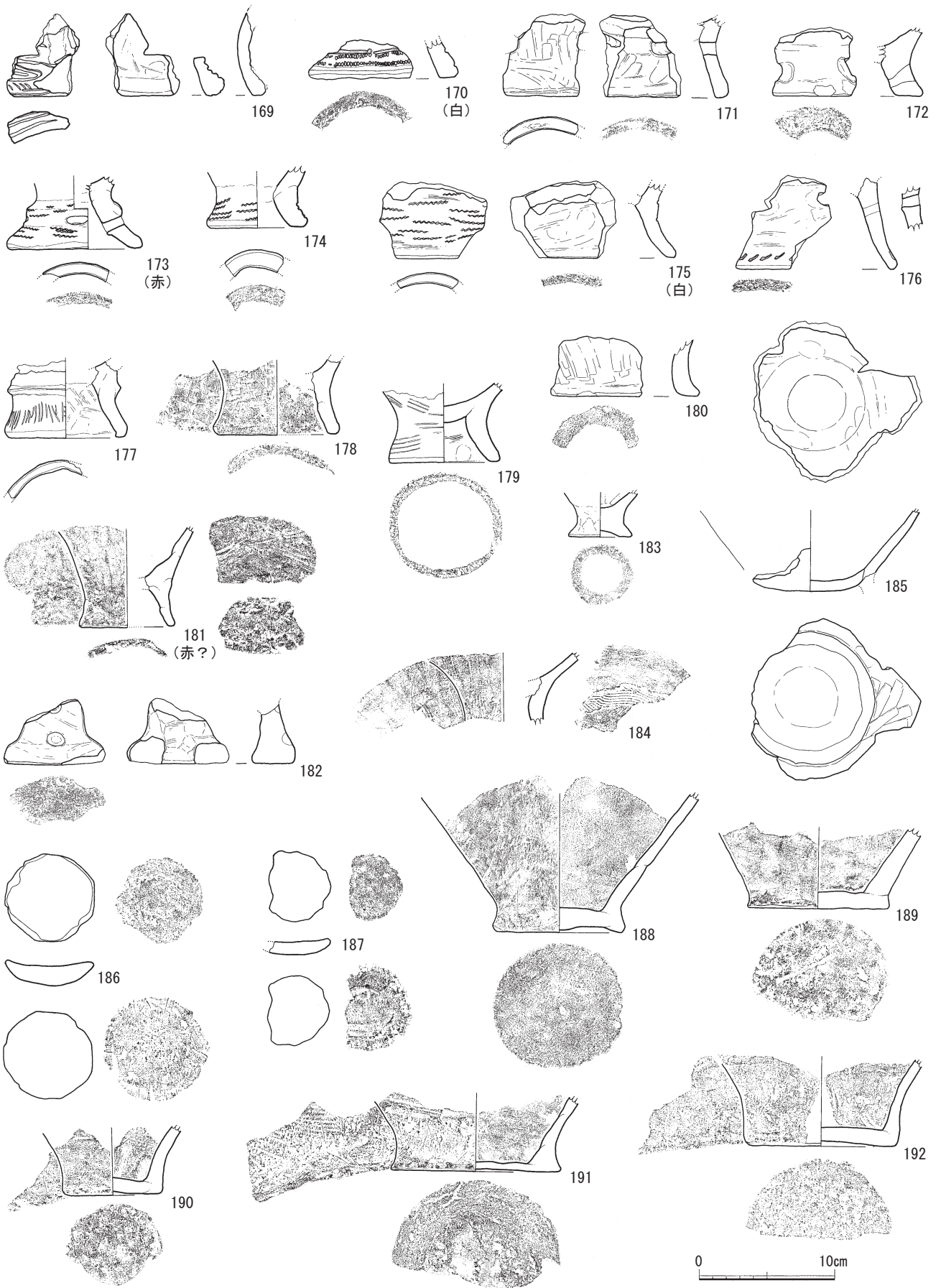


図20 縄文土器13 (Aトレンチ)

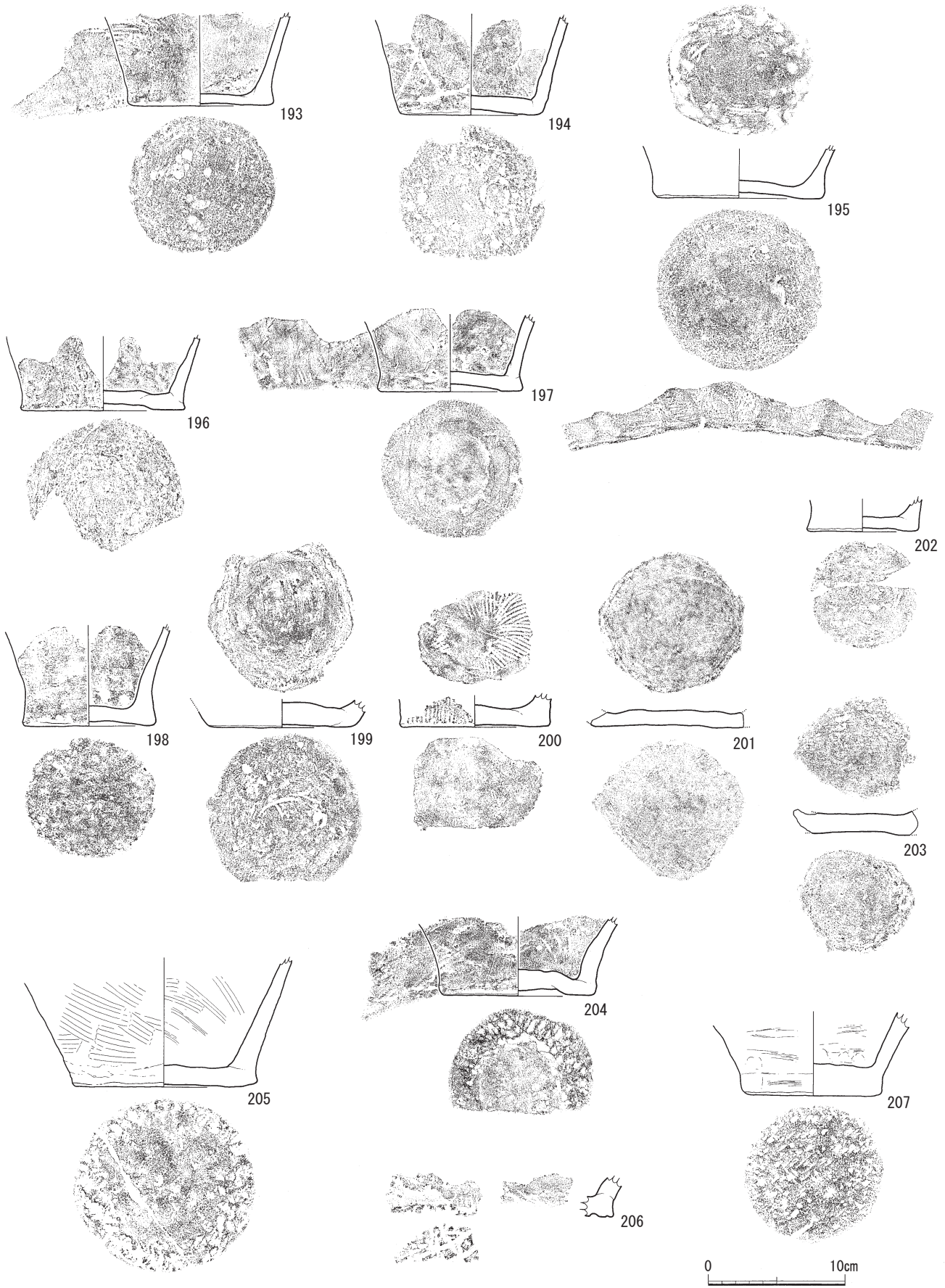


図21 縄文土器14 (Aトレンチ)

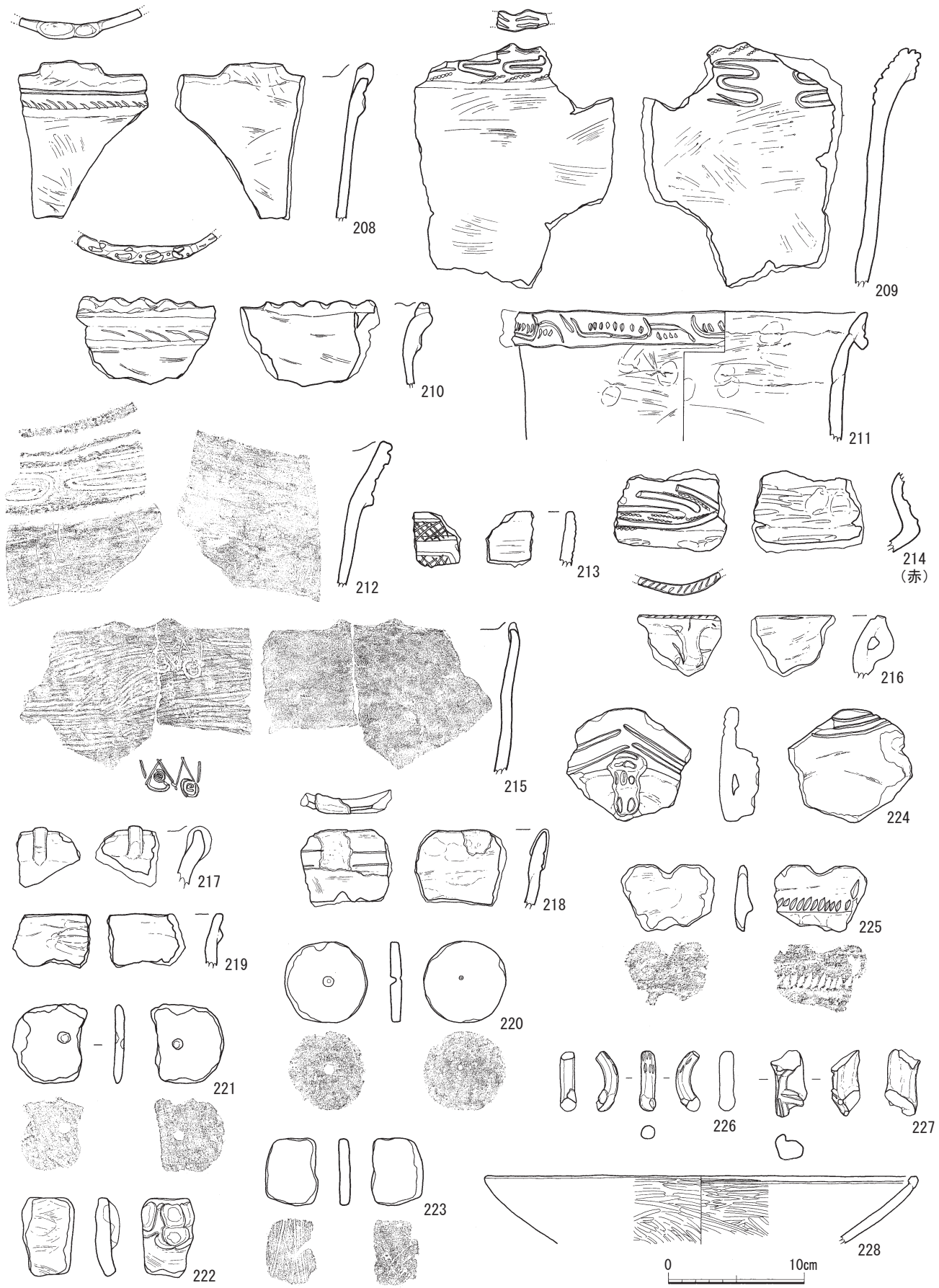


図22 縄文土器15 (Aトレンチ)

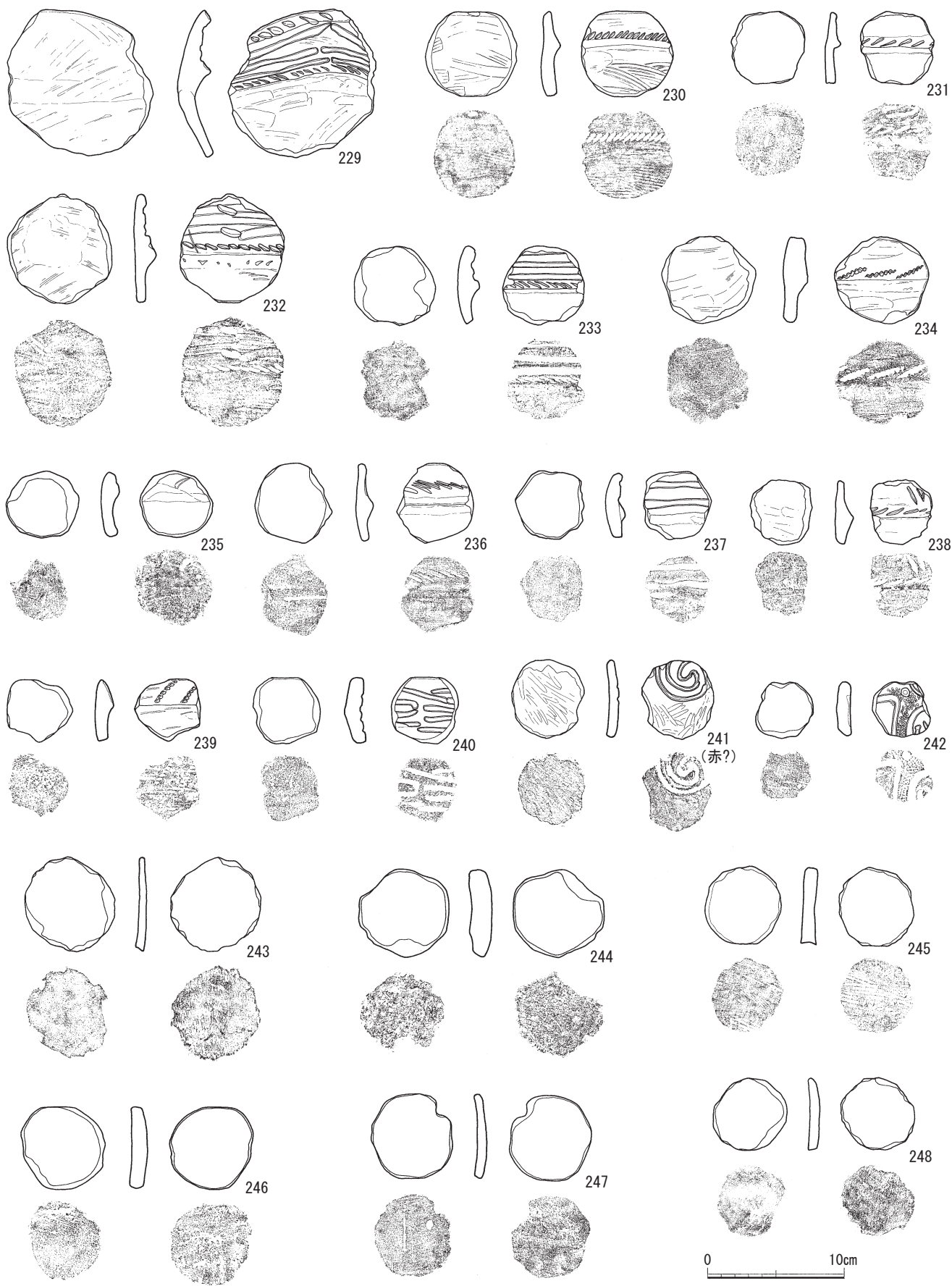


図23 縄文土器16 (Aトレンチ)

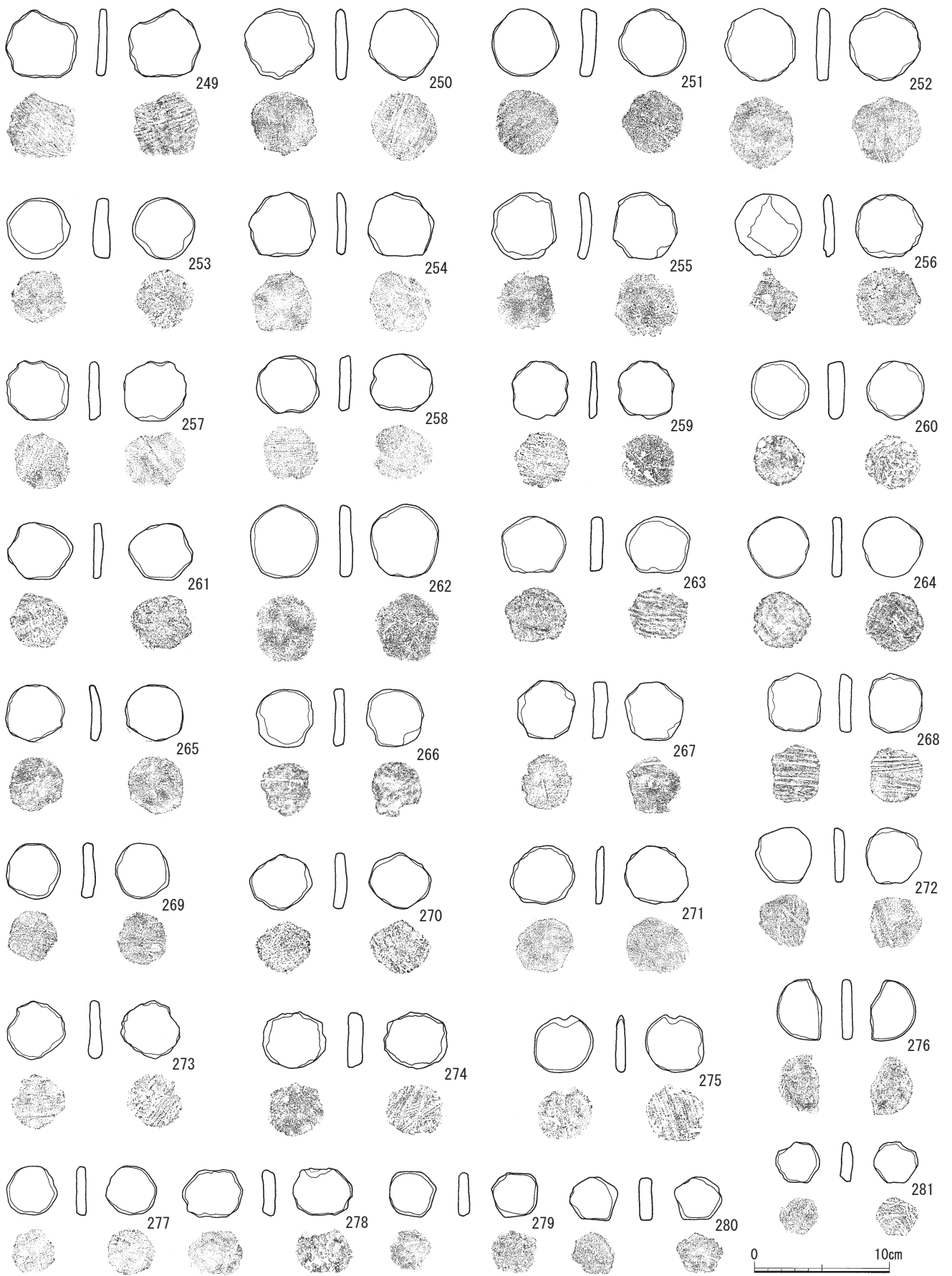


図24 縄文土器17 (Aトレンチ)



図25 縄文土器18 (Bトレンチ)



図26 縄文土器19 (Bトレンチ)

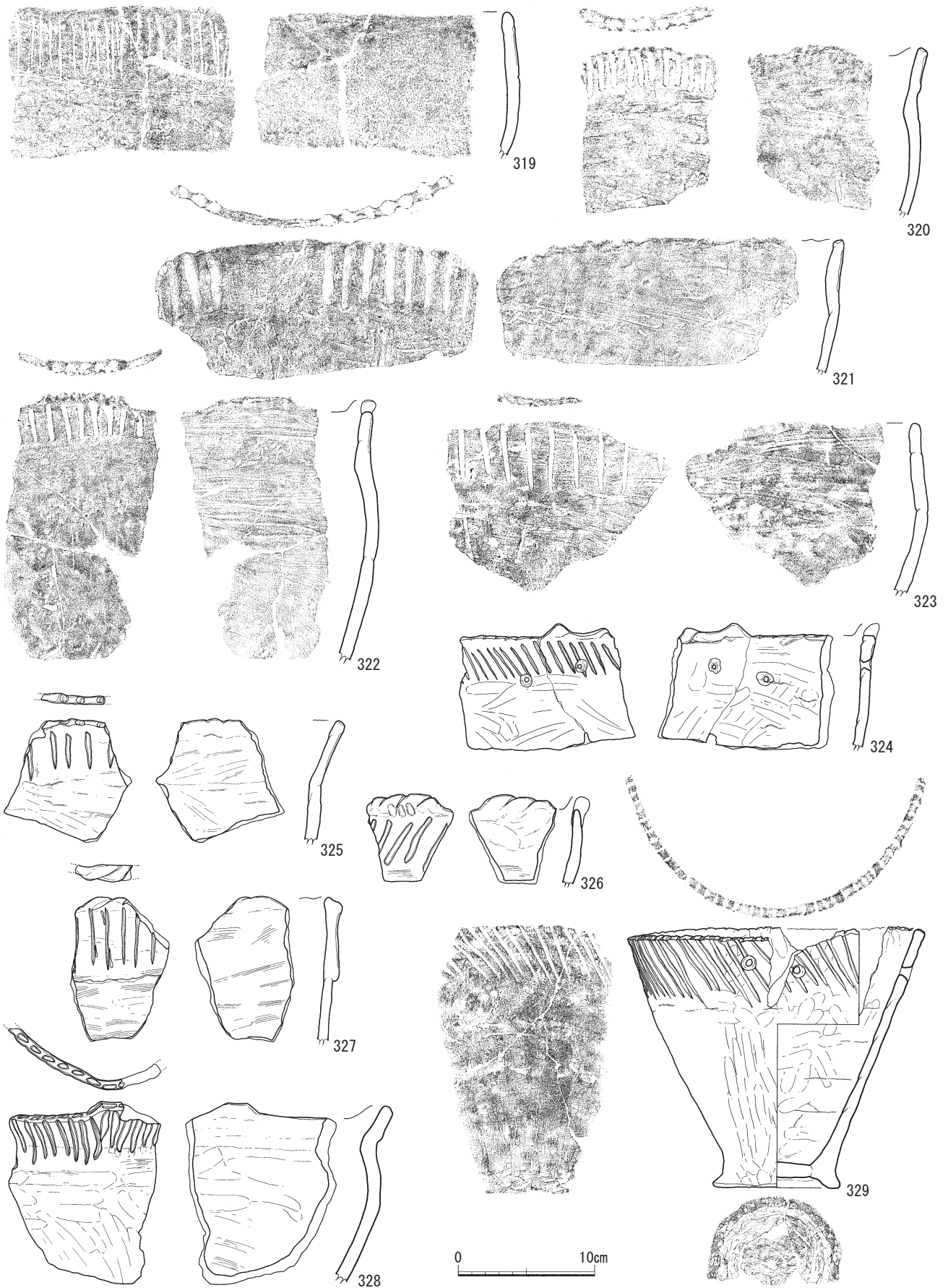


図27 縄文土器20 (Bトレンチ)

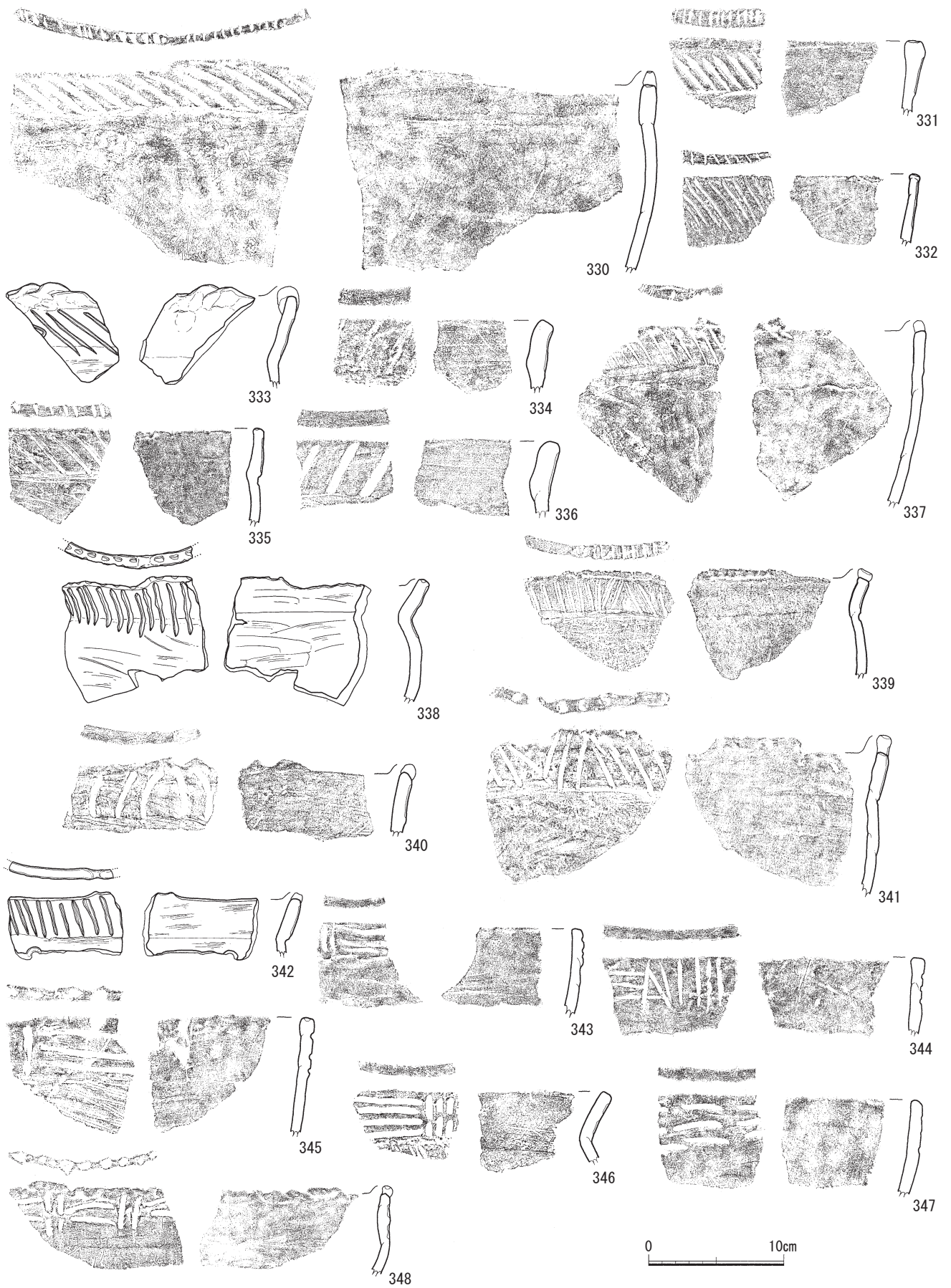


図28 縄文土器21 (Bトレンチ)

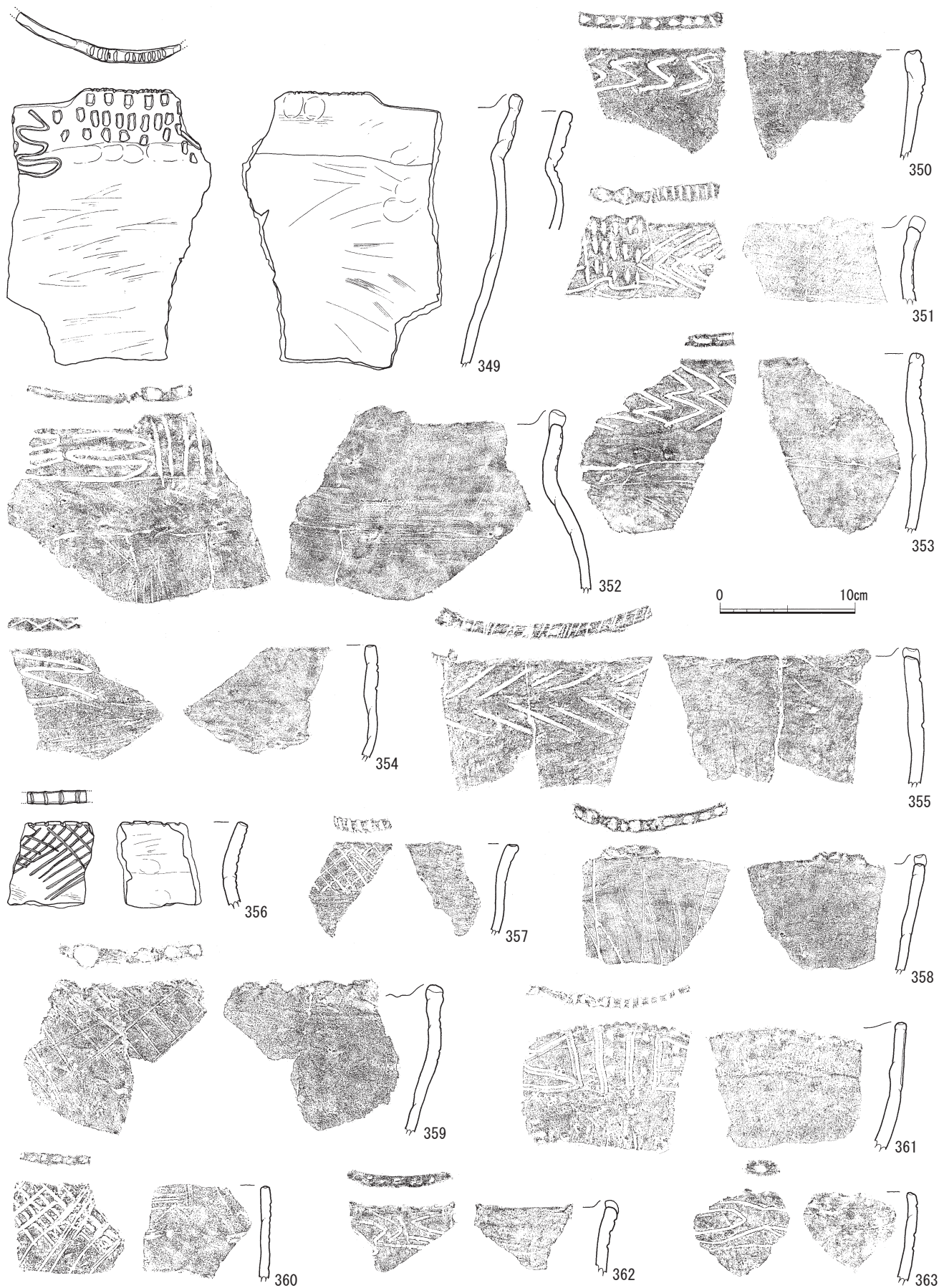


図29 縄文土器22 (Bトレンチ)

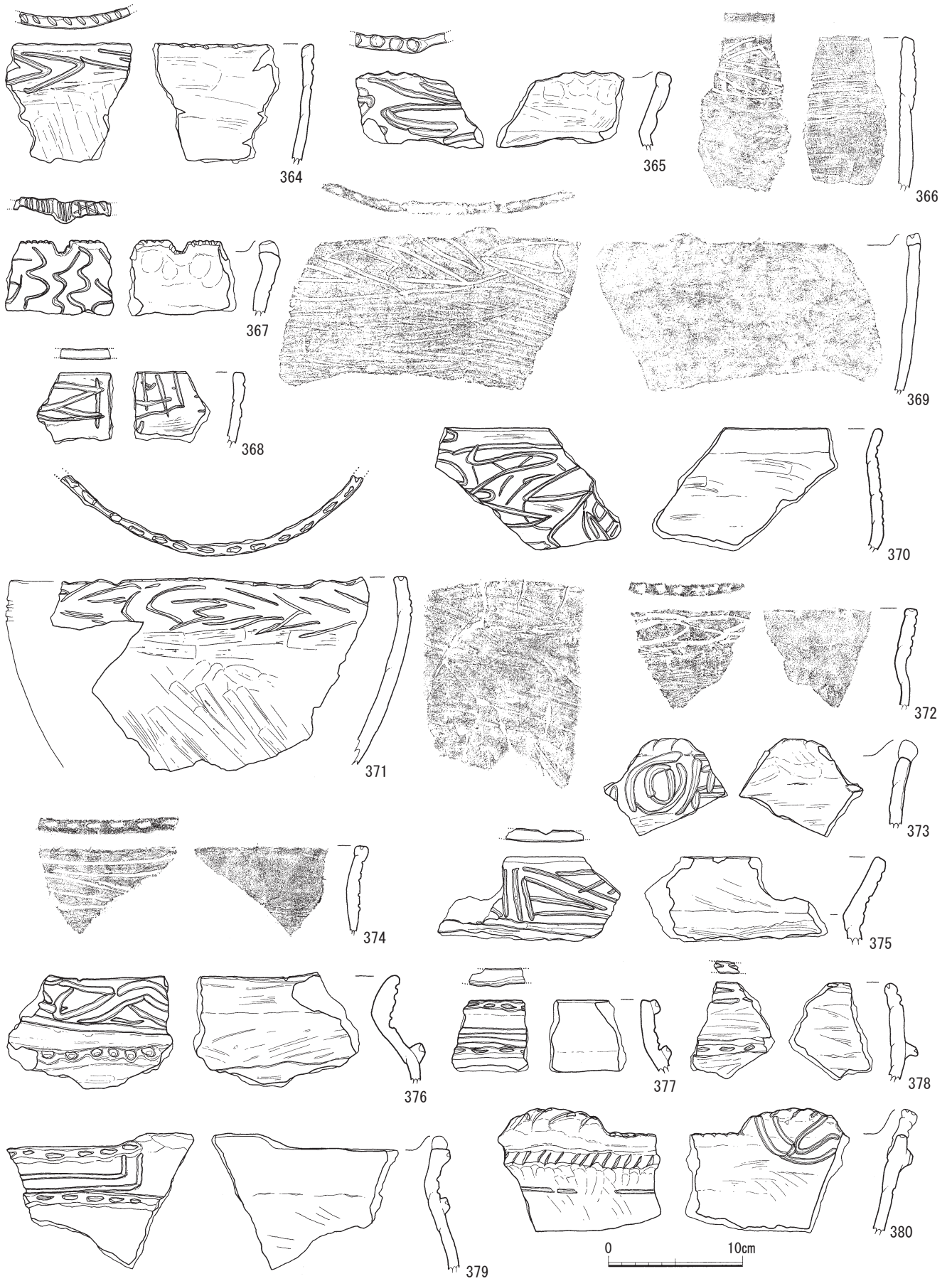


図30 縄文土器23 (Bトレンチ)

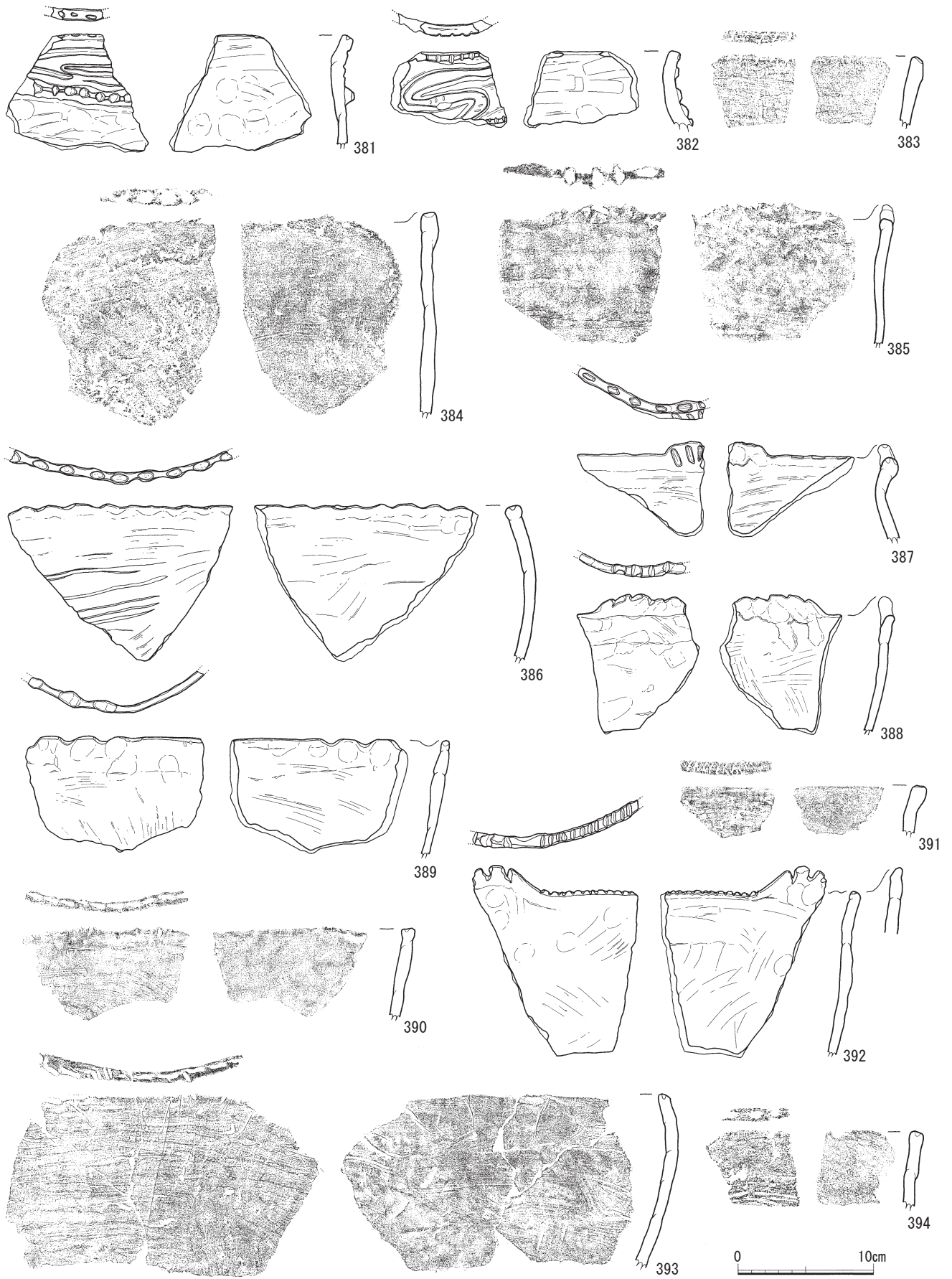


図31 縄文土器24 (Bトレンチ)

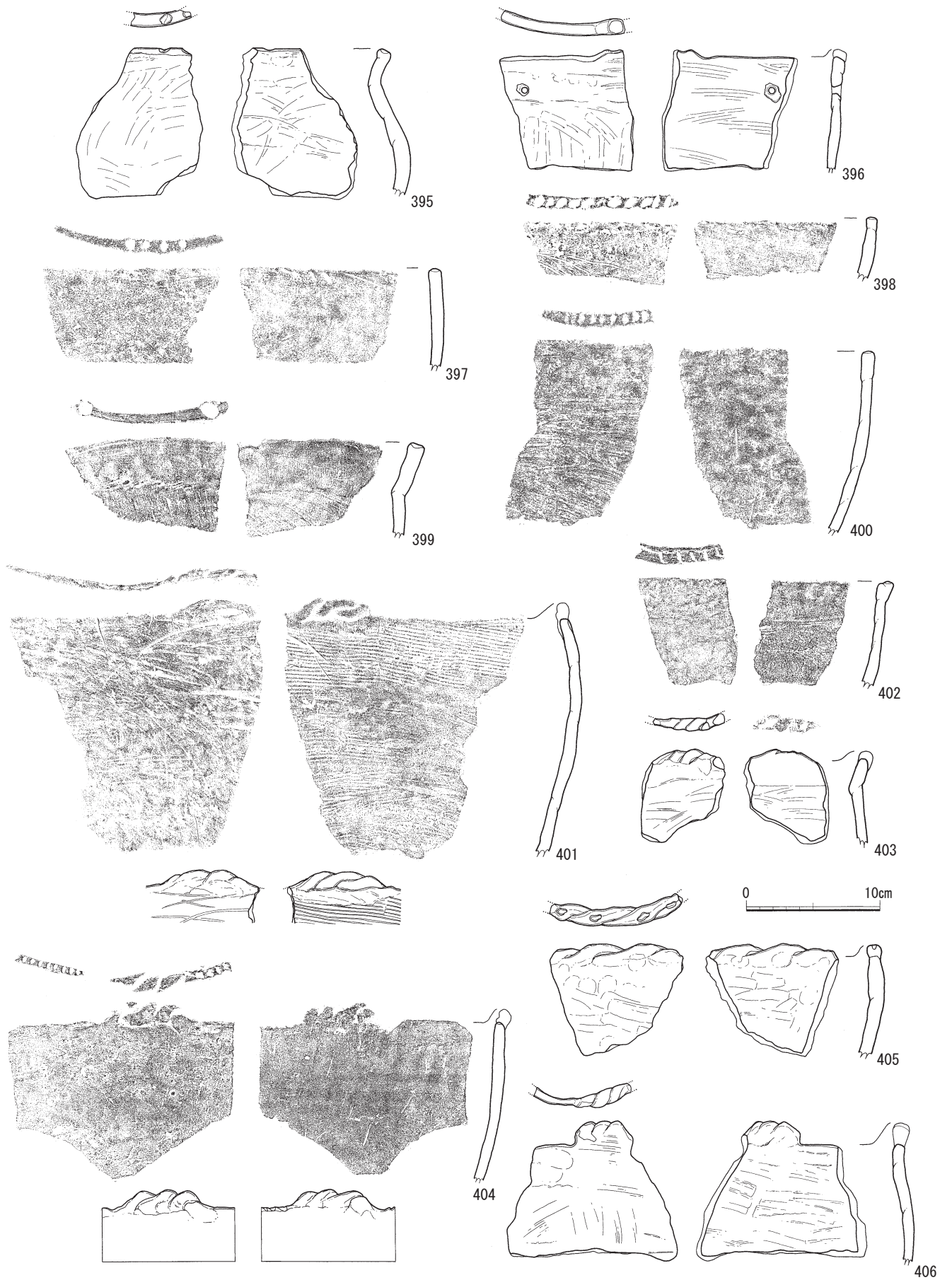


図32 縄文土器25 (Bトレンチ)

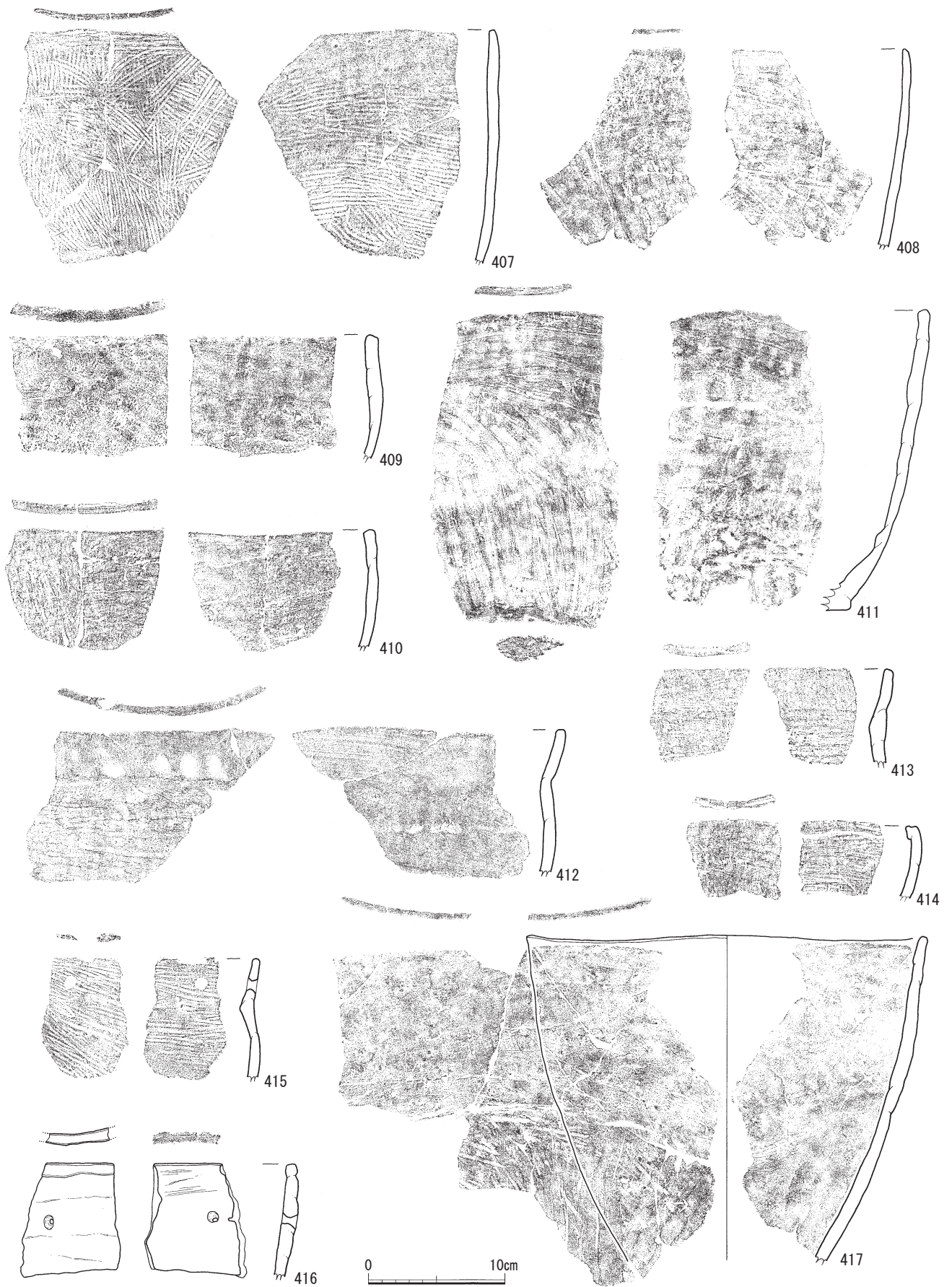


図33 縄文土器26 (Bトレンチ)

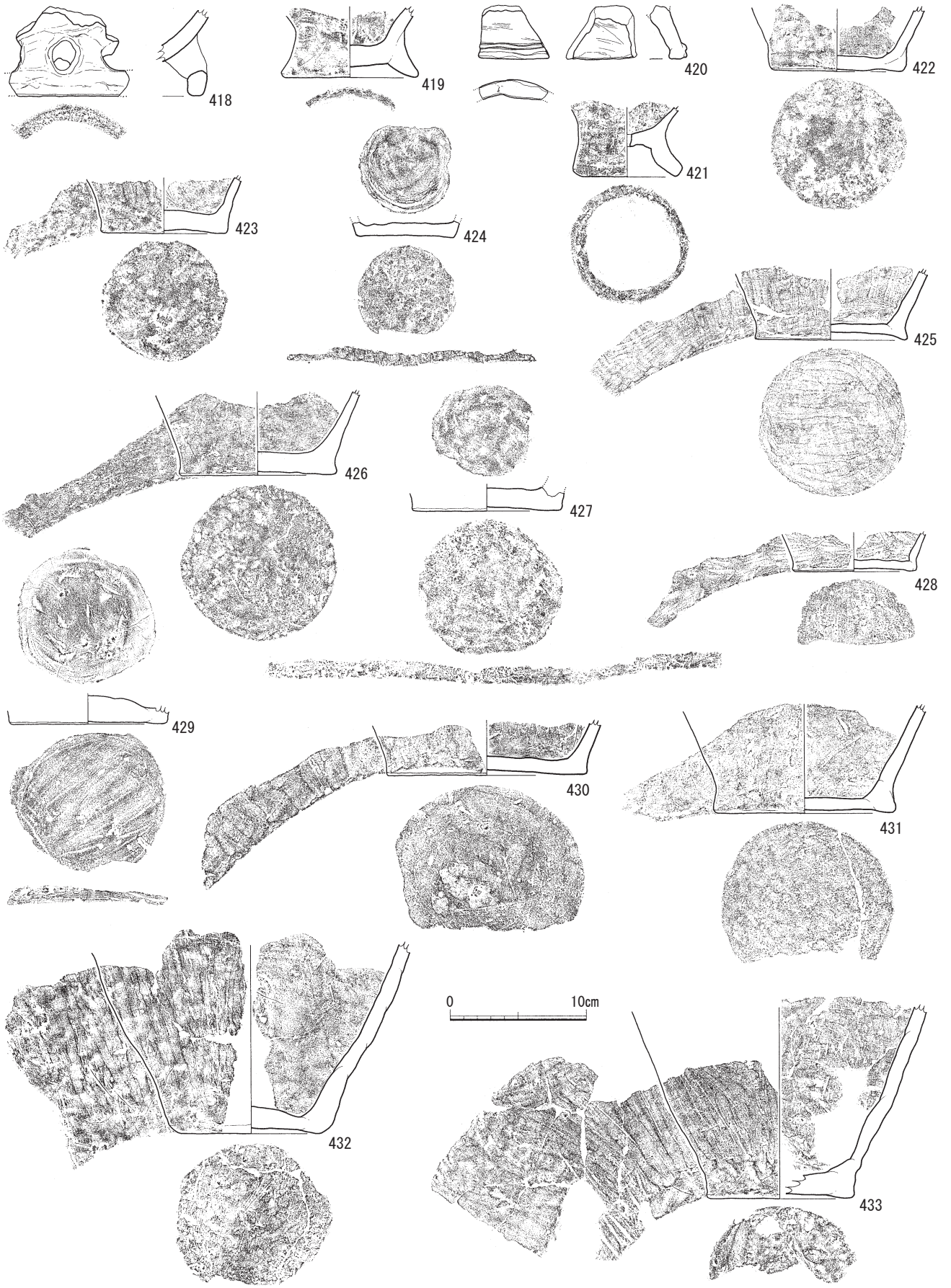


図34 縄文土器27 (Bトレンチ)

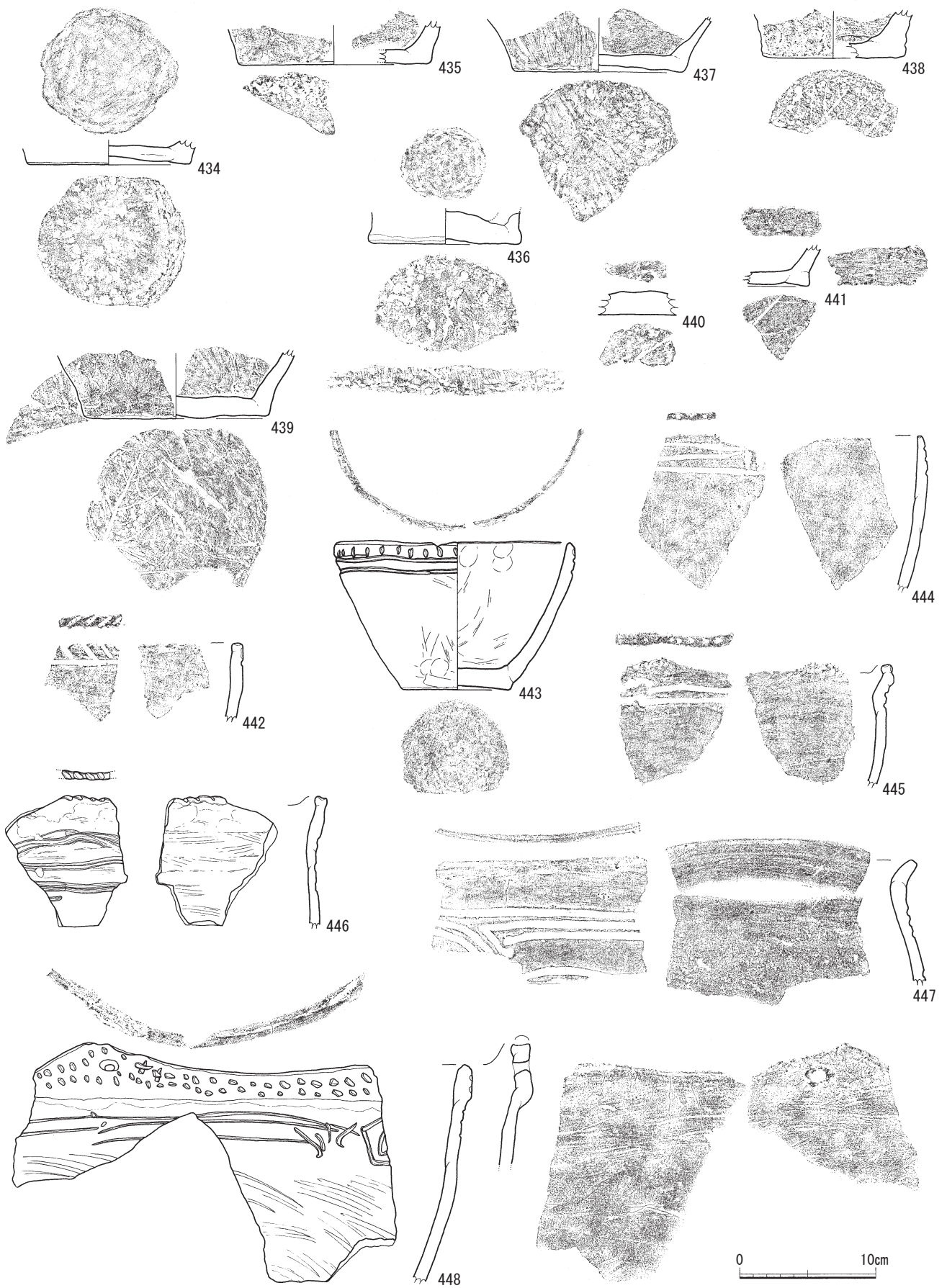


図35 縄文土器28 (Bトレンチ)



図36 縄文土器29 (Bトレンチ)

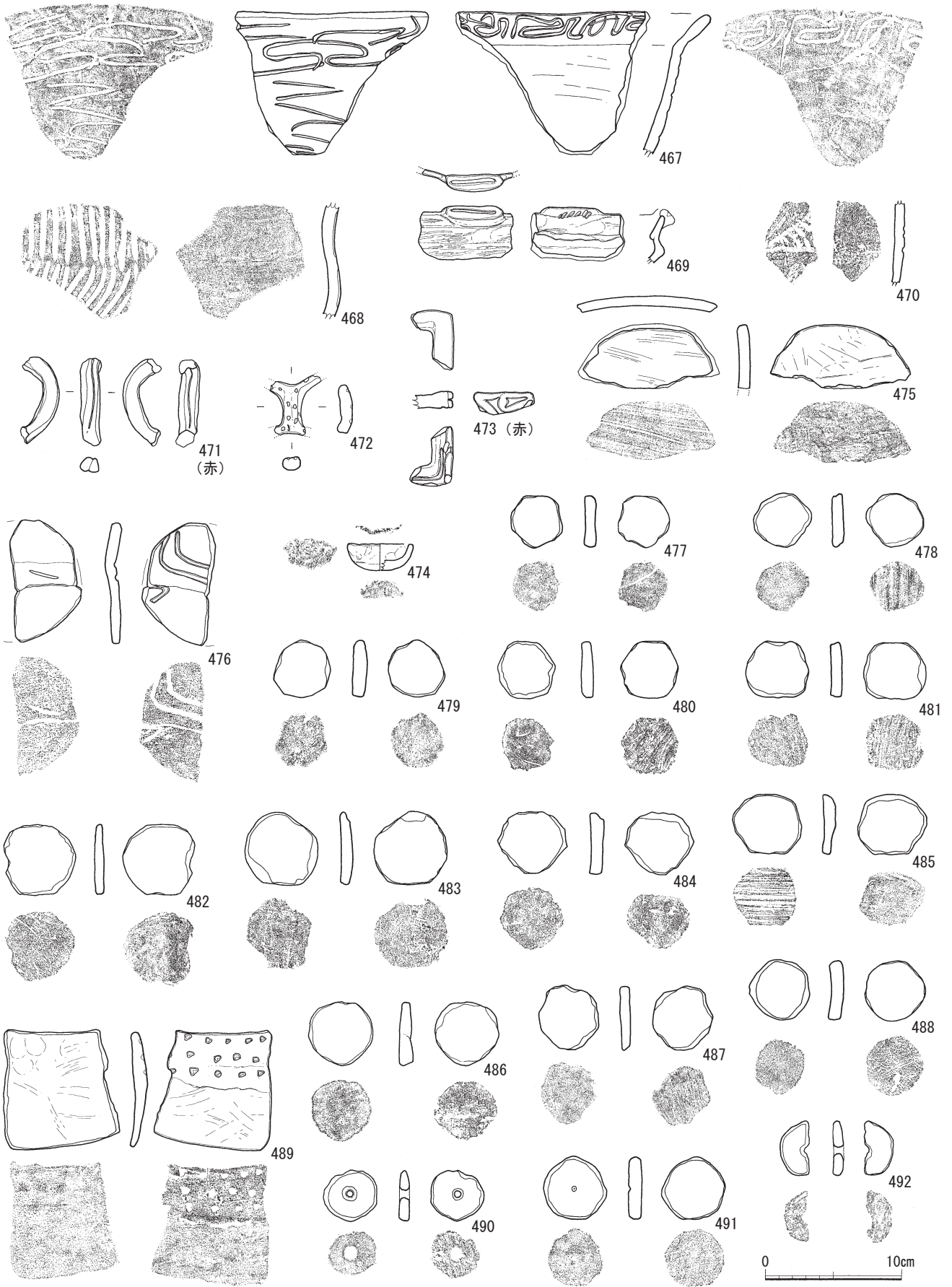


図37 縄文土器30 (Bトレンチ)



図38 縄文土器31

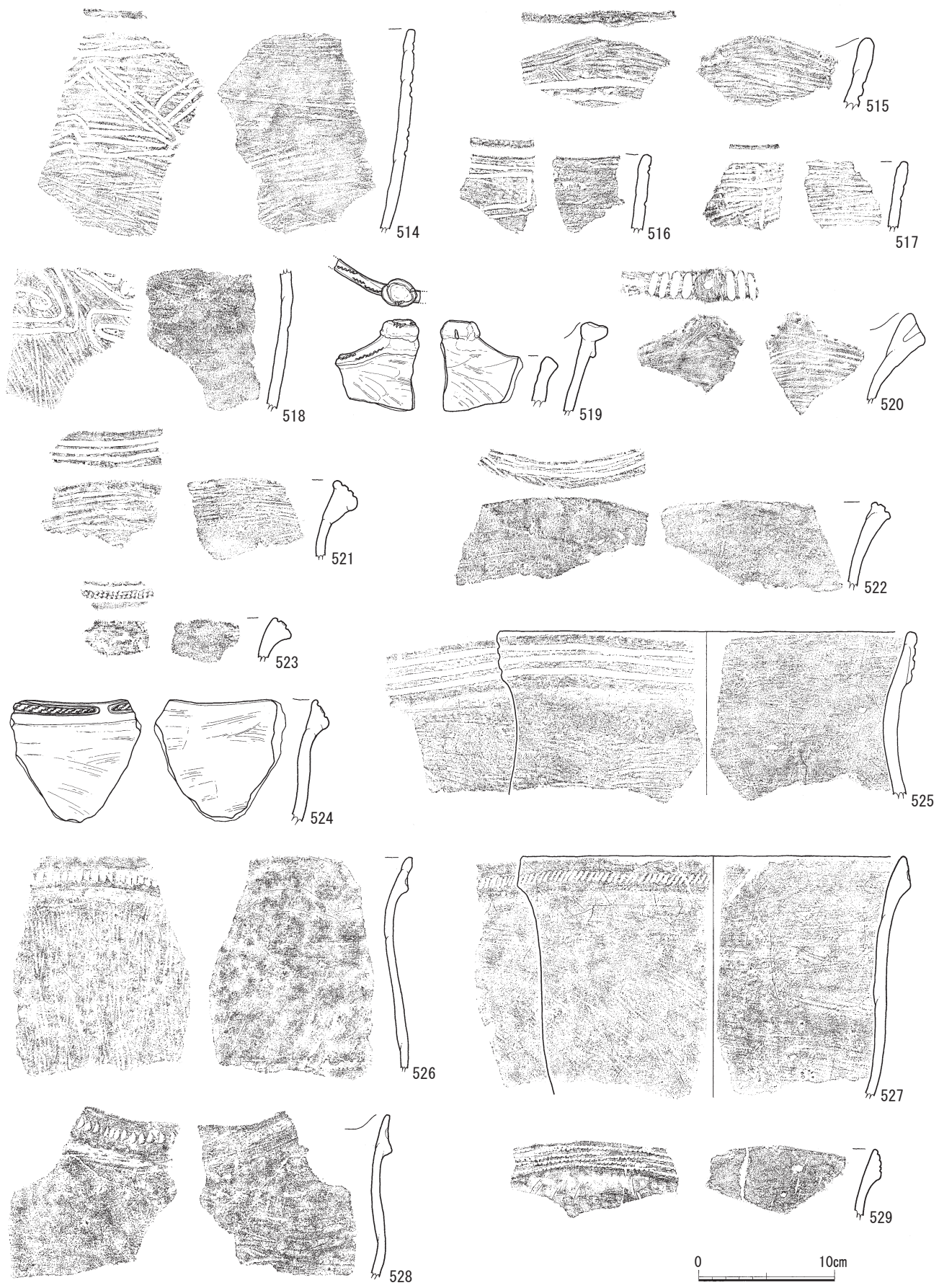


图39 绳文土器32

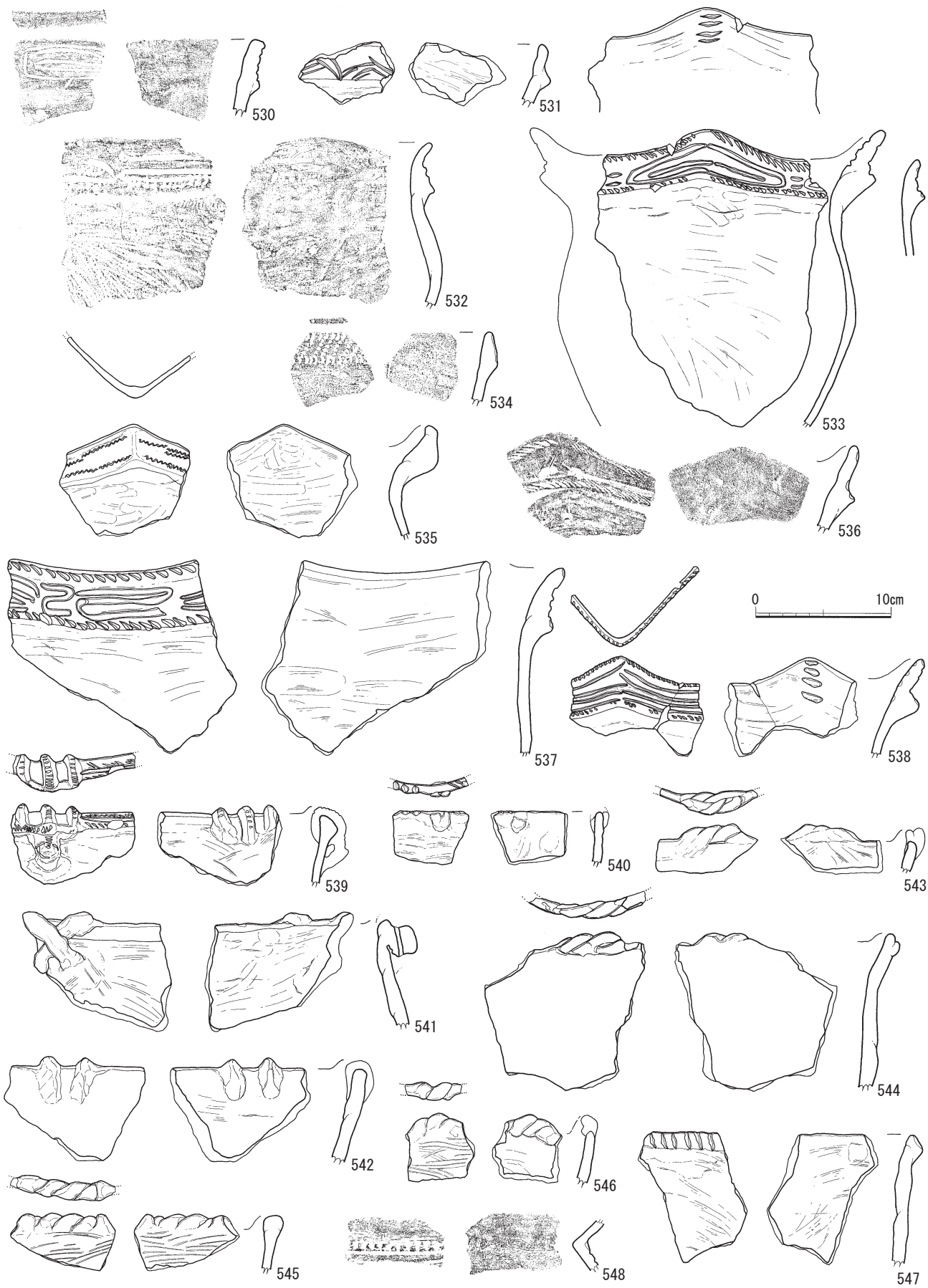


图40 绳文土器33



図41 縄文土器34

② 石器・石製品

スクレイパー (図42 S1・S2)

S1は灰褐色を呈する比較的緻密な安山岩で、左側面に自然面を取り込む厚みのあるやや縦長の剥片を素材とする。表面は先行するネガティブな剥離面である。右側面に表裏から調整剥離を加えて刃部としている。刃部には「つぶれ」や摩耗が生じている。

S2は緻密な黒色安山岩のやや厚みのある不定形剥片を素材とするエンドスクレイパー(搔器)である。打瘤の厚みを除去した後、下縁部分に腹面側から急傾斜剥離を施し刃部とする。刃部は比較的急角度で縁辺には微細な剥離が生じている。

加工痕・使用痕のある剥片 (図42 S3～S8)

S3は自然面を打面に剥出された漆黒色不透明な上牛鼻産とみられる剥片である。周縁に不規則な小剥離や微細剥離が認められる。

S4は背面及び右側縁に自然面を残す上牛鼻産とみられる黒曜石の剥片である。左側縁の縁辺に微細な剥離が認められる。

S5は上牛鼻産とみられる黒曜石製で、左側縁上部に自然面を残す。右側縁及び下縁に背面側から粗い2次調整を加える。下縁部分に使用痕とみられる小剥離や刃部の摩耗が認められる。

S6も上牛鼻産とみられる黒曜石の剥片で、左側面は折れ面となっている。右側面から下縁の縁辺に不規則な剥離が生じている。

S7は灰黒色ガラス質で白色の不純物を多く含む三船産とみられる黒曜石製の剥片である。背面稜上には被熱の痕跡が、素材剥片の打面附近には不規則な2次の剥離が認められる。右下側辺及び左側辺下半に使用に伴うとみられる不規則な微細剥離と刃部の摩耗が認められる。

S8も上牛鼻産とみられる黒曜石で、素材剥片の打面には腹面側から2次調整が加えられている。下辺は折れもしくは切断に伴う剥離面で、残存する左側辺に背面側から調整が加えられ、縁辺には微細な剥離が認められる。

石核 (図42 S9)

S9は漆黒色不透明な上牛鼻産とみられる黒曜石の石核である。背面に自然面を有する角礫素材の石核で、平坦な自然面を打面とし、左右に打点を移動しながら剥片を剥離している。

磨製石斧 (図43 S10～S20, 図44 S21・S22)

S10は砂岩製の磨製石斧である。基端部に折れ面が残り、剥離や敲打による調整痕がこれを切ることから、基部に折れが生じた後、再生利用された可能性が高い。剥離調整後、ほぼ全面に敲打が施されている。器面風化により刃部付近でも明瞭な研磨痕は認められない。刃部断面形は両凸刃、平面形は円刃とみられ、刃部周縁には2次の剥離「つぶれ」が生じている。

S11は緑色を帯びる石英斑岩製とみられる乳房状の磨製石斧である。基部を欠損後、敲打具に転用されたときとみられ、基部側の折れ面及び刃部に顕著な敲打による「つぶれ」が生じている。

S12は灰白色を呈する細粒砂岩製の乳房状の磨製石斧で、刃部は両凸刃で本来は円刃であったとみられる。基部に折れが生じ、敲打具に転用されたことにより「つぶれ」や削れが生じ、一見、直刃のようにみえる。

S13は石英斑岩製の両凸刃の磨製石斧である。基部を欠失するが、表裏面は平坦で、側面は丸みをもつ。ほぼ全面に丁寧な研磨が施されている。

S14は灰色を呈する細粒砂岩製の乳房状とみられる磨製石斧である。刃部は両凸刃で、使用と再研磨によりやや偏刃気味となっている。基部の折れ面に接する両側縁に剥離・敲打による再調整が施されている。

S15は灰白色を呈する硬質砂岩製の磨製石斧の刃部である。基部以下を欠失するが、丁寧な敲打調整と研磨が施され、刃部は両凸刃・円刃となっている。基部の欠損後、敲打具に転用されたときとみられ、基部側の折れ面の凸部及び刃部に敲打の痕跡が残る。

S16は黒色の硬質頁岩製の定角式磨製石斧の刃部片である。残存部から刃部は直刃の両凸刃とみられる。全体に丁寧な研磨が施されている。

S17はホルンフェルス製の磨製石斧の基部である。表裏面は平坦な剥離面で、左側辺に部分的に残る丁寧な研磨面を切って、敲打調整が施されている。

S18はホルンフェルス製の定角式の磨製石斧である。両側面には敲打調整の痕跡が認められるが、表裏面とも風化による剥落があり、刃部を欠失する。

S19は灰褐色を呈する砂岩製の乳房状の磨製石斧の基部である。基部端及び刃部を欠失する。刃部面の折れ面の凸部には敲打痕が残る。

S20は濃緑色を呈する蛇紋岩製の磨製石斧の破片である。器面には敲打調整と研磨仕上げの痕跡が残る。

S21は磨製石斧から転用したとみられる敲石である。ホルンフェルス製で表裏面及び側縁の一部に整形時の敲打痕と研磨の痕をとどめている。基端部及び刃部の欠損後、敲石に転用されたときとみられ、上下の折れ面及び側縁の敲打調整を切って、敲打痕や敲打に伴う剥離が生じている。

S22はホルンフェルス製の棒状の亜円礫で、左右側縁及び上・下端に剥離後、敲打調整が加えられている。側縁は丸みを帯びており、全体形状からも敲打具ではなく、磨製石斧の製作途上の未製品と考えられる。

石錘 (図45 S23～S25)

S23は多孔質安山岩の扁平な亜円礫を素材とする石錘である。左右側縁に表裏面からの打ち欠きによる浅い抉りがある。上下縁にも打ち欠きや敲打の痕が残る。

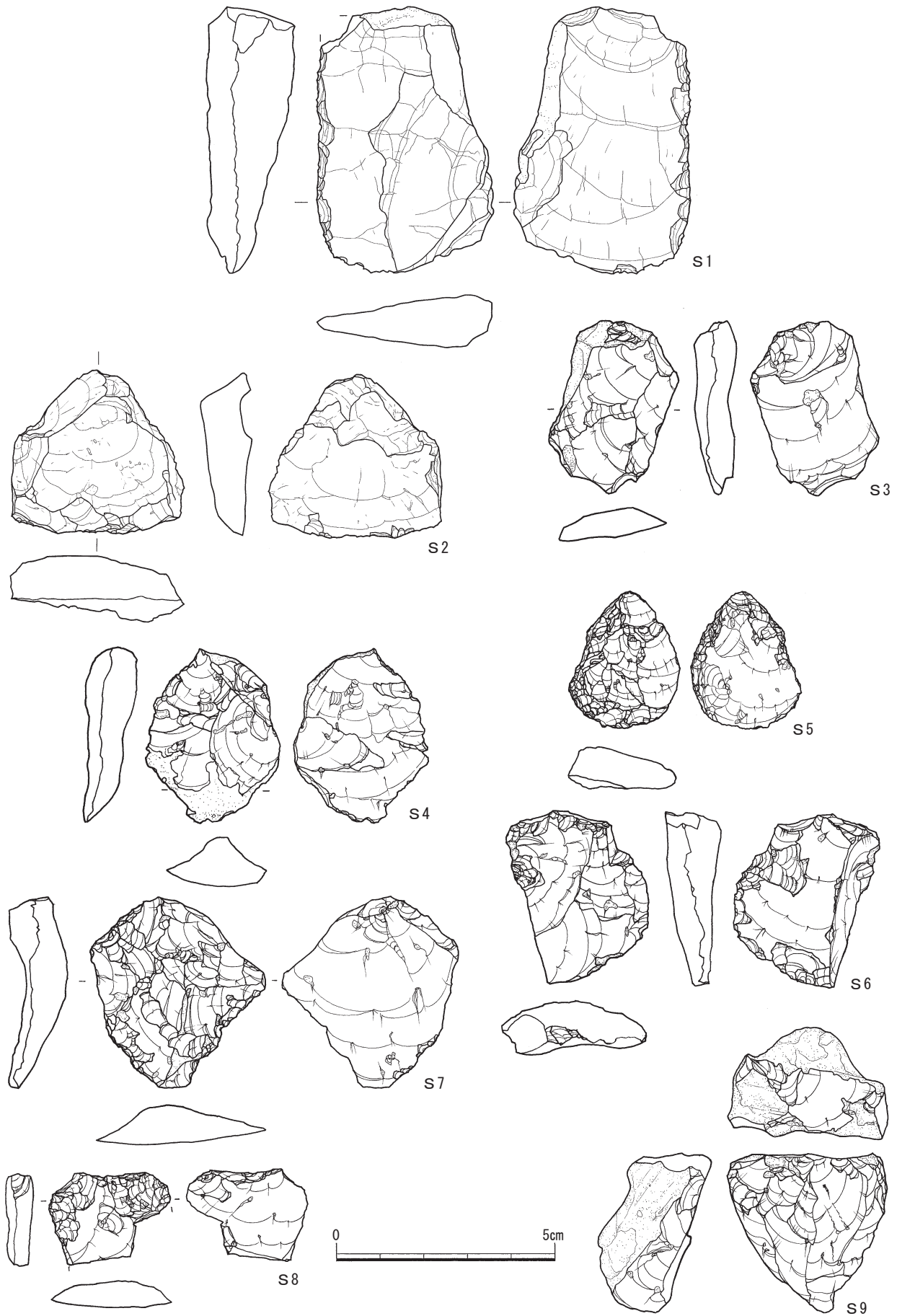


図42 縄文時代の石器 1

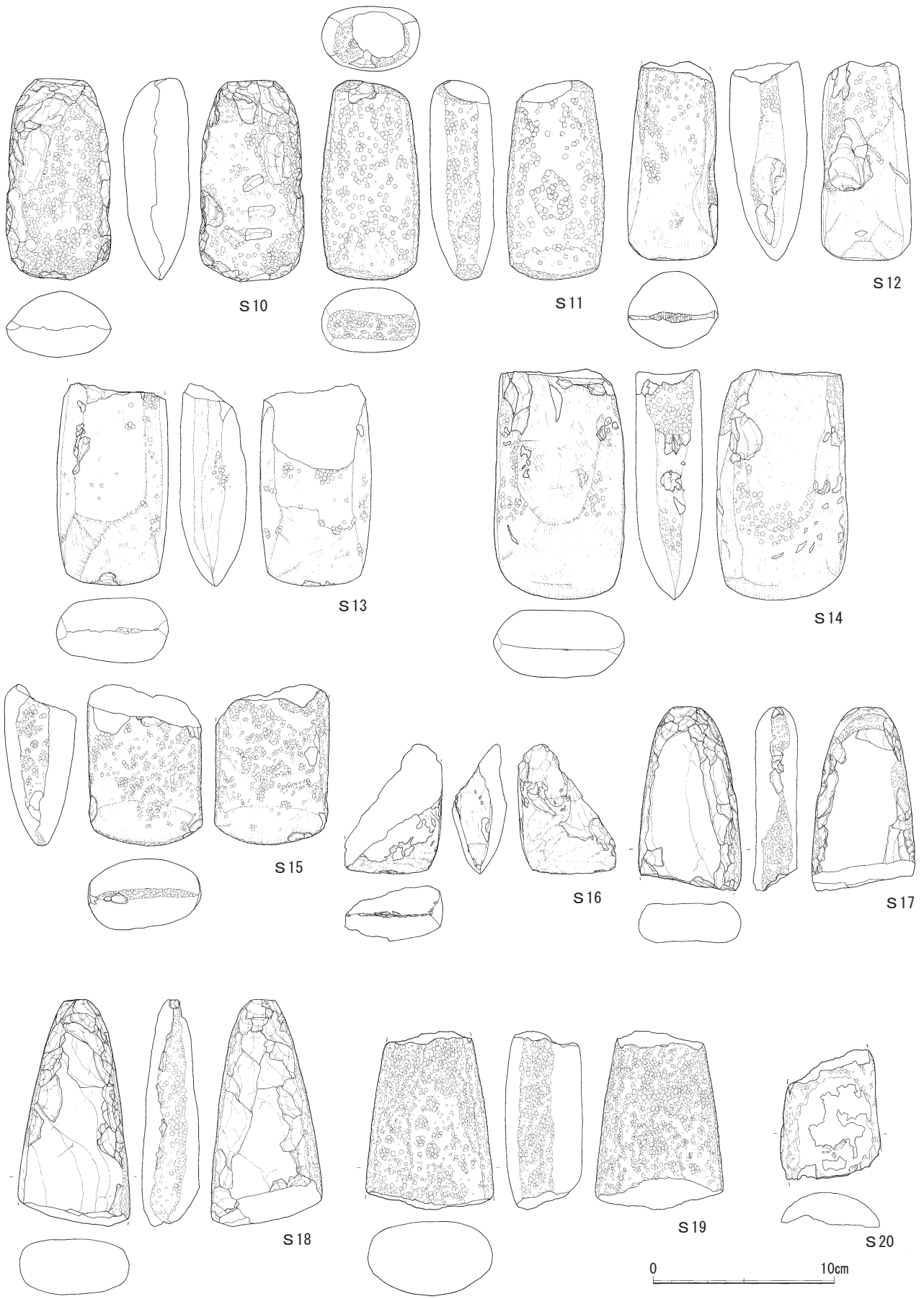


図43 縄文時代の石器 2

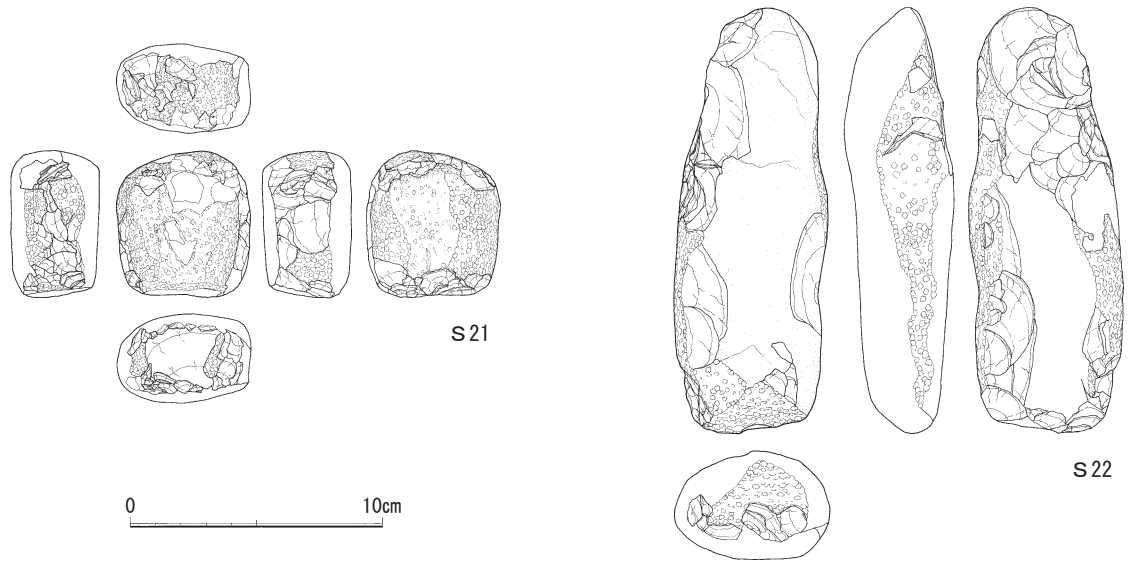


図44 縄文時代の石器3

S24も多孔質安山岩の扁平な垂円礫を用いた石錘である。上辺は折れ面となっているが、左右側辺、左下角下縁に打ち欠きとみられる浅い抉りが形成されている。

S25は多孔質安山岩の扁平な垂角礫で、上・下縁に打ち欠きによって作り出されたとみられる抉りがあり、石錘として用いられた可能性がある。

円盤状石器 (図45 S26)

S26はホルンフェルス製で、周縁からの剥離で形状を整えた後、周縁表裏から調整剥離を加えている。右側縁の一部及び左側縁に折れが生じているが、概ね円形の形状が推定される。周縁には摩耗が認められる。

磨敲石類 (図45 S27～S31)

表裏面或は片面に磨面をもち、周縁部等に敲打痕をもつもので、一部に敲打を伴う浅いくぼみを伴うものを含む。側縁部分に敲打面を形成するものについては、手握のための敲打整形の可能性もある。

S27は多孔質安山岩製の磨敲石である。背面は丸みを帯びやや平滑で、磨面は裏面側のみである。周縁には弱い敲打痕がみられる。

S28は灰褐色を呈する多孔質安山岩製の磨敲石である。背面は剥落とみられる浅いくぼみがあるが石灰質の付着物に覆われる。左右側縁部分に磨面が残る。裏面は中央付近に敲打痕が広がり周縁部分のみ磨面が残る。

S29は灰褐色を呈する砂岩製の磨敲石である。表裏面とも顕著な磨面があり、周縁は敲打・「つぶれ」により面状を呈する。

S30は灰色を呈する多孔質安山岩製の磨敲石である。表裏両面の中央付近及び右側縁の一部に磨面が、上下縁の端部に敲打痕が残る。

S31は灰褐色を呈する多孔質安山岩製の磨敲石であ

る。器面には風化と石灰質の付着物がみられるが、背面中央には浅いくぼみが生じ、裏面はかすかな磨面で中央付近に敲打痕が認められる。左右側縁は敲打により面状に整形された可能性がある。

棒状叩石 (図46 S32～S39)

端部に複数の切り合いをもつ敲打面をもち、石器製作等に用いられたハンマーストーンとみられるもの、上下両端に対向する敲打痕や剥離を残しタガネ様の使用が想定される資料などがある。

S32は多孔質安山岩の棒状の垂円礫で、対向する上下両端部に敲打痕と「つぶれ」が生じている。

S33は長さ8.4cmの凝灰岩の棒状垂角礫で、上・下端とも敲打によりつぶれ、左右の敲打面が切り合い端部が尖る形状となっている。側縁部分にも敲打の痕跡があり、裏面下半には部分的に擦れが生じている。

S34は黒色の細粒砂岩の棒状の垂角礫で、上端に折れが生じている。下端には左右から切り合うように敲打面が形成されており、左側面下部には、加撃による剥落が生じている。平坦な左側面及び裏面から右側面にかけて、線状痕がみられる。

S35は多孔質安山岩の棒状の垂角礫で、上下両端に複数単位で面状に切り合う敲打・「つぶれ」の痕がみられる。

S36は断面が三角形状を呈する多孔質安山岩の垂角礫を用いた棒状の叩石である。上端から下端に向かって窄まる形状で、上下両端及び側辺梁上にも敲打痕が残る。

S37は多孔質安山岩の棒状の垂角礫である。下端部には複数の敲打面が切り合い、対向する下端部裏面及び上面に加撃によるとみられる剥落が生じている。タガネ様の使用の可能性はある。

S38は多孔質安山岩の扁平棒状の垂角礫で、下端部の

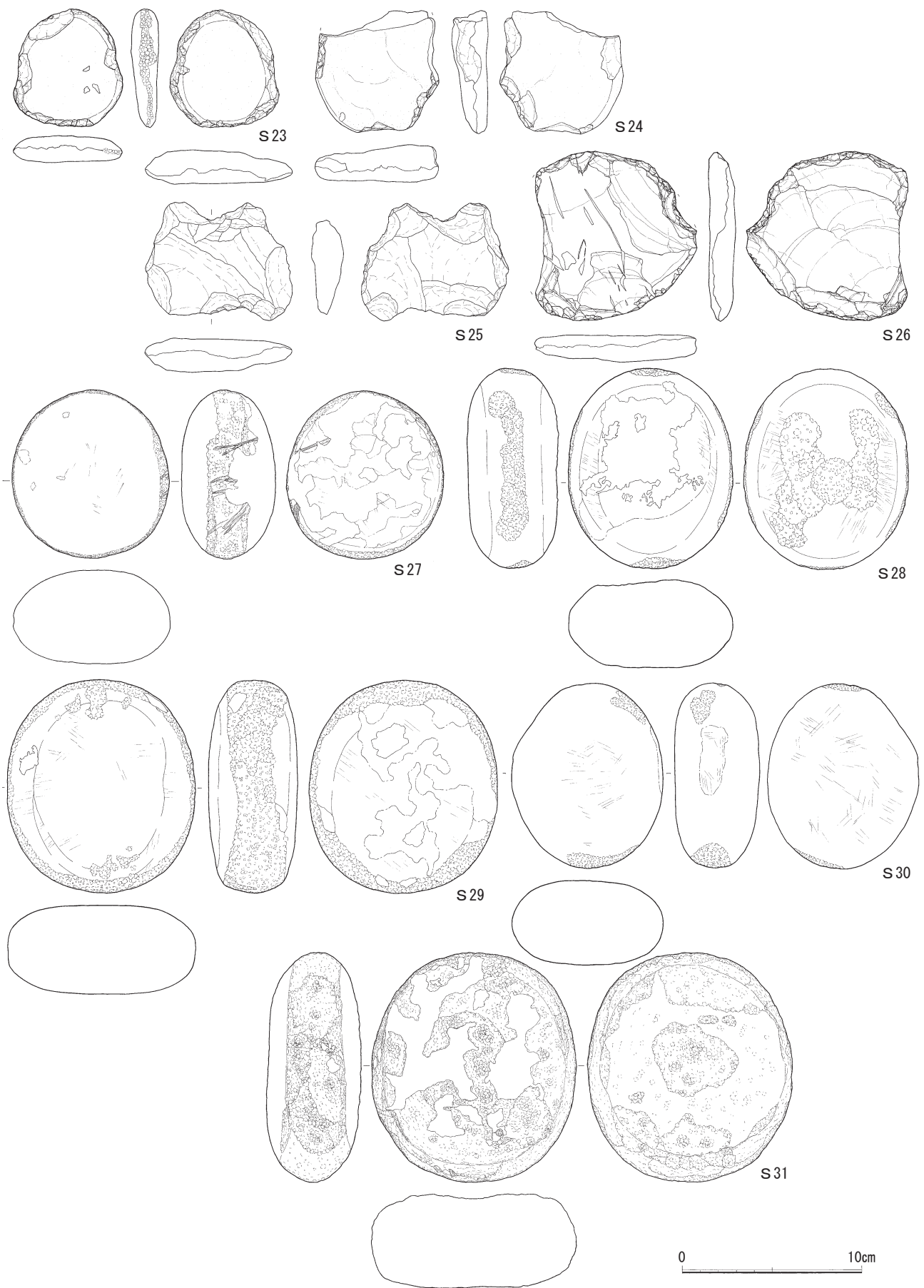


図45 縄文時代の石器 4

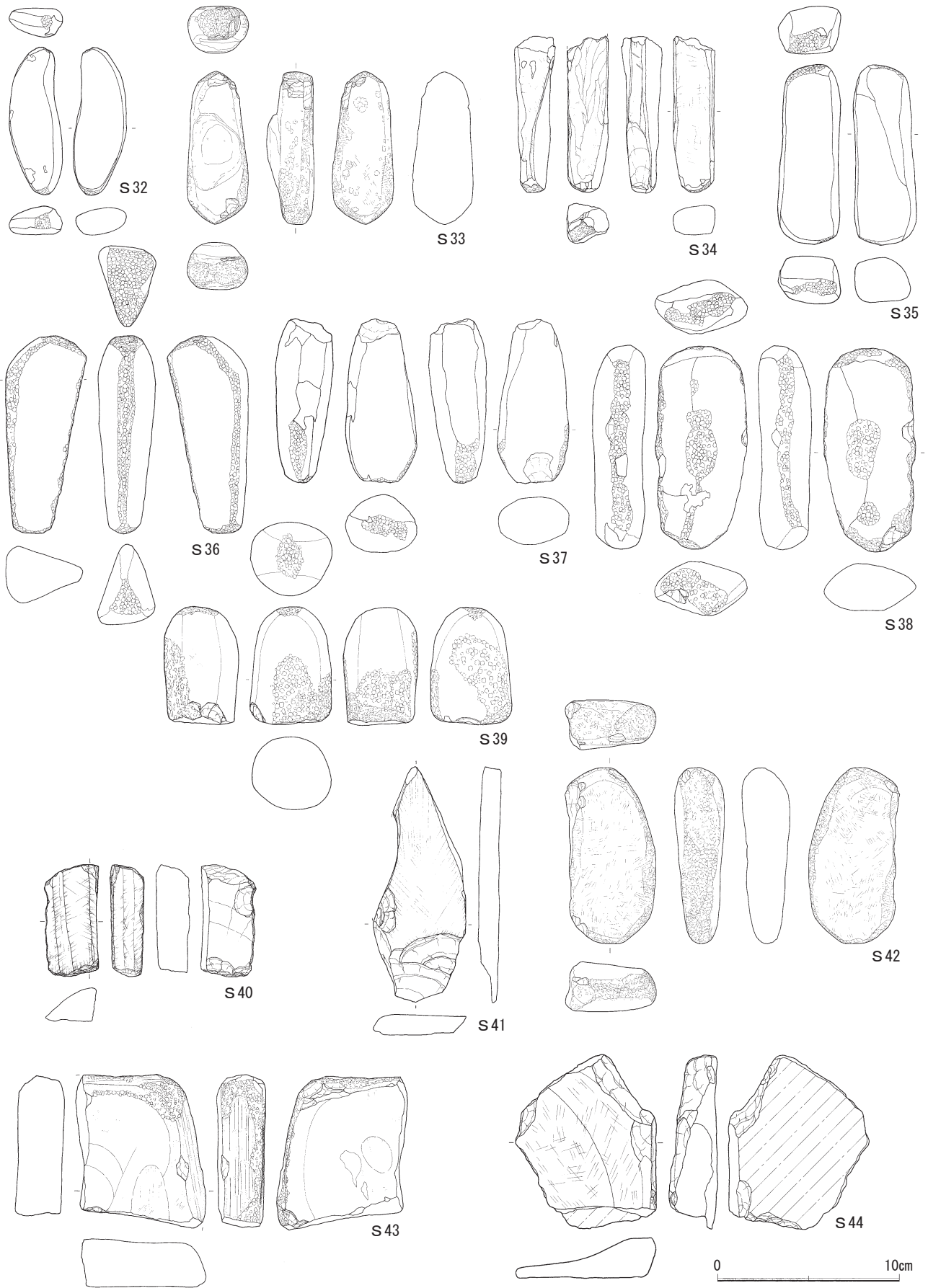


図46 縄文時代の石器5

複数の切り合う敲打面と剥落を中心に、側縁・上端部表裏面上に敲打の痕跡が見られる。

S39は砂岩の棒状垂円礫で、仮面は折れ面となっている。上端部はアバタ状の敲打痕によりわずかに凹む。周縁にも各面に敲打痕が密集し、左右側面下部では敲打痕が折れ面を切って形成されることから、折れが生じた後も敲打具として使用されたとみられる。

砥石 (図46 S40～S44)

S40は中粒砂岩製の砥石で、下面は折れ面、背面は節理面からの剥落である。表面は左側面より凹面気味となる砥面で、右側面に砥接する稜部に削れが生じており、ストーンリッチャー様にも使用された可能性がある。

S41は黄褐色を呈する中粒砂岩製の砥石である。背面は節理に沿った剥離面で、扁平な板状の形状である。正面下部の剥離及び左右側辺の折れ面が、何れも砥面を切ることから、使用後に剥離や折れが生じた可能性が高い。砥面にはわずかに赤化の痕跡があり、被熱による剥落の可能性もある。砥面は平坦で、斜位・縦位の線状痕が明瞭に観察される。

S42は長さ9.7cmの凝灰岩の扁平な垂円礫で、左側縁には剥落が生じている。表面は凹面の裏面は平坦な砥面となっており擦痕が残る。右側縁から下縁にかけては敲打に用いられた痕跡がある。

S43は黄褐色を呈する砂岩の盤状の垂円礫で、部分的に赤化し被熱の痕跡がある。表裏面とも擦痕を伴う平坦な砥面であるが、表面は部分的にわずかに凹面を呈する。

S44はやや粗粒の砂岩の扁平礫で、表面は凹面を呈する砥面で、比較的明瞭に線状の擦痕が残る。

擦切石器 (図47 S45～S47)

石器石材等の切断に用いられた擦切り具とみられる石器である。

S45は扁平な砂岩礫で、表裏面は研磨により扁平に調整されている。刃部とみられる下辺は背面側から研ぎだされた片刃の刃部を呈するが、使用に伴う刃部の摩耗が進み、刃先は丸みを帯び、刃縁はやや波をうつ。背面体部では斜行する。刃部付近では刃部に並行する線状痕がみられる。

S46は細粒砂岩の扁平な礫片で、表裏面とも平坦に研磨されるが、裏面では磨面を覆う石灰質の付着物がみられる。直線的な下辺部分には断面V字状の刃部が形成されている。刃部には摩耗がみられ、刃部に平行及び斜行する線状痕が認められる。上辺にも直線的で端部は幅の狭い摩滅面を呈する。

S47は砂岩の扁平な剥片で、背面は剥離面であるが、2次的な研磨調整により、剥離の痕跡をとどめない。表裏面とも丁寧な研磨で扁平に仕上げられている。下辺の刃部はやや外湾気味で、背面側のみ研ぎだされた片刃状の刃部には摩耗が見られ、刃部平行及び斜行する線状痕

が認められる。

特殊石製品 (図47 S48～S51)

S48は断面三角形の細粒砂岩の垂角礫で、先端部、背面両部には敲打痕がみられる。上部は研磨による上端に向って窄まる形状で、先端部には括れがあり、端部が突起状を呈する。背面右下半及び背面は凹面状を呈する磨り面となっている。砥石様の使用も考えられるが、研磨整形により、やや不整形ながら陽石を表現している可能性がある。

S49は赤褐色を呈する端部に括れた形状をもつ砂岩礫である。礫面の細かいひびや剥落など、被熱の痕跡があるため、擦痕等は明瞭ではないが、研磨や削り込みにより加工されている可能性がある。

S50は灰褐色を呈する細粒砂岩で下部を欠損する。上端部は複数の敲打面が切り合い、叩石の破片ともみえるが、側縁周囲には縦方向を基調とする削れや線状痕がみられ、右側面に2条の横位の削りが認められることから、意図的に研磨整形された石製品の一部分である可能性がある。

S51は薄紫色を呈する阿多カルデラ起源とみられる溶結凝灰岩製の垂円礫で、横位方向の研磨・削り込みにより、上下両端に括れと突起、中位に括れが生じている。石質からも砥石としての利用は考えにくく、意図的な整形により陽石等を表している可能性がある。

軽石製品 (図48 S52～S62, 図49 S63)

穿孔・線刻や人為的な形状加工が認められるものを軽石製品とした。

S52は略円形の有孔の軽石製品で、表面側中央附近が白状に凹み、凹みの底面及び背面側から穿孔されている。

S53は気泡の少ない白色の軽石で表裏面とも丁寧に研磨され、扁平な長楕円形を呈する有孔の軽石製品である。孔は径8.0mmで、上部に向かって摺れが生じていることから、浮子のような用途も考えられる。

S54は最大径約7.0cmの略円形を呈する盤状の軽石製品である。表裏面の凸部及び側縁の一部に研磨による整形の痕跡が認められる。

S55は長径約8.2cmの半月形を呈する軽石製品である。平坦な表面及び裏面の一部に研磨加工の痕跡がある。表面右側辺に沿って溝状に凹むが、加工によるものかは不明である。

S56は長さ約9.1cmの扁平な概形が楕円形を呈する軽石製品である。背面には研磨の痕跡があり、上下両端に抉りをもつ。抉り部分に接して小孔がある。上端の孔は穿孔の可能性はあるが、下端は人為的なものではない可能性が高い。

S57は左上部を欠損する軽石製品である。裏面は内湾気味の磨面が斜位の線状の傷もみられる。

S58は表裏に摩滅した平坦面をもつ盤状の軽石製品で

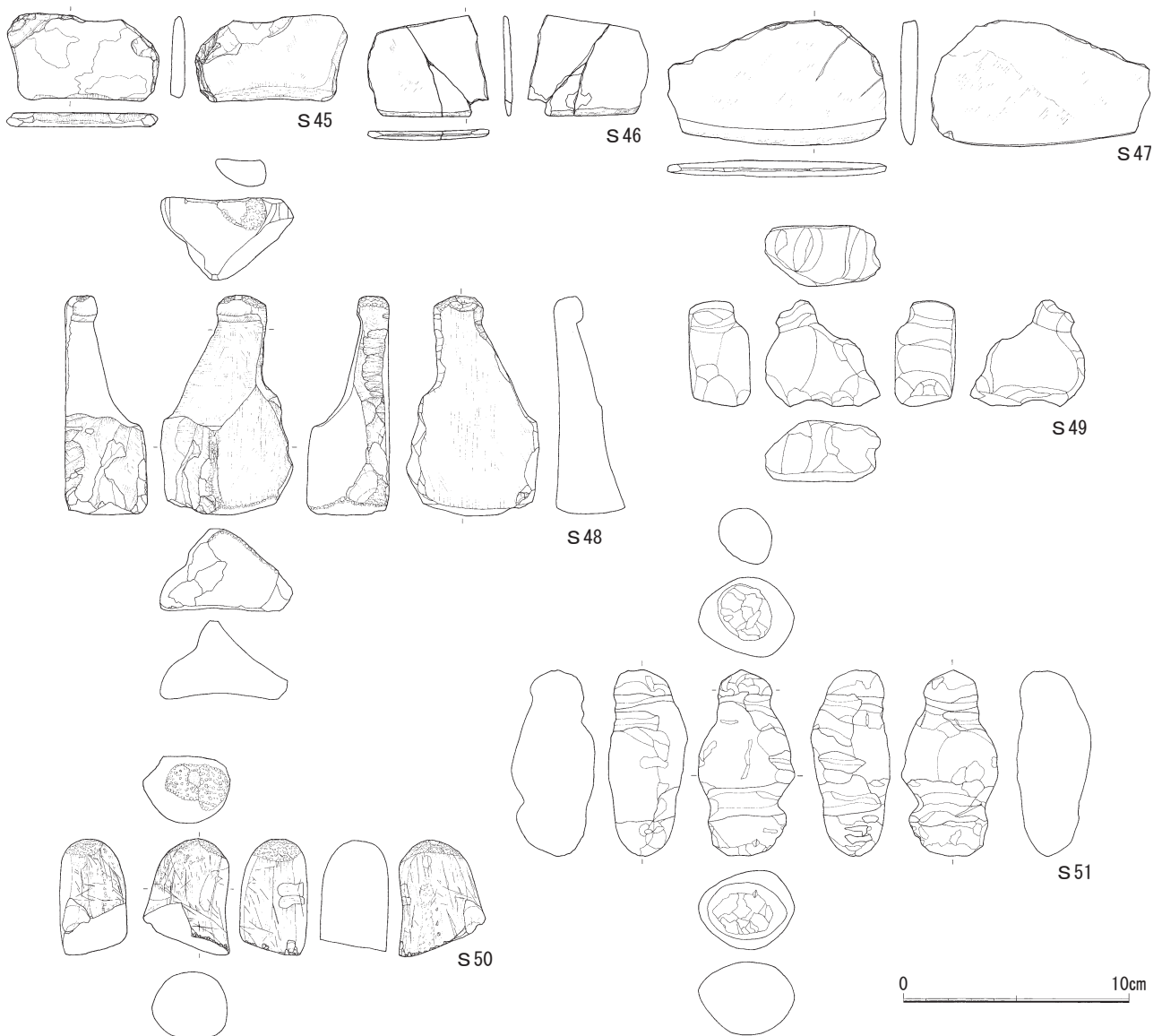


図47 縄文時代の石器6

ある。風化により明確ではないが、左右側辺は切断されている可能性もある。

S59は幅4.2cmの卵形が分割されたような形状を呈する軽石製品である。上半部分は表面がわずかに研磨され、分割面とみられる下面はやや傾斜をもって丁寧に研磨されている。

S60は白色で気泡の少ない軽石製で、表裏面及び左右側面が内湾気味の磨面となっており、線状痕が認められる。砥石として使用された可能性が高い。

S61は残存長約15.0cmを図る長楕円形の軽石製品で、上端部は欠損の可能性がある。背面は内湾気味に削り込まれ、横断面が舟底状を呈しており、舟形を模した軽石製品の可能性もある。

S62は長さ12.3cmのやや扁平な軽石の垂円磔で、表面

下半には削り込まれたような磨面の凹部が、裏面中央付近には削り及び摩滅の痕跡のある幅約3.0cmの溝状の凹部がある。

S63は長径約20.2cmの半月形を呈する軽石製品である。右側縁上部及び下部にそれぞれ削り込まれたような平坦面がある。裏面は平坦で、摩滅等はみられないが、研磨整形されているとみられる。

その他：加工・使用痕のある磔等（図49 S64～S70）

上記の各分類に属さない磔もしくは多孔質安山岩等の比較的粗い石質の石材の剥片を用いた加工・使用等の痕跡が認められる石器である。

S64は背面に自然面を有する半円状の頁岩剥片で、剥片の剥出後、打面及び腹面側からの背面側に剥離が施される。下線部分には表裏から剥離が加えられ、弧状を呈

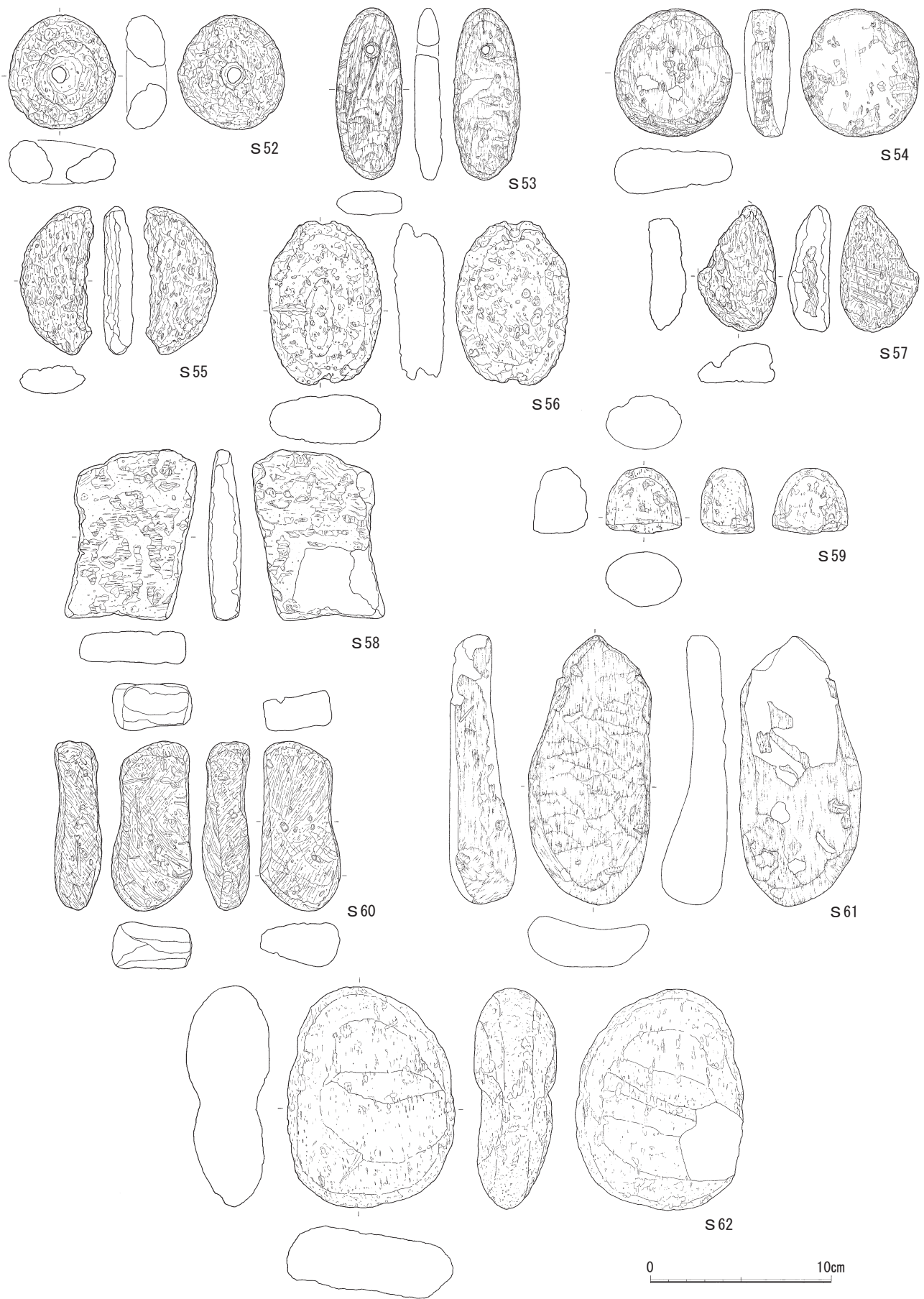


図48 縄文時代の石器 7

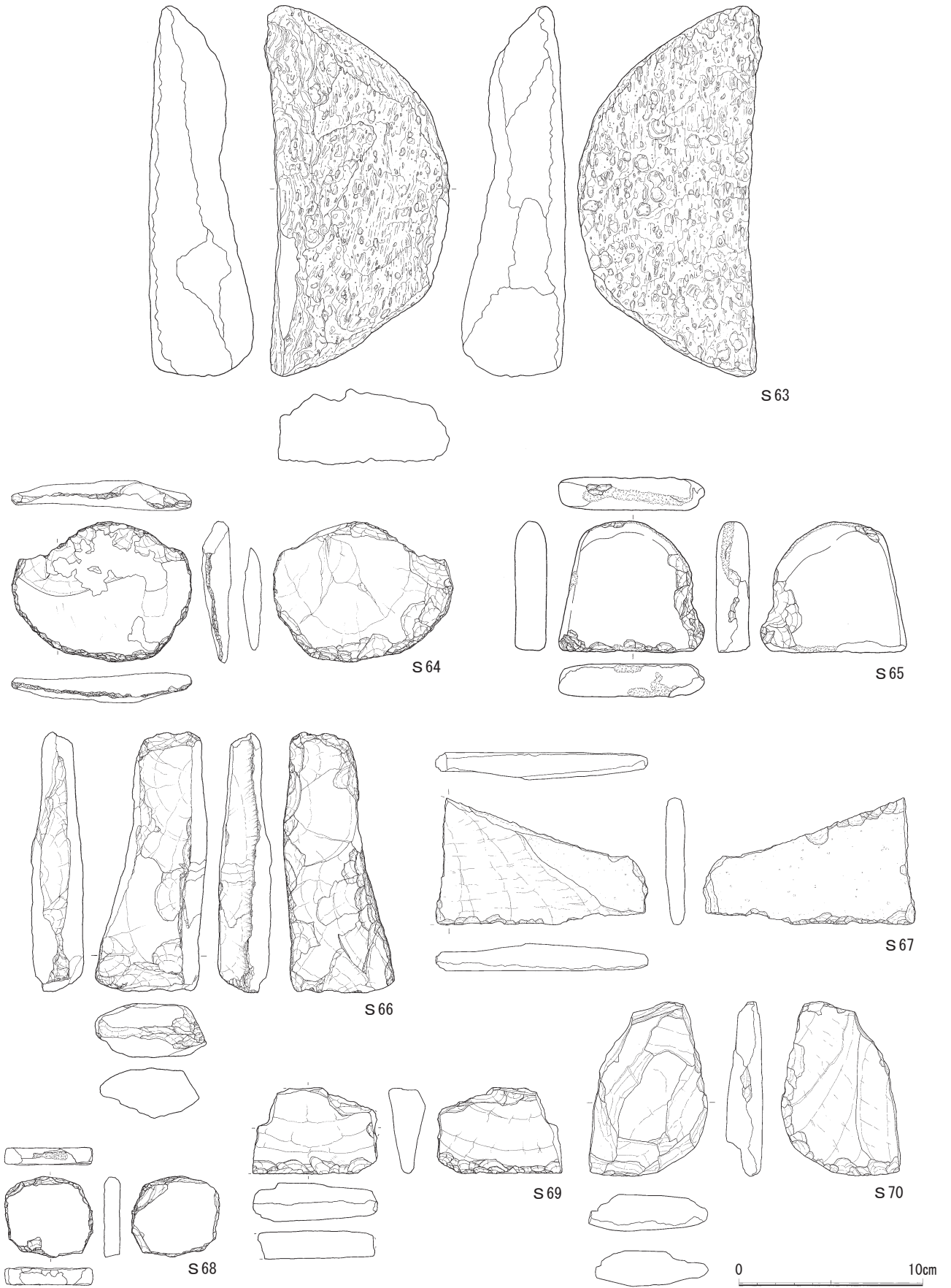


図49 縄文時代の石器 8

する刃部が作り出されているスクレイパー様の石器である。刃部には顕著な摩耗・「つぶれ」が生じている。

S 65は黒灰色を呈する安山岩とみられる扁平垂円礫で、仮面は折れ面となっている。左側縁下部に表裏から剥離が加えられ浅い抉りが生じている。上縁及び下面の折れ面上に敲打による「つぶれ」が生じている。

S 66は黒色を呈する安山岩で、背面及び右側面は灰白色の風化した自然面である。裏面は前面に周縁から剥離が加えられている。石斧の未製品の可能性もある。

S 67は表面の一部及び裏面に風化した自然面を残す板状の多孔質安山岩である。左側辺及び上面は折れ面で、左方向から加えられた剥離により比較的鋭利となった下辺部分に連続する細かい剥離と縁辺の摩耗が認められる。

S 68は凝灰岩の扁平礫で、表裏の風化面は淡桃色を呈する。上縁には敲打の痕跡があり、左右側辺には腹面側から剥離が加えられている。円盤状石器未製品の可能性もある。

S 69は表裏面とも風化の進んだ剥離面で、縦断面が長三角形を呈する凝灰岩の扁平な垂角礫で、左側面は折れ面となっている。下辺に表裏から調整が加えられており、刃部には摩耗がみられる。スクレイパー、もしくはくさび様に使用された可能性がある。

S 70は扁平な安山岩の角礫で、表裏面は赤褐色に風化しており、剥離面は人為的なものではない可能性が高い。右側縁から下縁にかけての周縁の連続する小さな剥離は明らかに新しく、縁辺に「つぶれ」が生じていることから、打割等に用いられた可能性がある。

③ 貝製品 (図51～56 K 1～K88)

貝製品としては88点を掲載した。特に多く出土したのが未製品を中心とした貝輪関係の遺物で、総数271点確認し、85点を掲載した。

K 1はツキヒガイ製と考えられる有孔貝製品である。最大長が8.2cm、最大幅が10.15cmを測る、本貝塚の中では大型の貝製品であるが、貝の性質上殻が薄いこともあり、重量21.86gと比較的軽い製品である。殻頂近くに径7mmほどの円孔を有している。垂飾品としての利用も考えられよう。

K 2は大形の巻貝(イトマキボラ科か)の殻軸を利用した篋状貝製品である。最大長11.95cm、最大幅2.35cmを測る。重量は殻軸ということもあり、45.46gと比較的重い。殻口の先端部分を若干磨くことで、篋の先端的な効果を作り出している。「剥ぐ」・「削ぐ」といった目的をもつ工具的な利用法が考えられる。

K 3～K 6は二枚貝の復縁部を刃部として加工した貝刃である。

K 3はチョウセンハマグリの復縁部を丁寧に加工して刃部を作り出した貝刃である。最大長7.35cm、最大幅

9.55cm、重量43.65gを測る。

K 4～K 6の貝刃は、二枚貝の復縁部を加工して刃部を形成するという点ではK 3と同様であるが、いずれも貝輪の形状を呈しており注目される。

K 4はK 3と同様にチョウセンハマグリを利用したもので、貝輪片と考えられる。残存長は6.61cm、輪部の残存最小幅が1.8cmである。

K 5とK 6はタマキガイを利用したもので、やはり貝輪片と考えられる加工品である。K 5の残存長は6.44cm、最大幅が8.2cm、輪部の残存最小幅が1.0cmを測る。K 6の残存長は5.12cm、残存幅が6.52cm、輪部の残存最小幅が0.7cmを測る。

これら3点の貝刃は貝輪を利用したものなのか、貝刃

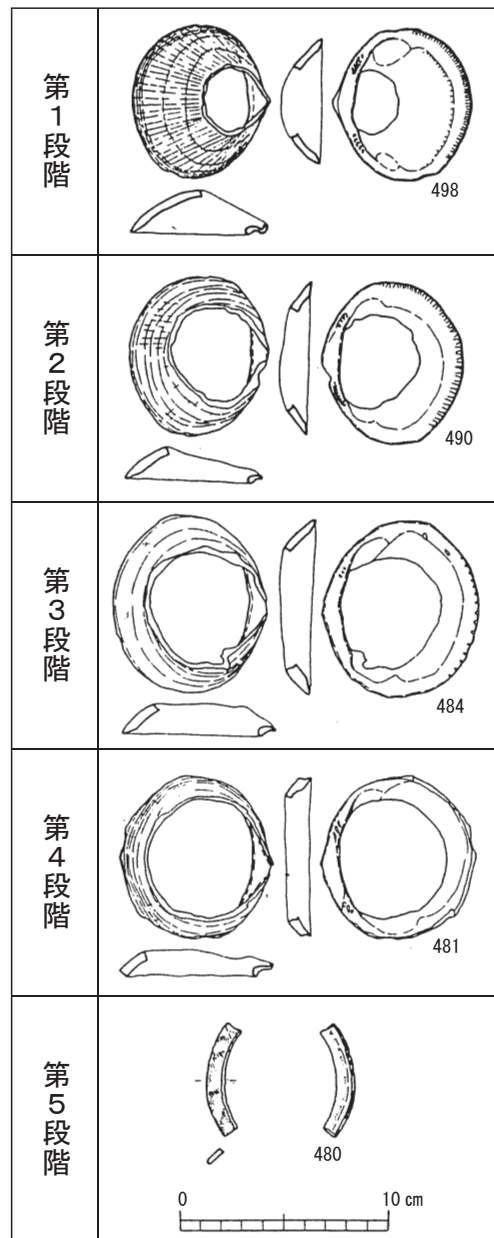


図50 貝輪の製作工程 (表2文献46より)

を利用した貝輪なのか、貝刃と貝輪の両機能を兼ね備えた加工品なのか、あるいは刃部も装飾の一部なのか等、今後の検討課題である。

K7はオオツタノハ製の貝輪である。残存長が7.5cm、残存幅が3.2cm、輪部の最小幅が0.6cmを測る。ほぼ半欠の資料である。表2文献52で鹿児島県における縄文時代の貝文化を紹介した木下尚子は、「縄文時代の貝輪習俗の原則は、〔赤色+女性〕の概念によると考えられる」とし、貝輪素材の大多数を占める二枚貝とは異なる笠貝であるオオツタノハを利用していることについて、「表面を研磨すると赤みをおびた縞状の色彩を出す」からではないかとの見解を示している。また、「貝輪に適した大きさのオオツタノハは、大隅諸島から吐噶喇列島の特定の場所にしか生息せず、その採取は容易ではないという。オオツタノハ貝輪登場の背後には、これらの地域との往来による目的的行為があったとみてよいだろう。」と述べ、南島との交流の意義について触れている。

K8はウミギクガイ製の貝輪である。残存長が8.23cm、

残存幅が6.94cmを測る。穿孔部が小さくかつ殻頂部分が欠損している。橙色を呈する貝殻の表面には、部分的に研磨の痕跡が見られる。鮮やかな色調は、前述の「縄文時代の貝輪習俗の原則」の概念と合致するものと考えられよう。

K9からK88まではタマキガイ及びマルサルボウを加工した貝輪である。

図50は表2文献46で新東晃一が提示した貝輪製作の工程図である。表1-6の発掘調査に参加した新東が、川上（市来）貝塚出土のタマキガイ製貝輪（未製品）をもとに検討したものである。全5段階の工程について、以下に概略を引用する。

第1段階 貝輪製作の基本として腕を入れるための孔を穿つ作業。最も高い殻頂部の除去作業を行っている。小さな孔から段々大きく穿孔しているが、その過程でチョウツガイ部が破損した失敗例が出土している。

第2段階 貝殻復縁の外面の研磨作業を行っている。穿



図51 縄文時代の貝製品 1

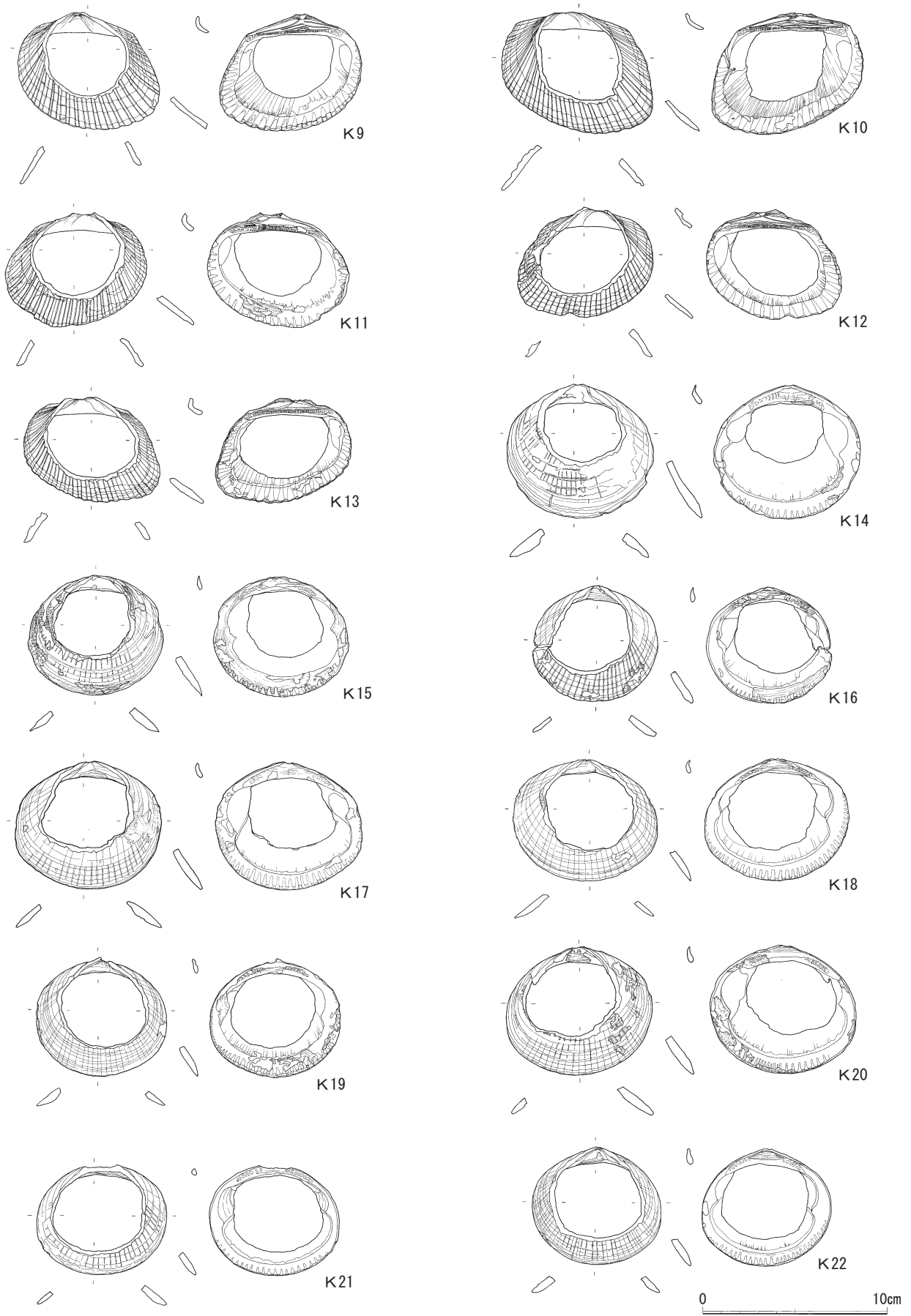


図52 縄文時代の貝製品 2

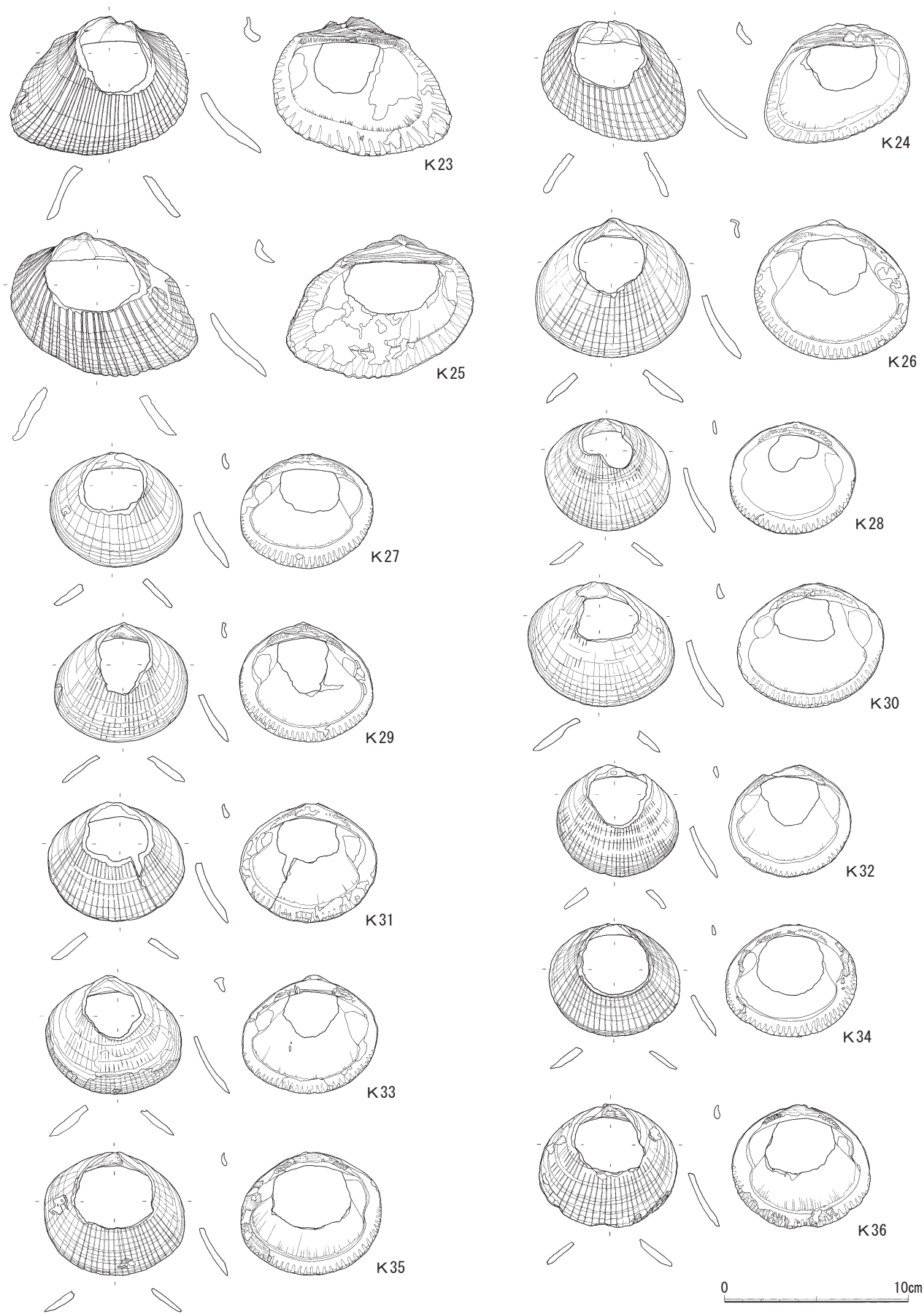


図53 縄文時代の貝製品 3

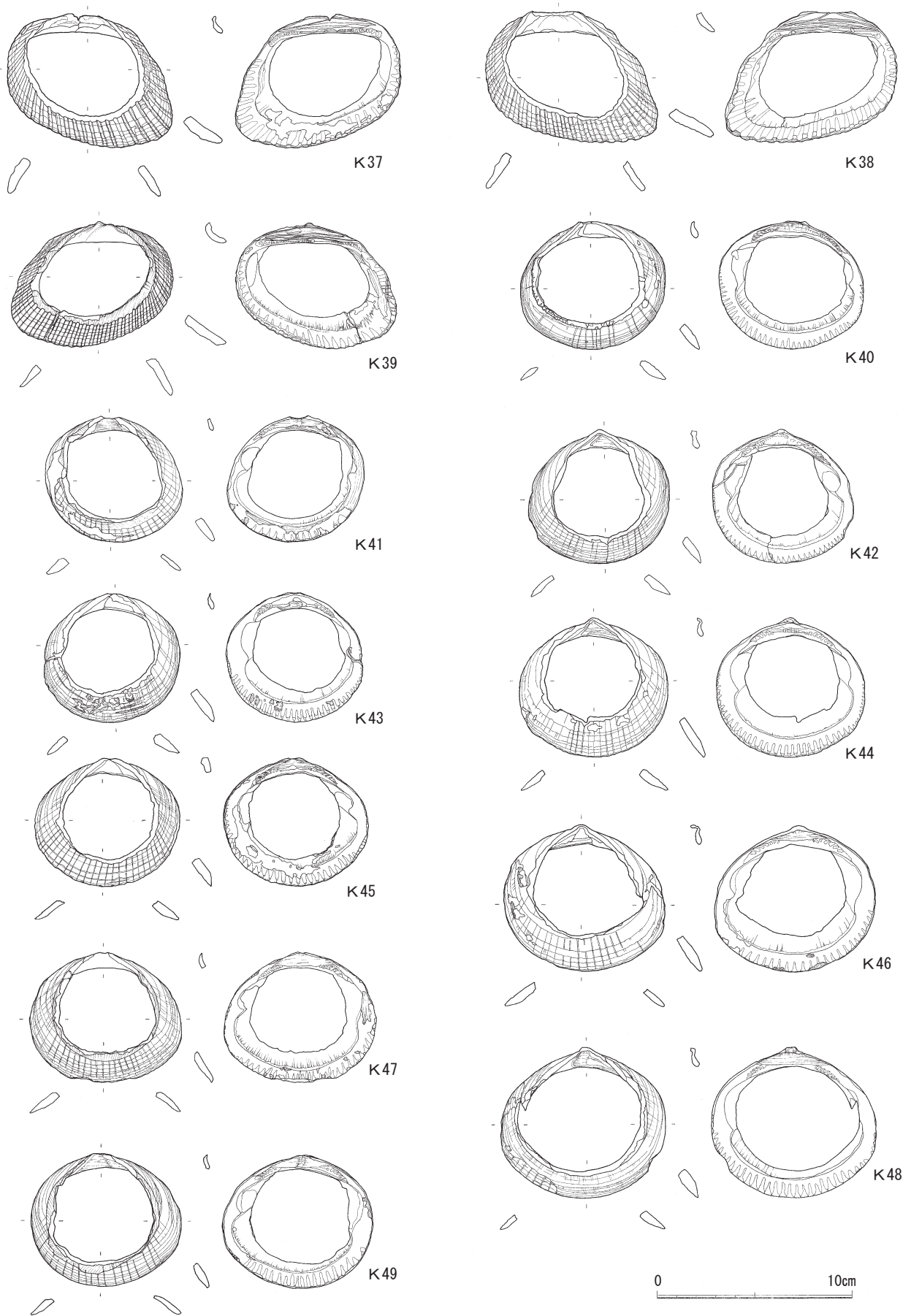


図54 縄文時代の貝製品 4

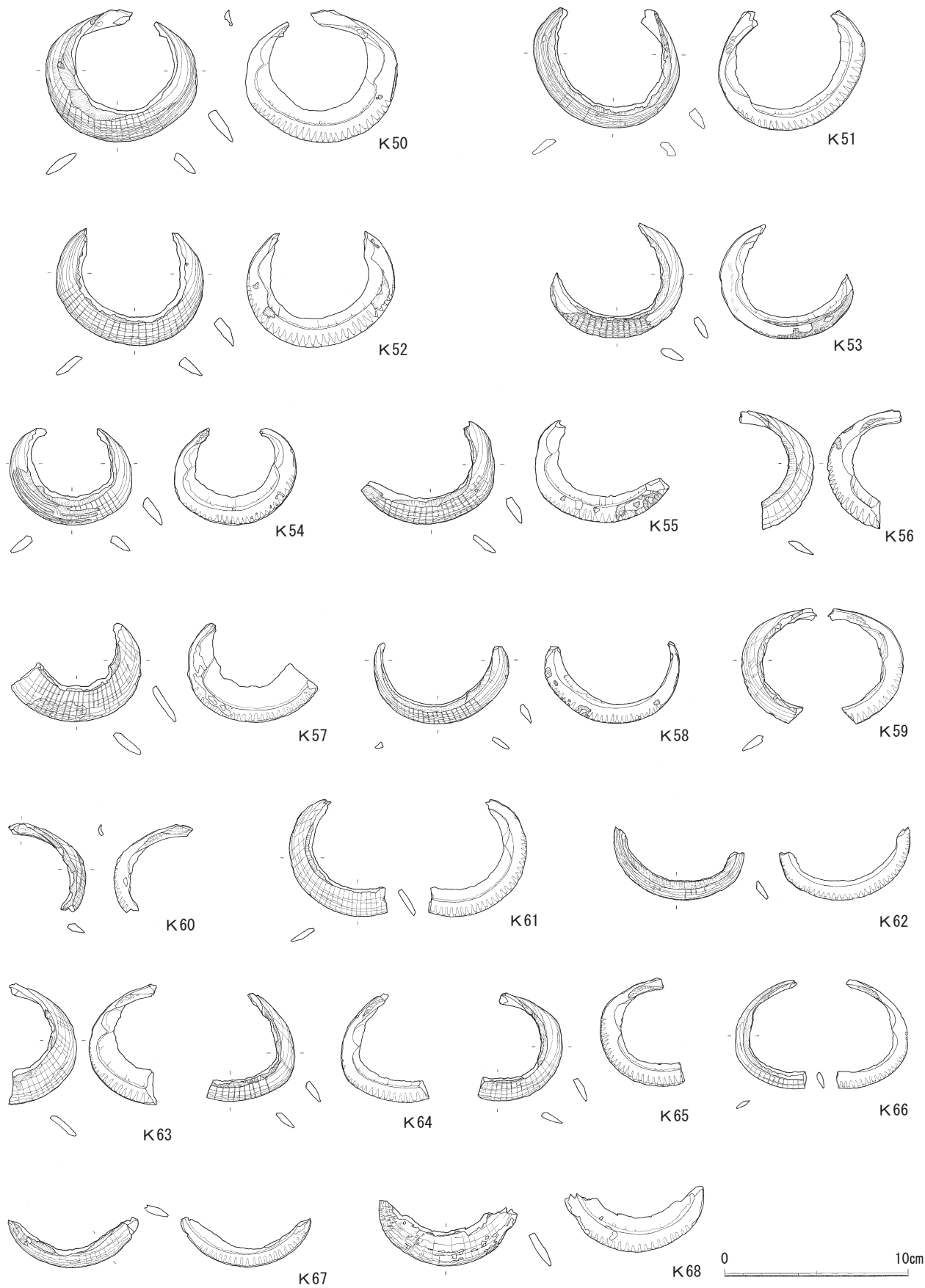


図55 縄文時代の貝製品 5

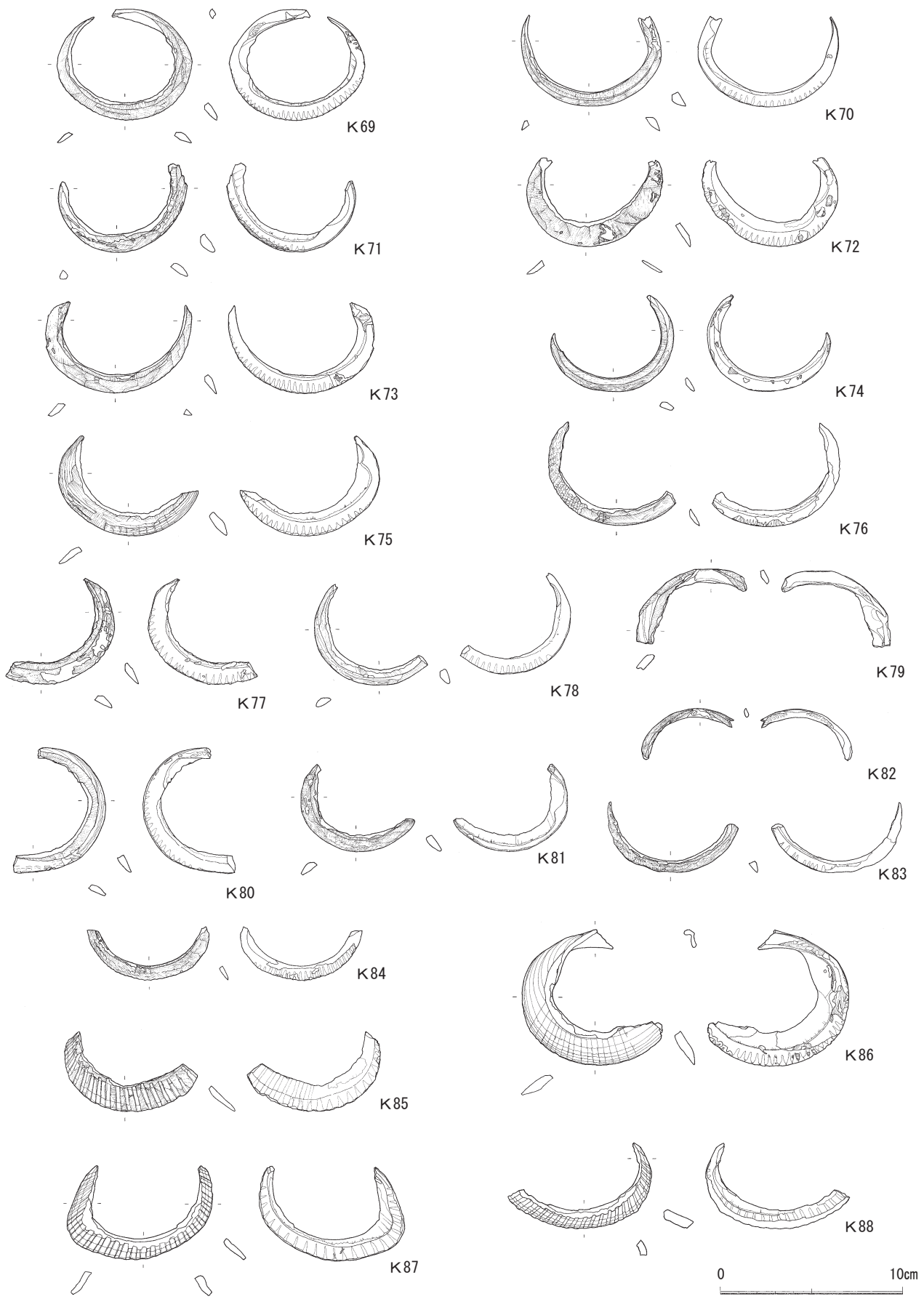


図56 縄文時代の貝製品6

孔作業も平行して行われる。穿孔がほぼ完成時の大きさの孔に達する時点の表面研磨作業でチョウツガイ部が破損する例も目立つ。この段階が、もっとも困難な作業と言える。

第3段階 貝輪の原形がほぼ出来上がった段階。内面の研磨作業を行っている。この段階で、チョウツガイ部付近の幅が狭くなった等で、完成品には不都合な仕上がりのため廃棄されたものがある。

第4段階 貝殻復縁の外縁部分の除去作業を行っている。外縁の内面にヒダ状の刻目が存在するが、その刻目部分を打ち欠いて除去する作業である。この段階で廃棄されるものもある。

第5段階 最終工程で、殻頂部の除去面の内側面と外縁部除去面の外側面の研磨作業である。貝輪の輪の幅は10mm、厚さが3mm程度の大きさで、表裏及び内外面とも丁寧な研磨作業を施し、断面長方形に仕上げている。

以上の製作工程を参考にすると、K9～K36は第1段階と言える。また、K37～K50は第2～4段階、K51～K88は第4～5段階のものと考えられる。K51以降は欠損部があることから、厳密な段階設定は難しいが、K66～K84の中には、最終の第5段階該当のものが含まれていると考えられる。当貝塚が貝輪製作の場であったことを示す好資料である。

④ 骨角製品 (図57～58 H1～H26)

骨角製品として26点を確認し、すべて掲載した。

H1は加工され過ぎて不明瞭であるが、動物の中足骨を利用したと考えられる。筧状骨製品である。最大長が13.3cm、最大幅が2.1cm、重量が25.09gを測る。頭部や側面には丁寧な押圧剥離が見られ、やや「凹」状を呈する刃部は丁寧に研磨が施されている。ほぼ直線的な形状を呈し、「凹」部の窪み部分は厚さ約0.3cmと薄く仕上げている。巻貝の殻軸を利用した筧状貝製品(図51 K2)と形状が類似している。「剥ぐ」・「削ぐ」といった目的をもつ工具的な利用法が考えられる。

H2は鳥類の脛骨を利用したと考えられる筧状骨製品である。最大長11.9cm、最大幅1.5cm、重量11.2gを測る。H1と同様に直線的な形状を呈するが、刃部と考えられる部分は欠損している。胴部部分の研磨仕上げから筧状骨製品を想定した。

H3はイノシシの牙を利用した加工品で、全形はやや湾曲しているが、丁寧な研磨で片方に刃部的な鋭利加工を施していることから、筧状の骨製品とした。最大長7.75cm、最大幅2.45cm、重量6.86gを測る。

H4はシカの角を利用した釣針である。針先は欠損しているが、残存長4.65cm、最大厚0.72cmとやや大型の釣針である。前面に丁寧な研磨痕がみられる。

H5は鳥類の脛骨を利用したと考えられる加工品で、ほぼ全面に丁寧な研磨痕がみられる。片方の先端を欠き、残存長8.5cm残存最大幅1.55cmを測る。形状から簪的な利用法が考えられる。

H6とH8はイノシシの牙を利用した加工品で、弓なりにカーブするほぼ全面に丁寧な研磨痕が見られる。前者は残存長6.9cm、残存幅0.8cmを測る。後者は長さ5.75cmとやや小型である。刺突具的な機能が考えられる。

H7は長さ12.35cm、幅0.8cm、重量7.59gを測る。側面と先端の一部を欠くが、ほぼ完形に近いと考えられる。特に幅(厚さ)はほぼ一定で、先端部の鋭利な加工が刺突具的な機能を想定させる。表面が磨耗及び劣化していることもあり、何を素材にしているかについては不明瞭である。

H9はシカの角を利用した加工品で刺突具的な機能が考えられる。断面はほぼ円形を呈している。

H10～H17は切断痕や加工痕がみられるもので、イノシシの歯牙を素材としている加工品である。

H10～H12が残存長5.00～5.75cm、幅2.00～2.15とほぼ同様なサイズの牙を利用した加工品である。

H13～H17は、やや小型の歯牙製品で、部分的に切断痕や加工痕が見られる。

H18は鳥類の橈骨を利用した加工品である。残存長が5.15cm、幅(厚さ)が0.75～0.80cm、重量1.65gとかなり小型の製品である。ほぼ直線をなすが、一部に研磨痕と軸を一回りする浅い刻目(幅0.2cm、深さ0.1cm)が施されている。用途については不明である。

H19とH20はイノシシの角を利用した刺突具と考えられる加工品である。それぞれ現存長10.85cm・10.8cm、重量が37.1g・27.39gを測る。本貝塚出土品の中では大型の製品である。

H21とH22はイタチザメの椎骨を利用した加工品で、それぞれ径3.05cm・2.8cmを測る。中央部には0.15～0.2cmの円孔を有している。垂飾品と考えられる。

H23とH24は魚類の椎骨を利用した加工品で、それぞれ径が1.6cm・1.28cmを測る。いずれも中央に0.3cm弱の円孔を有している。垂飾品と考えられる。

H25とH26はいずれもクジラの椎骨と考えられるもので、H25の残存する最大長が19.20cm、最大幅が15.10cmを測る。また、ほぼ円形を呈する形状が残るH26は、長軸が27.6cm、短軸が24.0cmを測り、本貝塚出土品の骨角製品の中で最大となっている。

金沢大学の内山純蔵氏によると、いずれもマッコウクジラの椎骨(椎体後縁部)と考えられ、椎体本体と融合していないことから、成熟段階、20歳未満の個体の可能性が高いとのことであった。H26に明瞭な使用痕・加工痕等は見られないが、H25には明らかな研磨痕があることから、土器製作台等の利用が考えられる。

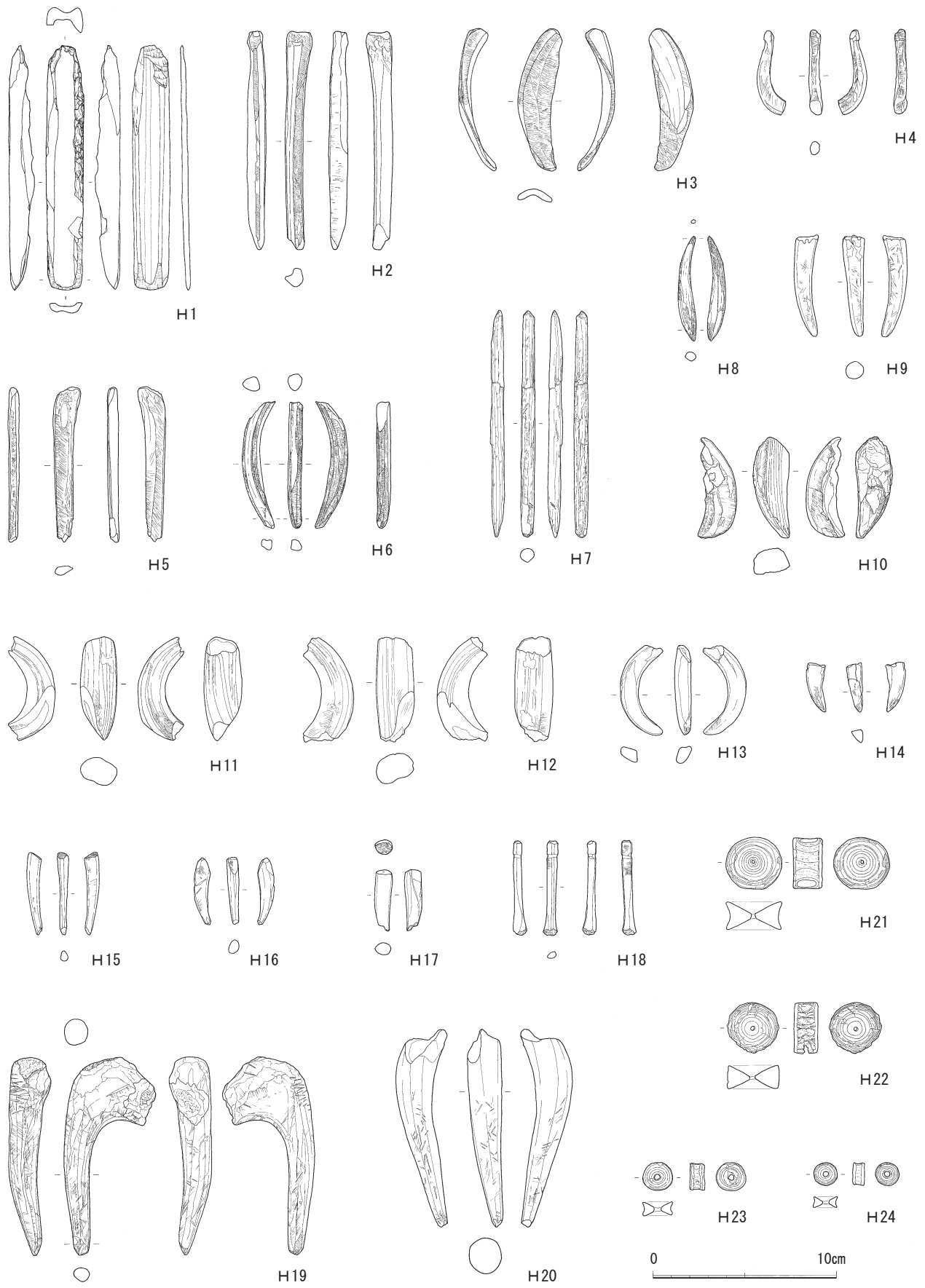
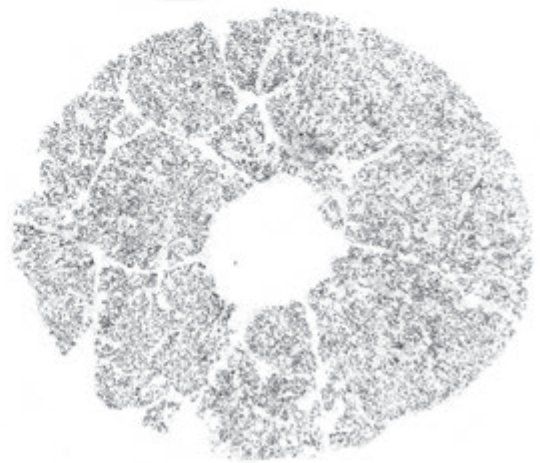
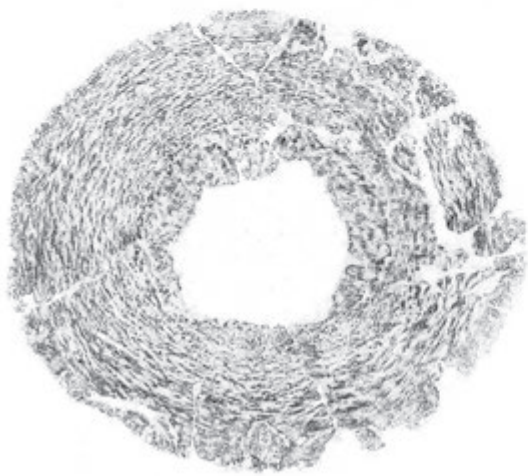
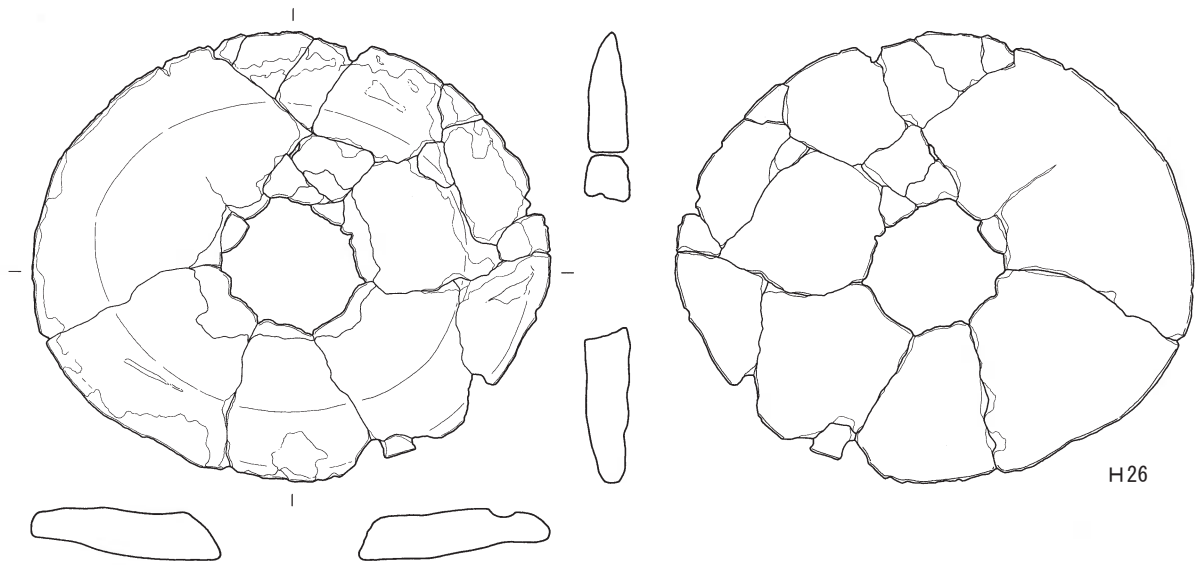
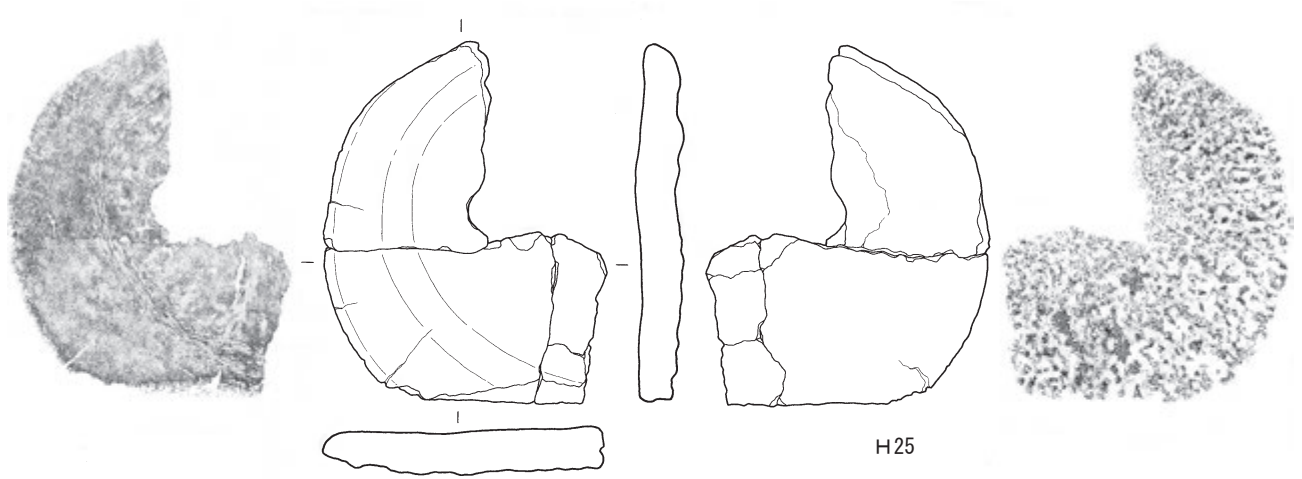


図57 縄文時代の骨角製品 1



0 10cm

図58 縄文時代の骨角製品2（鯨の椎骨2例）

表3 出土土器・土製品観察表(1)

挿図	No.	器種	土器型式	部位	トレンチ	区	層位	法量 (cm)			器面調整		胎土							色調		焼成	文献 No.	備考 (器形・文様の特徴等)				
								口径	底径	器高	内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火山	砂粒	他	内面				外面			
8	1	深鉢	轟B	口縁	A	V	2				貝殻条痕	貝殻条痕	普	○	○	○								明茶褐色	暗茶褐色	普	52	刻目微隆起線文, 口唇刻目
8	2	鉢	南福寺	口縁	A	VI					ナデ	ミガキ	普	○	○								滑石	明茶褐色	明茶褐色	普	7	沈線, 沈線の一部に赤色塗彩?
8	3	深鉢	出水?	口縁	A	VIII	3				ケズリ	ナデ	普	○		○							暗茶褐色	暗褐色	普		2本の平行直沈線, 口唇刻目	
8	4	深鉢	出水	口縁	A	V	2				ミガキ+ナデ	ミガキ+ナデ	密	○		○							暗茶褐色	暗茶褐色	普		直沈線の組合せ文	
8	5	深鉢	出水	口縁	A	III	2				ナデ	ナデ	密	○		○	○						暗褐色	暗褐色	普		3本の平行直沈線, 口唇凹点	
8	6	深鉢	出水	口縁	A	V	3				ナデ	ナデ	密	○		○	○						暗褐色	黒褐色	普	77	細直沈線の組合せ文, 口唇刻目	
8	7	深鉢	出水	口縁	A	IV	3				貝殻条痕+ナデ	ナデ	密			○	○						黒褐色	明茶褐色	普		細直沈線の組合せ文, 口唇刻目	
8	8	深鉢	出水	口縁	A	VII, VIII	5				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普			○	○		黒粒				黒褐色	暗茶褐色	普	125	2本の平行直沈線の組合せ文, 口唇刻目	
8	9	深鉢	市来?	口縁	A	VI	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○							暗褐色	暗褐色	普		突帯	
8	10	深鉢	出水	口~胴	A	VIII	2				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○		○						暗茶褐色	暗茶褐色	普		刻目突帯, 口唇下刻目	
8	11	深鉢	出水	口縁	A	VIII	2				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						淡茶褐色	明茶褐色	普	45	刻目突帯, 口唇突起	
8	12	深鉢	出水?	口縁	A	VI	3				ナデ	ナデ	密	○		○							淡茶褐色	淡茶褐色	普		突帯	
8	13	深鉢	市来?	口縁	A	IV	2				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普			○	○						明黄茶褐色	暗褐色	普		刻目突帯	
8	14	深鉢	出水?	口縁	A	V	3				ナデ	ナデ	普	○		○	○						淡黄茶褐色	明茶褐色	普		刻目突帯	
8	15	深鉢	岩崎上	口縁	A	VI	2				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○		○	○						淡褐色	明茶褐色	普	34	直沈線, 口唇端刻目	
8	16	深鉢	岩崎上	口縁	A	VI	3				ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○						暗茶褐色	暗茶褐色	普		連続刺突文	
8	17	深鉢	指宿	口縁	A	VII, VIII	5				ナデ	ナデ	普	○		○							淡黄褐色	淡褐色	普	126	直沈線の組合せ文	
8	18	深鉢	市来?	口縁	A						ナデ	ナデ	普	○	○	○							淡褐色	淡茶褐色	普		連続刺突文	
8	19	深鉢	松山	口縁	A	IV	1				貝殻条痕+ナデ	ナデ	密	○	○	○							暗茶褐色	暗茶褐色	普		口唇に2本の直沈線	
8	20	深鉢	松山	口縁	A	VIII	2				ナデ	ナデ	密			○	○						暗茶褐色	暗茶褐色	普		口唇に2本の直沈線	
8	21	深鉢	松山	口縁	A	VIII	3				ナデ	貝殻条痕	普	○	○	○							暗茶褐色	暗褐色	普		口唇に3本の直沈線	
8	22	深鉢	松山	口縁	A	V					貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕	普	○	○	○	○						明茶褐色	明茶褐色	普		口唇に2,3本の直沈線	
8	23	深鉢	松山	口縁	A	III	2				ナデ	ナデ	普	○			○						黒褐色	明茶褐色	普		口唇に1本の直沈線	
8	24	深鉢	松山	口縁	A	IV	1				ナデ	貝殻条痕+ナデ	密				○	白粒					黒褐色	淡褐色	普	8	口唇に2本の直沈線+連続刺突文	
8	25	深鉢	松山	口縁	A	V	3				ナデ	ナデ	普	○		○	○						黒褐色	暗褐色	良	85	口唇に直沈線+2列の連続刺突文	
8	26	深鉢	松山?	口縁	A	VIII	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						淡茶褐色	暗茶褐色	普		口唇に直沈線+連続貝殻刺突文	
8	27	深鉢	松山?	口縁	A	VIII	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						明茶褐色	明茶褐色	普		口唇に連続貝殻刺突文	
9	28	深鉢	市来	口縁	A	V	3				ナデ	ナデ	密				○						暗褐色	暗褐色	普	69	連続刺突文	
9	29	深鉢	市来	口縁	A	VII	2				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						暗褐色	暗茶褐色	普		連続刺突文	
9	30	深鉢	市来	口縁	A	VIII	2				ナデ	ケズリ+ナデ	普				○						暗茶褐色	暗茶褐色	良		連続刺突文	
9	31	深鉢	市来	口縁	A	V	3				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○							明褐色	暗褐色	普		連続刺突文	
9	32	深鉢	市来	口縁	A	VI	2				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○		○	○						暗褐色	暗茶褐色	普	33	連続刺突文	
9	33	深鉢	市来	口~胴	A	V					ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						淡黄茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
9	34	深鉢	市来	口~胴	A	VIII	3				ナデ	ケズリ+ナデ	普	○		○	○						暗茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
9	35	深鉢	市来	口~胴	A	V	2	22.0			ナデ	ナデ	普	○		○	○						淡褐色	暗褐色	普		連続刺突文, 外面にス少量	
9	36	深鉢	市来	口縁	A	VI	1				貝殻条痕	貝殻条痕+ナデ	密			○	○						暗褐色	暗褐色	普		連続刺突文	
9	37	深鉢	市来	口~胴	A	VI	3				ナデ	ナデ	普			○	○						暗茶褐色	暗茶褐色	普		連続刺突文	
9	38	深鉢	市来	口縁	A	VIII	2				ナデ	ナデ	密	○		○	○						暗茶褐色	暗褐色	普		連続刺突文	
9	39	深鉢	市来	口縁	A	VIII	2				ケズリ+ナデ	ナデ	普	○			○						暗褐色	暗茶褐色	普		連続刺突文	
9	40	深鉢	市来	口縁	A	IV	3				貝殻条痕+ナデ・ミガキ	ナデ+一部ミガキ	普	○			○						黒褐色	暗褐色	良		連続刺突文	
9	41	深鉢	市来	口縁	A	III	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						明茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
10	42	深鉢	市来	口縁	A	VII	3				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						明茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
10	43	深鉢	市来	口縁	A	IV	2				ナデ	ナデ	普	○			○						黒褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
10	44	深鉢	市来	口縁	A	VII	2				ナデ	ナデ	普	○		○	○						明茶褐色	淡茶褐色	普		連続刺突文	
10	45	深鉢	市来	口縁	A	VI	5				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						明茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
10	46	深鉢	市来	口縁	A	VI	3				ナデ	ナデ	普	○		○	○						黒褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
10	47	深鉢	市来	完形	A			18.5	9.4	20.8	貝殻条痕+ナデ	ケズリ+ナデ	普	○		○	○						淡茶褐色	淡茶褐色	良		連続刺突文	
10	48	深鉢	市来	口~胴	A	IV	3				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○		○	○						淡褐色	暗褐色	普		連続刺突文	
10	49	深鉢	市来	口~胴	A	VIII	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						暗茶褐色	暗茶褐色	普		連続刺突文	
10	50	深鉢	市来	完形	A	VII	2	21.6	11.0	22.3	ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						暗茶褐色	淡茶褐色	良	1	連続刺突文, 底部脚台(円透孔有)	
10	51	深鉢	市来	口縁	A	VII	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○	白粒					明茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
10	52	深鉢	市来	口縁	A	VII	2				ナデ	ナデ	普	○		○	○						暗褐色	暗褐色	普		連続刺突文	
10	53	深鉢	市来	口縁	A	VI	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						明茶褐色	明茶褐色	普		2本の平行直沈線	
10	54	深鉢	市来	口縁	A	V	5				ナデ	ナデ	密	○	○	○							黒褐色	暗褐色	普		4本の平行直沈線	
10	55	深鉢	市来	口縁	A	VI	3				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○		○							暗褐色	暗茶褐色	普		2本の平行直沈線	
11	56	深鉢	市来	口~胴	A	VII	3	24.0			貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○								暗茶褐色	暗茶褐色	普		連続刺突文	
11	57	深鉢	市来	口縁	A	VIII	2				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	密	○			○						淡茶褐色	暗茶褐色	普		連続刺突文	
11	58	深鉢	市来	口縁	A	V	3				ナデ	ナデ	密	○		○	○						淡黒褐色	暗茶褐色	普		2本の平行直沈線	
11	59	深鉢	市来	口縁	A	IV	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○						淡黒褐色	黒褐色	普		連続刺突文	
11	60	深鉢	市来	口縁	A	VII	3				ナデ	ナデ	密	○		○	○						明茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
11	61	深鉢	市来	口~胴	A	VI	4				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○		○							淡茶褐色	黒褐色	良	103	連続刺突文, 口縁内面に黒のライン有	
11	62	深鉢	市来	口縁	A	VII	2				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	密	○		○							淡茶褐色	淡茶褐色	良		連続刺突文	
11	63	深鉢	市来	口縁	A	IV	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○	白粒					明茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文	
11	64	深鉢	市来	口縁	A	VIII	1				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	密	○	○	○	○	白粒					淡茶褐色	黒褐色	普		連続刺突文	
11	65	深鉢	市来	口縁	A	X	3				貝殻条痕	貝殻条痕+ナデ	密			○	○						淡黄茶褐色	淡褐色	良		連続刺突文	
12	66	深鉢	市来	口縁	A	VIII	2				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	密	○		○	○	黒粒					明茶褐色	暗褐色	普		連続刺突文	
12	67	深鉢	市来	口~胴	A	VI	4				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○	黒粒					明黄茶褐色	暗褐色	普	102	連続刺突文+沈線	
12	68	深鉢	市来	口縁	A	VI	2				ナデ	ナデ	普				○						暗黄褐色	黒褐色	普		連続刺突文+沈線	
12	69	深鉢	市来	口縁	A	VII, VIII	5				ナデ	ナデ	密	○	○	○	○						明茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文+沈線	
12	70	深鉢	市来	口~胴	A	V	2	21.6			ナデ	ナデ	密				○						淡黒褐色	暗褐色				

表5 出土土器・土製品観察表(3)

挿図	No.	器種	土器型式	部位	トレンチ	区	層位	法量 (cm)			器面調整		胎土						色調		焼成	文献43 No.	備考 (器形・文様の特徴等)	
								口径	底径	器高	内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火山	砂粒	他				内面
18	141	鉢	鐘崎	胴	A	IV	3				ミガキ	ミガキ	密	○	○	○	○			暗褐色	黒褐色	普	54	磨消縄文
18	142	鉢	鐘崎	口~胴	A	V	3				ミガキ	ミガキ	密	○	○	○	○			暗褐色	淡褐色	良	61	磨消縄文
18	143	鉢	鐘崎	胴部	A	VI	5				ミガキ	ミガキ	密	○	○	○	○			淡褐色	淡褐色	良		磨消縄文, 赤塗
18	144	鉢	鐘崎	口縁	A	V	4				ミガキ	ミガキ	密	○	○		○			暗褐色	暗褐色	良	5	磨消縄文, 赤塗
18	145	鉢	鐘崎	口縁	A	V	2				ミガキ	ミガキ	密	○	○		○	黒粒		暗茶褐色	暗褐色	良	28	磨消縄文, 赤塗
18	146	鉢	鐘崎	胴	A	IV	3				ミガキ	ミガキ	密	○	○	○	○			淡褐色	淡黄褐色	良	59	磨消縄文, 赤塗
18	147	鉢	鐘崎	胴	A	V	3				ミガキ	ミガキ	普	○	○		○			明褐色	明茶褐色	普		磨消縄文, 赤塗
18	148	鉢	鐘崎	口	A	VI	2				ナデ	ナデ	密	○		○	○			明茶褐色	明茶褐色	普	83	
18	149	鉢	疑縄	口	A	VII, VIII	5				ナデ	ナデ	密	○			○	黒粒		暗黄褐色	暗黄褐色	良	118	疑似縄文(巻貝)
18	150	鉢	疑縄	胴	A	III	2				ナデ	ナデ	密	○	○		○			明茶褐色	暗褐色	普	10	疑似縄文(巻貝)
18	151	鉢	鐘崎	胴~底	A	VI	4	9.0			ミガキ+ナデ	ミガキ+ナデ	密	○	○	○	○			明黄茶褐色	明黄茶褐色	普		
19	152	台付皿	市来	口縁	A	III	2				ナデ	ナデ	普	○		○	○			淡茶褐色	淡茶褐色	普	14	皿突起部, 内外面に赤色+白色塗彩
19	153	台付鉢	市来	口縁	A	III	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			暗褐色	暗茶褐色	普	17	鉢突起部, 口唇に沈線
19	154	台付皿	市来	口縁	A	IV	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		皿突起部, 突起部に穿孔
19	155	台付皿	市来	口縁	A	V	2				ナデ	ナデ	普			○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		皿突起部, 内外面に白色+赤色塗彩
19	156	台付皿	市来	口縁	A	IV	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	淡茶褐色	普		皿突起部, 内外面に白色+赤色塗彩
19	157	台付皿	市来?	口縁	A	VIII	3				ナデ	ナデ	密	○		○	○			淡褐色	淡褐色	普		皿部, 口唇部に粘土捨り文
19	158	台付皿	市来	口縁	A	IV	3				ナデ	貝殻条痕+ナデ	密	○		○	○			淡褐色	明茶褐色	普		皿口唇に条痕
19	159	台付皿	市来	胴	A	IV	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡褐色	淡褐色	普		赤色+白色塗彩
19	160	台付皿	市来	口縁	A	IV	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡黄褐色	暗褐色	普		突起部に凹点
19	161	台付皿	市来	口縁	A	VI, IX	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡黄褐色	明黄茶褐色	普		内面白色+外面白色&赤色塗彩
19	162	台付皿	市来	口縁	A	IV	3				ナデ	ナデ	密	○		○	○			暗茶褐色	明茶褐色	良	58	口唇に2本の直沈線, 内外面に赤色塗彩
19	163	台付皿	市来	底	A	V	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			暗茶褐色	明茶褐色	普		皿底部, 4支脚の痕跡
19	164	台付皿	市来	脚	A	IV	4	12.0			ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普	96	脚台に刻目突帯, 2透孔, 内外に赤色+白色塗彩
19	165	台付皿	市来	脚	A	VI	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		輪状脚底+支脚, 外面に赤色塗彩
19	166	台付皿	市来	脚	A	VIII	2	10.6			ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		脚台, 最低2か所の円透孔
19	167	台付皿	市来	脚	A	VII	2	9.0			ナデ	ナデ	普	○		○	○			明茶褐色	明茶褐色	普	46	沈線間に連続刺突文, 透孔
19	168	台付皿	市来	脚	A	IV					ナデ	ナデ	密	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		貝殻連続刺突文
19	169	台付皿	市来	脚	A	VI	2				ナデ	ナデ	密	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普	32	沈線+連続刺突文, 透孔
20	170	台付皿	市来	脚	A	I	1				ナデ	ナデ	密	○						淡茶褐色	淡白褐色	普		連続貝殻刺突文, 外面に白色塗彩, 底滑面
20	171	深鉢?	市来	脚	A	V	3				ナデ	ナデ	普	○		○	○			明茶褐色	明黄茶褐色	普		円透孔
20	172	深鉢?	市来	脚	A	V	5				ナデ	ナデ	普				○			明茶褐色	明茶褐色	普		円透孔
20	173	台付鉢	市来	脚	A	VII	3	10.0			ナデ	ナデ	密	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		連続貝殻刺突文, 楕円透孔, 外面に赤色塗彩
20	174	深鉢?	市来	脚	A	VI	4	7.0			ナデ	ナデ	密	○			○			暗茶褐色	明茶褐色	普		連続貝殻刺突文, 底滑面
20	175	深鉢?	市来	脚	A	III	2				ナデ	ナデ	普	○	○		○	黒粒		明茶褐色	明茶褐色	普		連続貝殻刺突文, 外面に白色塗彩?
20	176	深鉢?	市来	脚	A	VI	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明黄茶褐色	普		連続刺突文, 楕円透孔
20	177	深鉢?	市来	脚	A	IV	3,4	8.4			ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		短沈線
20	178	深鉢?	市来	脚	A	V	3	8.6			ナデ	ナデ	普			○				淡茶褐色	淡白褐色	普		底面及び外面に白濁色付着
20	179	深鉢?	市来	脚	A	V	4	8.4			ナデ	貝殻条痕+ナデ	普				○			淡茶褐色	明茶褐色	普	99	底面及び外面に白濁色付着
20	180	深鉢?	市来	脚	A	V	3				ナデ	ケズリ+ナデ	密							淡褐色	淡褐色	普		外面に白濁色付着, 底滑面
20	181	深鉢?	市来	脚	A	III	2	6.8			貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○					淡黄茶褐色	明黄茶褐色	普		外面に赤色塗彩?
20	182	台付皿	市来	脚	A	V	3				ナデ	ナデ	密	○	○	○	○			明茶褐色	淡黄褐色	普		脚柱中央に凹点, 底滑面及び外面に白濁色付着
20	183	小形鉢	不明	脚	A	VIII	3	4.6			ナデ	ナデ	普	○	○			白粒		淡褐色	淡褐色	普		若干脚台状になる上げ底
20	184	深鉢	市来	胴下	A	III	2				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普				○			暗褐色	淡茶褐色	普		
20	185	台付鉢	市来	胴下	A	V	5				ナデ	ナデ	普	○	○					淡茶褐色	淡茶褐色	普		
20	186	深鉢	市来	鉢底	A	V	2?				ナデ	ナデ	普			○				暗褐色	暗茶褐色	普		脚台付鉢の円盤底
20	187	深鉢	市来	鉢底	A	VIII	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○				暗褐色	暗茶褐色	普		脚台付鉢の円盤底
20	188	深鉢	市来	胴~底	A	VIII	2	9.6			ナデ	ナデ	普	○		○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		やや上げ底
20	189	深鉢	市来	底	A	VIII	5	10.4			ナデ	ナデ	普	○	○		○	白粒		明茶褐色	明茶褐色	普		
20	190	深鉢	市来	底	A	V	5	7.4			ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			暗茶褐色	暗茶褐色	普		
20	191	深鉢	市来	底	A	V	5	12.4			ナデ	ナデ	普			○				淡褐色	淡褐色	普		
20	192	深鉢	市来	底	A	VI	3	11.0			ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	黒褐色	普		底滑面に白濁色付着
21	193	深鉢	市来	底	A	III	2	10.8			ケズリ+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	明茶褐色	普		底面に白濁色付着
21	194	深鉢	市来	底	A	II	2	10.2			ナデ	ケズリ+ナデ	普	○	○	○	○			暗茶褐色	明茶褐色	普		底面に白濁色付着
21	195	深鉢	市来	底	A	III	2	12.0			ケズリ+ナデ	ナデ	普	○		○				淡黄褐色	明茶褐色	普		中央やや上げ底, 底面に白濁色付着
21	196	深鉢	市来	底	A	V	3	11.6			ナデ	ケズリ+ナデ	普	○	○					淡茶褐色	淡白褐色	普		底外面に白濁色付着
21	197	深鉢	市来	底	A	VI	5	10.6			貝殻条痕+ナデ	ケズリ+ナデ	普			○				淡黒褐色	淡黄褐色	普		中央やや上げ底, 底面に白濁色付着
21	198	深鉢	市来	底	A	VII	3	9.6			ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			黒褐色	暗茶褐色	普		
21	199	深鉢	市来	底面	A	X	3	10.8			ナデ	ナデ	普	○			○			淡褐色	明茶褐色	普		底面に白濁色付着
21	200	深鉢	市来	底面	A	VIII	3	11.0			貝殻条痕+ナデ	ナデ	密	○	○	○	○			淡茶褐色	淡褐色	普		底滑面に白濁色付着
21	201	深鉢	市来	底面	A	VIII	3				ナデ	ナデ	普	○		○	○			黒褐色	明茶褐色	普		底面に白濁色付着
21	202	深鉢	市来	底	A	VII	3	8.0			ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	淡褐色	普		底面に白濁色付着
21	203	深鉢	市来	底面	A	VIII	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		位置的にカット整形した可能性あり
21	204	深鉢	市来?	底	A	V	4	11.0			ケズリ+ナデ	ケズリ+ナデ	普			○				黒茶褐色	明茶褐色	普		中央やや上げ底, クジラの脊椎骨痕
21	205	深鉢	市来?	胴~底	A	VIII		13.5			貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕	密	○	○					淡黄褐色	暗茶褐色	普		クジラの脊椎骨痕?
21	206	深鉢	市来	底	A	II	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		網代痕
21	207	深鉢	市来	底	A	VIII	3	10.0			ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		浅い網代痕
22	208	深鉢	市来	口縁	A	III	2				ナデ	ナデ	普	○	○		○			黒褐色	暗黄褐色	普	11	沈線+連続刺突文, 口唇に突起
22	209	深鉢	市来	口~胴	A	III	2				ケズリ+ナデ	ナデ	普			○	○	○	織襷	淡茶褐色	淡茶褐色	普	16	外面沈線+刺突文, 内面曲沈線, 口唇突起
22	210	深鉢	市来	口縁	A	III	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	暗茶褐色	普	48	連続刺突文, 口縁波状突起

表6 出土土器・土製品観察表(4)

挿図	No.	器種	土器型式	部位	トレンチ	区	層位	法量 (cm)			器面調整		胎土							色調		焼成	文献 No.	備考 (器形・文様の特徴等)					
								口径	底径	器高	内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火山	砂粒	他	内面				外面				
22	211	深鉢	市来	口縁	A	III	2				ナデ	ナデ	普	○	○											15	短沈線+連続刺突文		
22	212	深鉢	市来	口縁	A	III	3				ナデ	ナデ	普	○	○	○										50	直・曲沈線文		
22	213	深鉢	出水?	口縁	A	VIII	2				ナデ	ナデ	密	○	○	○										44	疑似縄文: 沈線間は格子状細沈線		
22	214	鉢	疑縄	胴	A	VI					ミガキ+ナデ	ミガキ+ナデ	普	○	○	○										97	肩部に疑似(貝殻)縄文, 沈線に赤色塗彩		
22	215	深鉢	不明	口縁	A	VII	3				ナデ	貝殻条痕	普													124	口唇突起, 口縁下に線刻画?		
22	216	鉢	不明	口縁	A	II	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○												口唇刻目, 口縁下把手	
22	217	深鉢	不明	口縁	A	VI	3				ナデ	ナデ	普															口唇を取り巻く貼付文	
22	218	深鉢	不明	口縁	A	IV	3,4				ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○												口唇を取り巻く貼付文, 方形メンコの可有	
22	219	深鉢	不明	口縁	A	VI	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○												口縁下に貼付文	
22	220	加工品	市来?	胴	A	V	3	長軸 6.2			ナデ	ナデ	普	○	○	○												側面取り, 両面に穿孔途中の円孔	
22	221	加工品	鐘崎	胴	A	VI	2	長軸 6.4			ミガキ	ミガキ	普	○	○	○												側面粗面取り, 両面に穿孔途中の円孔	
22	222	加工品	不明	口縁	A	X	3	長軸 5.8			ナデ	ナデ	普	○	○	○												側面粗面取り, 方形メンコの可あり	
22	223	加工品	不明	胴	A	IV	2	長軸 5.0			貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○												側面粗面取り, 方形メンコの可あり	
22	224	土鉢	市来	口縁	A	III	2				ナデ	ナデ	密	○	○	○												土器片鉢, 把手を挟む両端に挟り有	
22	225	土鉢	市来	口縁	A	V	2				ナデ	ナデ	普	○	○	○												土器片鉢, 両端に挟り有	
22	226	深鉢?	市来?	把手?	A	IV	3				全体ナデ調整		普	○														市来式深鉢の口縁下把手の可有	
22	227	鉢?	南福寺?	把手?	A	IV	2				ナデ	ミガキ+ナデ	普	○														南福寺式鉢の装飾把手の可有	
22	228	浅鉢	入佐	口縁	A	VI	4				ミガキ	条痕+ミガキ+ナデ	普	○	○	○												口唇若干肥厚	
22	229	メンコ	市来	口縁	A	IV	3	長軸 11.6			ナデ	ナデ	普	○	○	○												3本沈線及び連続刺突文, 土器片鉢の可有	
22	230	メンコ	市来	口縁	A	VI, IX	3	長軸 6.8			貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕	密	○	○													連続刺突文, 周縁部を丁寧に整形	
22	231	メンコ	市来	口縁	A	VII	3	長軸 5.6			ナデ	ナデ	普	○														連続刺突文	
22	232	メンコ	市来	口縁	A	V	5	長軸 8.0			貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	密	○														2~3本沈線及び連続刺突文	
22	233	メンコ	市来	口縁	A	V?	2?	長軸 5.8			ナデ	ナデ	密	○														2+α本沈線及び連続刺突文	
22	234	メンコ	市来	口縁	A	VI	3	長軸 6.5			ナデ	ナデ	普															連続刺突文	
22	235	メンコ	市来	口縁	A	VI	2	長軸 5.4			ナデ	ナデ	普	○														連続刺突文?	
22	236	メンコ	市来	口縁	A	VI	2	長軸 6.0			ナデ	ナデ	普	○	○	○												連続刺突文	
22	237	メンコ	市来	口縁	A	VII	2	長軸 5.0			ナデ	ナデ	普	○	○	○												2+α本沈線	
22	238	メンコ	市来	口縁	A	III	2	長軸 4.9			ナデ	ナデ	普	○														連続刺突文	
22	239	メンコ	市来	口縁	A	VI, VII	3	長軸 (4.8)			ナデ	ナデ	普	○	○													連続刺突文	
22	240	メンコ	出水?	口縁	A	VI	2	長軸 4.9			ナデ	ナデ	普	○	○	○												沈線	
22	241	メンコ	鐘崎	胴	A	V	2	長軸 5.8			ミガキ	ミガキ	普	○	○													磨消縄文(溝文), 沈線内に赤色塗彩痕?	
22	242	メンコ	磨縄	胴	A	VI	2	長軸 4.4			ミガキ+ナデ	ナデ	普	○	○													磨消縄文, 小池原下層段階	
22	243	メンコ	不明	胴	A	V?	2?	長軸 7.0			ナデ	ケズリ	普	○	○	○													
22	244	メンコ	不明	底	A	VIII	2	長軸 6.8			ナデ	ナデ	普	○	○	○												底面利用	
22	245	メンコ	不明	胴	A	VI	3	長軸 5.8			貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○													
22	246	メンコ	不明	胴	A	V	4	長軸 6.5			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	247	メンコ	不明	胴	A	VII	3	長軸 6.2			ナデ	ナデ	普	○	○	○												1か所欠損部有(意図的か)	
22	248	メンコ	不明	胴	A	V?	2?	長軸 5.5			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	249	メンコ	不明	胴	A	VIII	3	長軸 5.4			貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○															
22	250	メンコ	不明	胴	A	VIII	2	長軸 5.3			ナデ	貝殻条痕	普	○	○														
22	251	メンコ	不明	胴	A	IV	3	長軸 5.0			ナデ	ナデ	普	○	○	○												周縁を丁寧に調整	
22	252	メンコ	不明	胴	A	V	3	長軸 5.4			ナデ	ナデ	普	○	○	○												周縁を丁寧に調整	
22	253	メンコ	不明	胴	A	V?	2?	長軸 4.7			ナデ	ナデ	普															周縁を丁寧に調整	
22	254	メンコ	不明	胴	A	VII	2	長軸 5.6			ナデ	ナデ	普																
22	255	メンコ	不明	胴	A	VII	3	長軸 4.9			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	256	メンコ	不明	胴	A	V?	2?	長軸 4.7			ナデ	ナデ	普	○	○														
22	257	メンコ	不明	胴	A	V	5	長軸 4.9			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	258	メンコ	不明	胴	A	VIII	3	長軸 4.5			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	259	メンコ	不明	胴	A	III	2	長軸 4.5			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	260	メンコ	不明	底	A	VII	2	長軸 4.3			ナデ	ナデ	普	○	○	○												周縁を丁寧に調整	
22	261	メンコ	不明	胴	A	IV	2	長軸 4.7			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	262	メンコ	不明	胴	A	IV	3,4	長軸 5.4			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	263	メンコ	不明	胴	A	IV?	3?	長軸 4.7			ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○													
22	264	メンコ	不明	胴	A	VI	2	長軸 4.5			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	265	メンコ	不明	胴	A	IV	2	長軸 4.5			ナデ	ナデ	普																
22	266	メンコ	不明	胴	A	VI	2	長軸 4.4			ナデ	ナデ	普	○	○														
22	267	メンコ	不明	胴	A	VII	2	長軸 4.6			ナデ	ナデ	普	○															
22	268	メンコ	不明	胴	A	VI?	2?	長軸 4.4			貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○														
22	269	メンコ	不明	胴	A	IV	3	長軸 4.2			ナデ	ナデ	普	○															周縁を丁寧に調整
22	270	メンコ	不明	胴	A	IV	1b	長軸 4.7			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	271	メンコ	不明	胴	A	V	5	長軸 4.7			ナデ	ナデ	普	○															
22	272	メンコ	不明	胴	A	II	2	長軸 4.4			ナデ	ナデ	普																
22	273	メンコ	不明	胴	A			長軸 4.3			ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○														
22	274	メンコ	不明	胴	A	I	1	長軸 4.7			ナデ	貝殻条痕+ナデ	普																
22	275	メンコ	不明	胴	A	IV	1b	長軸 4.6			ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○												1か所欠損部有(意図的か)	
22	276	メンコ	不明	胴	A	IV	1b	長軸 4.6			ナデ	ナデ	普	○															
22	277	メンコ	不明	胴	A	VIII	3	長軸 3.6			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	278	メンコ	不明	胴	A	IV	2	長軸 4.4			ナデ	ナデ	普	○															
22	279	メンコ	不明	胴	A	V	2	長軸 3.7			ナデ	ナデ	普	○	○	○													
22	280	メンコ	不明	胴	A	IV	2b	長軸 3.6			ナデ	ナデ	普	○															

表10 出土土器・土製品観察表(8)

挿入 No.	器種	土器 型式	部位	河口分類記号			法量 (cm)			器面調整		胎土						色調		焼成 No.	文献 No.	備考 (器形・文様の特徴等)	
				(区層等不明)	口径	底径	器高	内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火山	砂粒	他	内面	外面				
38 493	深鉢	出水	口縁	IV	9	49				ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			暗茶褐色	明茶褐色	良		短沈線+突帯, 口唇に刺突文
38 494	深鉢	出水?	口縁	IV	9	49				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			暗褐色	暗褐色	普		細沈線, 口唇に刺突文付突起
38 495	深鉢	出水	口縁	IV	9	49				条痕+ナデ	ケズリ+ナデ	普	○	○	○	○			明黄茶褐色	淡茶褐色	普		沈線+刺突文
38 496	深鉢	出水	口縁							ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			暗褐色	暗褐色	普		細沈線による渦文
38 497	深鉢	出水	口縁	VII	10	8				ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		羽状の短沈線, 口唇に刺突文+凹点付突起
38 498	深鉢	出水	口縁	VI	9	7				条痕+ナデ	条痕+ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		沈線+刺突文
38 499	深鉢	出水	口縁	VII	10	12				ケズリ+ナデ	ケズリ+ナデ	密	○	○	○	○			明茶褐色	淡茶褐色	普		沈線+貼付文付突起
38 500	深鉢	出水?	口縁	II	9	26				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			淡黄茶褐色	暗茶褐色	普		縦位の3本短沈線+横位の3本沈線
38 501	深鉢	出水	口縁	III	9	23				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	明茶褐色	普		縦位の2(+α)本短沈線+横位の4本沈線
38 502	鉢?	出水	口縁	II	9	4				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	淡茶褐色	普		数段の刺突連点文+刺突文付突帯, 口唇に刺突文
38 503	深鉢	出水	口縁	II	9	5				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	淡茶褐色	普	233	刻目付突帯, 口唇に細線刻目
38 504	深鉢	磨縄	口縁	III	10	5				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			淡黄茶褐色	明茶褐色	普	127	磨縄文, 口唇に貼り貼付文, 指宿式段階
38 505	深鉢	磨縄	胴	II	9	5				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			黒褐色	明茶褐色	普	235	磨縄文, 指宿式段階
38 506	鉢	小池原上	口縁	II	9	5				ミガキ+ナデ	ミガキ+ナデ	普	○	○	○	○			淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	普	238	磨縄文, 口唇に沈線, 外面全体+内面一部赤色塗彩
38 507	鉢?	疑縄	胴	V	10	6				条痕+ナデ	条痕+ナデ	普	○	○	○	○			暗黄茶褐色	黒茶褐色	普		巻貝の回転軸文による疑似縄文
38 508	鉢	鐘崎	口縁	II	9	24				ミガキ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡黄褐色	淡黄褐色	普	239	沈線+口縁端部に横状把手, 口唇に渦文+刺突文
38 509	鉢	鐘崎	口縁	II	9	5				ミガキ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡黄褐色	暗黄褐色	普	234	多重沈線, 口唇に連続刺突文
38 510	鉢	鐘崎	口縁	II	9	24				ミガキ+ナデ	ミガキ+ナデ	普	○	○	○	○			淡褐色	淡褐色	普		磨縄文, 口唇に沈線
38 511	鉢	磨縄	口縁							ミガキ+ナデ	ミガキ+ナデ	普	○	○	○	○			淡黄褐色	暗茶褐色	普	128	口縁直下に磨縄文
38 512	深鉢	疑縄	口縁	VII	10	17				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡褐色	暗褐色	普		円形刺突文による疑似縄文
38 513	深鉢	不明	口縁	IV	9	49				条痕+ナデ	条痕+ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	暗茶褐色	普		3(+α)段の曲沈線, 口唇に刻目
39 514	深鉢	指宿	口~胴	II	9	5				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			淡褐色	淡茶褐色	良	237	3本の平行直沈線
39 515	深鉢	指宿	口縁	IV	9	49				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		2本の平行直沈線
39 516	深鉢	指宿	口縁	IV	10	33				ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡褐色	暗茶褐色	普		2平行直沈線の組合せ(靴形文?)
39 517	深鉢	指宿	口縁	IV	10	33				貝殻条痕	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			淡褐色	黒褐色	普		2平行直沈線の組合せ(靴形文?)
39 518	深鉢	指宿	胴	II	9	5				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			黒茶褐色	明茶褐色	普	236	複数の直・曲沈線の組合せ
39 519	深鉢	松山?	口縁	VI	9	9				ケズリ+ナデ	ケズリ+ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		口唇に貝殻刺突文+山形頂部に貼付文
39 520	深鉢	松山?	口縁	II	9	33				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	密	○	○	○	○		白粒	明茶褐色	明茶褐色	良	240	口唇に沈(短)沈線+貝殻刺突文+山形頂部に刺突文
39 521	深鉢	松山	口縁	III	10	17				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	暗茶褐色	普	244	口唇に3本沈線
39 522	深鉢	松山?	口縁	II	9	5				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	淡茶褐色	普	232	口唇に貝殻条痕+2本沈線+刺突文
39 523	深鉢	松山	口縁	II	10	44				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			暗茶褐色	明茶褐色	普		口唇に貝殻復縁による疑似縄文
39 524	深鉢	松山	口縁	II	9	4				ナデ	ナデ	密	○	○	○	○			明黄茶褐色	明茶褐色	普		口唇に貝殻復縁による疑似縄文
39 525	深鉢	市来	口~胴	II	9	5	30.6			ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			暗茶褐色	暗茶褐色	普		3本の平行直沈線
39 526	深鉢	市来	口~胴	II	9	18				ナデ	ナデ(横+縦)	普	○	○	○	○			暗褐色	明茶褐色	普		横位1段の連続刺突文
39 527	深鉢	市来	口~胴	II	9	28	28.4			貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	◎			明茶褐色	明茶褐色	普		横位1段の連続刺突文
39 528	深鉢	市来	口~胴	II	9	15				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡褐色	淡茶褐色	普		横位1段の連続刺突文
39 529	深鉢	市来	口縁	IV	9	49				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			暗茶褐色	明茶褐色	普		横位4段の連続貝殻刺突文
40 530	深鉢	市来	口縁	I	10	44				ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		複数の直・曲沈線の組合せ
40 531	深鉢	市来	口縁	VI	9	7				ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	暗茶褐色	普		複数の直・曲細沈線の組合せ
40 532	深鉢	市来	口~胴	IV	9	49				ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			暗茶褐色	明茶褐色	普		2本の平行直沈線, 連続貝殻刺突文
40 533	深鉢	市来	口~胴	II	9	27	25.8			貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	◎			明茶褐色	暗茶褐色	普		2本の連続刺突文間に直・曲細沈線の組合せ
40 534	深鉢	市来	口縁	IV	9	49				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	暗茶褐色	普		2本の連続刺突文間に斜位の連続貝殻刺突文
40 535	深鉢	市来	口縁	III	9	5				ナデ	ナデ	普	○	○	○	◎			明茶褐色	明茶褐色	普		2段横位の連続貝殻刺突文
40 536	深鉢	市来	口縁	IV	9	49				ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			明黄茶褐色	明茶褐色	普		2本の連続刺突文間に1本の直沈線
40 537	深鉢	市来	口~胴	IV	9	49				ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	淡茶褐色	良		2本の連続刺突文間に連続蛇行曲沈線
40 538	深鉢	市来	口縁	VI	9	9				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	明茶褐色	普		2本の連続刺突文間に4本の直沈線
40 539	深鉢	松山?	口縁							ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明黄茶褐色	明茶褐色	普		口唇に2本の刺突文間に沈線+刻目付突起
40 540	深鉢	不明	口縁	VII	10	2				ナデ	ケズリ+ナデ	普	○	○	○	○			明黄茶褐色	暗褐色	普		口唇に刻目, 口縁端部に貼付文
40 541	深鉢	不明	口縁	III	10	48				貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○	◎			淡黄褐色	淡黄茶褐色	普	241	口縁端部に「X」字状貼付文
40 542	深鉢	不明	口縁	VI	9	9				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明黄茶褐色	明茶褐色	普	218	口唇に2本の巻貼付文
40 543	深鉢	不明	口縁	II	9	5				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	黒褐色	普	230	口唇に2重の塗り貼付文
40 544	深鉢	不明	口~胴	II	9	4				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○		白粒	暗褐色	淡褐色	普		口唇に塗り貼付文
40 545	深鉢	不明	口縁	V	9	34				貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	暗褐色	普		口唇に塗り貼付文
40 546	深鉢	不明	口縁	VI	9	10				ナデ	貝殻条痕	普	○	○	○	○			淡茶褐色	黒褐色	普		口唇に塗り貼付文
40 547	深鉢	不明	口縁	II	9	4				ナデ	ナデ	普	○	○	○	◎			淡黄茶褐色	淡茶褐色	普		口唇に連続貝殻刺突文
40 548	深鉢	西平	頸	III	9	6				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡黄褐色	暗黄褐色	普		頸部に連続刺突文+細沈線
41 549	鉢	出水?	口~肩				22.0			ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	暗茶褐色	普		壺状の器形
41 550	鉢?	出水?	脚台	V	9	4	6.8			ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	明茶褐色	普		脚接地面に白濁色付着, 脚側面に孔有
41 551	台付皿	市来?	皿	II	9	5				ケズリ+ナデ	ケズリ+ナデ	普	○	○	○	◎			明黄茶褐色	明茶褐色	普		皿口唇に細沈線+吸盤状突起
41 552	台付鉢	市来?	脚台							ナデ	ナデ	密	○	○	○	◎			淡茶褐色	明茶褐色	普	63	裝飾把手付脚柱(連続刺突文+沈線の組合せ)
41 553	深鉢?	出水?	脚台	VII	10	32				条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			黒褐色	暗黄褐色	普		横位2段の貝殻刺突文
41 554	台付皿?	市来?	脚台	I	10	34				ケズリ+ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普	243	刻目+沈線の脚柱, 外面に赤・白色塗彩(白地に赤)
41 555	台付皿?	不明	脚台	II	9	5				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		4本の脚柱有, 底端部に連続刺突文
41 556	台付皿	市来	皿	II	9	4				ケズリ+ナデ	ケズリ+ナデ	密	○	○	○	◎			明茶褐色	明茶褐色	普		口唇に吸盤状突起
41 557	深鉢?	出水?	脚台	II	9	26				ナデ	ナデ	普	○	○	○	◎			明茶褐色	明茶褐色	普		外面に沈線, 外面及び接地面内外に白濁色付着
41 558	台付鉢?	出水?	脚台	II	9	26				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明黄茶褐色	普		透孔+2段の刻目突帯, 接地面内外に白濁色付着
41 559	台付鉢	出水?	脚台	II	9	5	12.3			ナデ	ナデ	普	○	○	○	◎			明茶褐色	淡黄茶褐色	普		3本の脚柱(1本は欠損), 接地面内外に白濁色付着
41 560	深鉢	出水	底	IV	10		10.5			ケズリ+ナデ	ケズリ+ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	淡茶褐色	普		上げ底, 脚台状接地面に木の葉痕?
41 561	台付鉢?	出水?	脚台	II	9	5				ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			淡茶褐色	淡茶褐色	普		裝飾把手付脚柱(渦状沈線), 脚台端部に沈線

表11 出土土器・土製品観察表 (9)

挿図	No.	器種	土器型式	部位	河口分類記号			法量 (cm)			器面調整		胎土							色調		文献 43 No.	備考 (器形・文様の特徴等)		
					(区層等不明)	口径	底径	器高	内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火山	砂粒	他	内面	外面	焼成				
41	562	深鉢	不明	底	V	10	3		9.2			貝殻条痕+ナデ	ナデ	普	○	○	○	◎			明茶褐色	淡褐色	普		やや上げ底、底面周縁部に網代痕
41	563	加工品	市来	口縁					長軸 7.3			貝殻条痕	貝殻条痕+ナデ	普			○	○			淡茶褐色	淡茶褐色	普		方形メノコ状加工品、洗線+貝殻刺突文
41	564	メノコ	市来	口縁	V	9	15		長軸 5.7			ナデ	ナデ	普			○	○	○		淡黄褐色	淡黄褐色	普		連続刺突文+斜位の貝殻刺突文
41	565	メノコ	市来	口縁	III	10	5		長軸 5.1			ナデ	ナデ	普					○		淡黄褐色	淡黄褐色	普		連続刺突文間に斜位の貝殻刺突文
41	566	メノコ	市来	口縁	III	9	5		長軸 4.7			ナデ	ナデ	普	○	○	○	○			明茶褐色	明茶褐色	普		連続刺突文+縦位の貝殻刺突文
41	567	メノコ	不明	胴					長軸 5.3			ナデ	ナデ	普	○			◎			淡黄褐色	淡褐色	普		周縁を丁寧に調整
41	568	メノコ	不明	口縁	IV	10	33		長軸 5.7			貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	普				◎			淡黄茶褐色	暗茶褐色	普		方形メノコ
41	569	メノコ	不明	胴	IV	10	15		長軸 4.4			ナデ	ナデ	普			○	○			淡褐色	暗褐色	普		周縁を丁寧に調整
41	570	メノコ	不明	胴	III	9	5		長軸 3.5			ナデ	ナデ	普	○			◎			明茶褐色	明茶褐色	普		
41	571	メノコ	不明	胴	VI	9	12		長軸 3.3			ナデ	ナデ	普				○			暗褐色	明茶褐色	普		
41	572	加工品	不明	胴					長軸 4.0			ナデ	ナデ	普	○			○			黒褐色	暗茶褐色	普	139	内外に穿孔途中の円孔有
60	573	深鉢	出水	胴	B	トレンチII区						ナデ	ケズリ+ナデ	普	○	○		○			黒褐色	暗茶褐色	普		内面に煤片着 (年代測定試料No.3)

表12 出土石器・石製品観察表 (1)

挿図	No.	器種	石材	トレンチ	区	層	法量 (cm)			重量 (g)	備考	遺物注記	カード注記
							長さ	幅	厚さ				
42	S1	スクレイパー	安山岩				5.1	4.1	2.0	42.1	灰褐色	注記なし	No31. 市来. IV-9. questionNo15
42	S2	エンドスクレイパー	黒色安山岩	B	I	1	3.8	4.0	1.5	19.9			B. I. 10(77)S36. 3. 25
42	S3	使用痕のある剥片	黒曜石	A	VI	2	4.0	3.0	1.0	7.6	上半鼻産、漆黒色不透明		市来A. VI. 2(94)36. 3. 25(t)
42	S4	使用痕のある剥片	黒曜石	A	III	2	4.0	3.1	1.2	10.5	上半鼻産		No20 市来VII-10 A. III. 2 27日
42	S5	使用痕のある剥片	黒曜石	B	I	1	3.2	2.6	1.0	6.8	上半鼻産		No14 石 市来IV-9 B. I. 1(276)S36. 3. 30
42	S6	使用痕のある剥片	黒曜石	B	I	3	4.0	3.3	1.3	11.6	上半鼻産		No15 IV-9 B. I. 3(274)S36. 3. 30
42	S7	使用痕のある剥片	黒曜石	B	I	3					三船産、灰黒色ガラス質		
42	S8	使用痕のある剥片	黒曜石	A	VI	2	2.1	2.8	0.7	3.8	上半鼻産		市来A. VI. 2(94)36. 3. 25(t)
42	S9	石核	黒曜石				3.6	3.8	2.6	25.9	上半鼻産		市来S36. 3
43	S10	磨製石斧	砂岩				11.2	5.8	3.7	330			VI-10. 26
43	S11	磨製石斧	石英斑岩				11.0	5.4	3.7	371	乳房状、敲打具に転用、緑色		VI-10. 26 市来??24
43	S12	磨製石斧	細粒砂岩				10.9	5.0	4.3	341	乳房状、敲打具に転用、灰白色		石斧3区画より80cm北より 地表あり 4.5cm
43	S13	磨製石斧	石英斑岩	B	I	3	11.2	6.2	3.7	410			VI-10. 11. B. I. 3
43	S14	磨製石斧	細粒砂岩	B	II	みぞ	12.7	7.2	3.7	586	灰色		VI-10. 14 市来B-II. みぞ(293)S36. 3. 30
43	S15	磨製石斧	硬質砂岩	B	I	2	8.9	6.3	3.9	295	敲打具に転用、灰白色		No. 1. 石. 市来. IV-9 B. I. 2(186)S36. 3. 29
43	S16	磨製石斧	硬質頁岩				7.2	5.4	3.1	98.4	定角式、黒色		No. 27. VI-10
43	S17	磨製石斧	ホルンフェルス	B	II	3	10.2	5.7	2.5	211			No. 23 石 市来 VI-10 B. II. 3(246)30 6回目
43	S18	磨製石斧	ホルンフェルス				12.6	6.2	3.2	310	定角式		??(?)S36. 3. ?
43	S19	磨製石斧	砂岩				8.0	7.1	4.3	466	乳房状、灰褐色	市 VI-10?	
43	S20	磨製石斧	蛇紋岩				7.2	5.6	2.0	95.4	濃緑色		市来貝塚 第2日? 上層混入の恐れあり最下層
44	S21	磨製石斧(敲石)	ホルンフェルス				5.9	5.4	3.6	129.6	磨製石斧からの転用	市来	
44	S22	磨製石斧(未製品)	ホルンフェルス				17.0	6.1	4.3	630			VI-10. 29
45	S23	石錘	多孔質安山岩	A	V	3	6.5	6.1	1.6	78.1			No. 16 石 VII10 A. V. 3(266)S36. 3. 30
45	S24	石錘	多孔質安山岩	A	VI	2a	6.3	6.9	2.1	85.8			A. VI. 2a
45	S25	石錘	多孔質安山岩	A	VII	2	6.6	8.2	1.9	89.9	石錘の可能性		No. 6. 石. 市来. VI-10 A. VII. 2(62)3. 25
45	S26	円盤状石器	ホルンフェルス				9.4	9.1	1.9	145.5			注記なし
45	S27	磨石	多孔質安山岩				9.4	8.8	5.3	632			注記なし
45	S28	磨石	多孔質安山岩				11.7	9.3	5.1	835	灰褐色	市来	
45	S29	磨石	砂岩				11.9	10.6	5.2	1036	灰褐色		No. 29. 石. 市来. VI-10
45	S30	磨石	多孔質安山岩				10.3	8.5	5.0	644	灰色	市来	
45	S31	磨石	多孔質安山岩	A	VII. VII	5	12.9	11.6	5.2	1189	灰褐色		VI-10. 9
46	S32	棒状叩石	多孔質安山岩	B	I	3	8.2	3.0	1.6	51.2		注記なし	No15. IV-9. B. I. 3. (274)
46	S33	棒状叩石	凝灰岩	A	IV	2	8.4	3.4	2.6	88.1		注記なし	A. IV. 2(仮称)Tree
46	S34	棒状叩石	細粒砂岩	B	II	3	8.6	2.3	2.2	60.3	黒色	IV-9. 18. B. II. 3	No18 石. 市来IV-9. B. II. 3(244). 30 6回目
46	S35	棒状叩石	多孔質安山岩				10.0	3.5	2.8	130.9			No4 石 市来VII-9 市来 ? No13
46	S36	棒状叩石	多孔質安山岩	B	II	2	11.0	3.2	4.5	147.4		IV-9. 22	No22 IV-9. B. II. 2(216)S36. 3. 30 (5回目)
46	S37	棒状叩石	多孔質安山岩	B	IV	素~貝層	9.1	4.0	3.2	131.6		IV-9. 21	B. IV. 表層~貝層(205)S36. 3. 29
46	S38	棒状叩石	多孔質安山岩				11.3	5.1	3.0	212			No4 石 市来VII-9 市来 ? No13
46	S39	棒状叩石	砂岩	A	IV	2b	6.5	4.4	4.0	191			A. IV. 2b
46	S40	砥石	中粒砂岩	B	II	3	6.2	3.1	1.9	43	ストーンリタッチャー様	IV-9. 28	B. II. 3(250)S36. 3. 30
46	S41	砥石	中粒砂岩	B	I	2	13.0	5.1	1.1	95.9	黄褐色		VII-9. 24
46	S42	砥石	凝灰岩	A	VII	3	9.7	5.1	2.8	165.7		IV-9. 16 A. VII. 3	No. 16. 石. 市来. IV-9. A. VII. 3. (176)S36. 3. 29
46	S43	砥石	砂岩				8.4	7.2	2.7	244	黄褐色、部分的に赤化(被熱?)	注記なし	No2. 石. 市来. IV-9. questionNo16
46	S44	砥石	粗粒砂岩	B	II	3	9.6	7.7	2.7	157			VI-10. 15 6回目 市来. B. II. 3(252)S36. 3. 30
47	S45	擦切石器	砂岩				3.7	6.7	0.7	26.4			
47	S46	擦切石器	細粒砂岩	A	VI	2	4.4	5.4	0.6	15.7		市. 1	市来石. No1. A. V. 3(124)A. VI. 2. 36. 3. 28
47	S47	擦切石器	砂岩	A	III	2	5.7	9.7	1.1	54.6			市来 A. III. 2(138)S36. 3. 27
47	S48	特殊石製品	細粒砂岩	B	I	2	9.7	5.9	3.6	154.4	砥石様、陽石の可能性有		市来. 石. No. 9 36. 3
47	S49	特殊石製品	砂岩	B	VI	2	4.7	5.1	2.7	69.7	赤褐色		B. VI. 2. IV. 9. 3
47	S50	特殊石製品	細粒砂岩	B	I	4	4.1	5.2	3.0	64.7	叩石片の可能性も有、灰褐色		市来貝塚 B. I. 4. 3. 31 330
47	S51	特殊石製品	阿多溶結凝灰岩				8.3	4.4	3.5	94.7	文献43:第4図1、陽石の可能性有		市. 9

表13 出土石器・石製品観察表 (2)

挿図	No.	器種	石材	トレ ンチ	区	層	法量 (cm)			重量 (g)	備考	遺物注記	カード注記
							長さ	幅	厚さ				
48	S52	軽石製品	軽石				6.3	6.1	2.2	21.2	有孔	軽石 市来No4. 36. 3 人骨共伴か	
48	S53	軽石製品	軽石				9.5	3.7	1.6	10.7	有孔	市来軽石No. 2 36. 3	
48	S54	軽石製品	軽石				7.0	6.5	2.5	38.5	盤状	注記なし	
48	S55	軽石製品	軽石	B	I	みぞ	8.2	4.0	1.6	9.8	半月形	市来B. I. みぞ(294)S36. 3. 30	
48	S56	軽石製品	軽石	B	I	1	9.1	6.3	2.8	41.3		軽石No5 市来 B. I. 1(106)36. 3. 28	
48	S57	軽石製品	軽石	A	V	5	7.0	4.3	2.4	16.7		市. 6 軽石No 6 市来315. A. V. 5 36. 3. 31	
48	S58	軽石製品	軽石	B	I	1	9.5	7.3	1.8	42.6	盤状	市. 7 市来軽石No7. B. I. 1 36. 3	
48	S59	軽石製品	軽石	A	V	5	3.7	4.2	3.0	12.8		注記なし A. V. 5(317)S36. 3. 31 市来貝塚 S36年	
48	S60	軽石製品	軽石	B	II	2	9.4	4.5	2.6	22.4	砥石として使用?	カード B. II. 2(199)S36. 3. 29	
48	S61	軽石製品	軽石				15.0	6.8	4.1	62.6	舟形を意識か?	市来軽石No. 3. 36. 3	
48	S62	軽石製品	軽石	B	I	3	12.3	9.3	4.6	96.2		注記なし No. 43. 軽石. 市来IV-9. B. I. 3(276)S36. 3. 30	
49	S63	軽石製品	軽石	A	V	3	20.2	10.1	5.6	290		市来. A. V. 3 PS36. 47 S36. 3. 28 29	
49	S64	その他	頁岩	A	IV	3	7.7	9.9	1.6	107.5	スクレイパー様	市. 8 石. No8. 市来. A. IV. 3(282)36. 3. 30	
49	S65	その他	安山岩	A	III	3	7.2	7.9	1.8	180.8	敲打痕有, 黒灰色		
49	S66	その他	安山岩	A	VI	3	14.2	7.1	3.0	280	石斧の未製品?, 黒色		
49	S67	その他	多孔質安山岩	A	III	3	6.9	11.6	1.5	118.3		注記なし No7. 石. 市来. VII-9. A. III. 3(269). 36. 30	
49	S68	その他	凝灰岩	A	V, VII	3	4.4	4.8	0.9	30	円盤状石器の未製品?	注記なし No32. IV-9. A. V. 3(260)S36. 3. 30 A. VII. 3. S36. 3. 29	
49	S69	その他	凝灰岩	B	I	1	4.7	6.8	2.1	62.1	スクレイパー-orくさび様	注記なし No34. IV-9. B. I. 1(24)	
49	S70	その他	安山岩	B	II	III	9.5	6.5	2.0	139.1	打割に使用か?	IV-9. 28. B. II. 3. 30 B. II. 3. (250)S36. 3. 30 6回目	

表14 出土貝製品観察表 (1)

挿 図	掲載 番号	器種	貝種	トレ ンチ	区	層	法量 (cm)				重量 (g)	備考	遺物注記	カード注記
							外径(貝輪)		内径(貝輪)					
							最大長	最大幅	最大長	最大幅				
51	K1	有孔貝製品	ツキヒガイ	A	VIII		最大長 8.20	最大幅 10.15		21.86		市. 6	市来. 貝. No6. A. VIII. 36. 3. 30	
51	K2	筒状貝製品	イトマキボラ科	A	V	3	最大長 11.95	最大幅 2.35		45.46	殻軸利用	注記なし	No74 市来IV-9. A. V. 3(260)29. 貝芯サジ	
51	K3	貝刃	チョウセンハマグリ	A	VI	2	最大長 7.35	最大幅 9.55		43.65		注記なし	Aトレンチ. VI区 4層	
51	K4	貝刃	チョウセンハマグリ	A	VI	3	長さ (3.67)	幅 (6.61)		7.82			市来. A. VI. 3(201)S36. 3. 29	
51	K5	貝刃	タマキガイ				長さ (6.44)	幅 8.20		17.99			市来? No14	
51	K6	貝刃	タマキガイ	A	VIII	3	長さ (5.12)	幅 (6.52)		6.37			市来. A. VIII. 3(268)S36. 3. 30	
51	K7	貝輪	オオツタノハ	A	IV	3	長さ (7.50)	幅 (3.20)		4.20			イチキA. IV. 3(297)S36. 3. 29	
51	K8	貝輪	ウミギクガイ	A	VI	3	長さ (8.23)	幅 (6.94)		34.20			市14 市来No14 A. VI. 3(234)36. 3. 30南方産?奄美産類似	
52	K9	貝輪	マルサルボウ	B	I	3	6.38	7.74	3.45	4.50	27.16		No72. B. I. 3. (254)S36. 3. 30	
52	K10	貝輪	マルサルボウ				6.69	8.20	4.20	5.30	34.94		No51?No10	
52	K11	貝輪	マルサルボウ	B	IV	4	6.22	7.70	3.60	4.75	31.42		No76. B. IV. 4(304)S36. 8. 31	
52	K12	貝輪	マルサルボウ	B	IV	4	6.02	7.36	3.75	5.00	23.08		No76. B. IV. 4(304)S36. 8. 31	
52	K13	貝輪	マルサルボウ	A	VIII	2	5.66	7.39	3.50	5.00	24.03	注記なし	市来 A. VIII. 2. No88 S36. 3. 25	
52	K14	貝輪	タマキガイ				7.22	8.00	3.25	4.20	43.63	市19		
52	K15	貝輪	タマキガイ				6.74	7.79	4.05	3.90	26.42	市29		
52	K16	貝輪	タマキガイ	A	VII	3	6.30	6.75	3.84	4.65	19.50		No74. 市来IV-9 A. VII. 3. S36. 3. 29	
52	K17	貝輪	タマキガイ				6.95	7.94	4.10	5.10	32.61	市. 4	No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
52	K18	貝輪	タマキガイ	A	VII	3	6.70	8.08	4.77	5.00	21.44		No79. A. VII. 3(270)S36. 3. 30	
52	K19	貝輪	タマキガイ				4.12	7.09	4.12	4.75	16.85	市21		
52	K20	貝輪	タマキガイ				6.96	7.91	4.00	4.90	35.87	市15		
52	K21	貝輪	タマキガイ	B	I	3	6.00	7.09	4.40	5.00	15.20	注記なし	No70 B. I. 3(284)S36. 3. 30	
52	K22	貝輪	タマキガイ	B	II	3	6.41	7.03	4.25	4.93	18.60		B. II. 3(245)S36. 3. 30. 6回目	
53	K23	貝輪	マルサルボウ				7.56	9.78	3.05	3.90	73.44	市32		
53	K24	貝輪	マルサルボウ				6.63	7.90	3.50	4.30	46.42	市. 22	No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
53	K25	貝輪	マルサルボウ				7.86	10.25	2.90	5.30	66.79	市. 3	No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
53	K26	貝輪	タマキガイ				7.65	8.43	3.10	3.60	51.34	市. 28	No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
53	K27	貝輪	タマキガイ				6.31	7.31	2.50	3.45	33.61	注記なし	No82 貝輪. 市来. IV-9 questionNo3	
53	K28	貝輪	タマキガイ				6.14	6.84	1.85	2.90	22.69	市31		
53	K29	貝輪	タマキガイ				6.59	7.25	3.41	2.70	27.91	注記なし	No82 貝輪. 市来. IV-9 questionNo3	
53	K30	貝輪	タマキガイ				6.87	8.00	2.30	3.40	40.35	市. 6	No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
53	K31	貝輪	タマキガイ				6.55	7.44	2.45	3.40	31.64	市. 24	No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
53	K32	貝輪	タマキガイ				6.14	6.55	2.70	3.30	26.40	注記なし	No84 貝輪. 市来. IV-9 ? No24	
53	K33	貝輪	タマキガイ				6.55	7.40	2.52	3.15	30.54	注記なし	No82 貝輪. 市来. IV-9 questionNo3	
53	K34	貝輪	タマキガイ	B	II	3	6.10	7.17	3.40	3.80	19.28		市来. B. II. 3(241)S36. 3. 30 6回目	
53	K35	貝輪	タマキガイ				6.72	7.66	3.56	4.40	20.09	市. 5	No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
53	K36	貝輪	タマキガイ				6.68	7.54	3.17	3.91	29.63	市13		
54	K37	貝輪	マルサルボウ				7.20	9.04	4.65	6.50	50.57	研磨痕有	市. 5 No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
54	K38	貝輪	マルサルボウ				7.10	9.38	6.45	6.67	45.14	研磨痕有	市. 1 No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
54	K39	貝輪	マルサルボウ	B	I	3	6.81	8.79	4.07	6.25	38.57	研磨痕有	市来. B. I. 3(284)S36. 3. 30	
54	K40	貝輪	タマキガイ	A	VI	5	6.96	8.00	4.70	5.55	21.73	研磨痕有	市来. A. VI. 5(310)S36. 3. 31	
54	K41	貝輪	タマキガイ	B	IV	3	6.85	7.48	4.90	5.75	21.43	研磨痕有	市来 B. IV. 3(267)S36. 3. 30	
54	K42	貝輪	タマキガイ	A	VII, VII	5混合	7.29	7.57	5.20	5.07	26.98	研磨痕有	市来. A. VII. A. VII. 5混合 S36. 3. 31 (312)	
54	K43	貝輪	タマキガイ				7.05	7.40	5.15	4.60	26.16	研磨痕有	市. 6 No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
54	K44	貝輪	タマキガイ	A	VII, VII	5混合	7.58	8.05	4.69	5.16	28.54	研磨痕有	注記なし No64 A. VII. A. VII. 5. 混合(313)S36. 3. 31	
54	K45	貝輪	タマキガイ				6.75	7.60	4.56	4.61	22.33	研磨痕有	市. 1 No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
54	K46	貝輪	タマキガイ				7.60	8.21	4.75	5.69	29.81	研磨痕有	市. 7 No4 VIII-1 市来貝塚 貝輪	
54	K47	貝輪	タマキガイ				6.48	7.97	4.89	5.20	21.96	研磨痕有	市来 ? No7	

表15 出土貝製品観察表 (2)

挿図	掲載番号	器種	貝種	トレ ンチ	区	層	法量 (cm)				重量 (g)	備考	遺物注記	カード注記
							外径(貝輪)		内径(貝輪)					
							最大長	最大幅	最大長	最大幅				
54	K48	貝輪	タマキガイ	B	II		7.75	8.48	5.40	5.80	24.32	研磨痕有	市来 B. II. ? (c5)S36. 3. 27	
54	K49	貝輪	タマキガイ	A	VI, IX	3混	6.97	7.87	4.90	5.40	19.51	研磨痕有	市来 A. VI, IX. 3混(164)かくらん S36. 3. 29	
55	K50	貝輪	タマキガイ	A	VII	3	7.22	8.34	4.55	5.35	32.68	研磨痕有	市来A. VII. 3S36. 3. 29	
55	K51	貝輪	タマキガイ	B	II	3	—	8.10	—	5.80	17.45	研磨痕有	イチキB. II. 3(252)S36. 3. 30 6回目	
55	K52	貝輪	タマキガイ	A	VIII	5	—	8.11	—	5.35	22.67	研磨痕有	市来第2号付近 A. VIII. 5(321)S36. 3. 31	
55	K53	貝輪	タマキガイ	B	II	3	—	—	—	—	12.43	研磨痕有	市来B. II. 3(250)S36. 3. 30 6回目	
55	K54	貝輪	タマキガイ				—	6.68	—	4.40	17.13	研磨痕有	市来 ? No24	
55	K55	貝輪	タマキガイ	A	VIII	3	—	—	—	—	14.74	研磨痕有	市来A. VIII. 3(254)S36. 3. 30	
55	K56	貝輪	タマキガイ				—	—	—	—	8.59	研磨痕有		No18 貝. 市来. V-9
55	K57	貝輪	タマキガイ	B	III	2	—	—	—	—	15.42	研磨痕有	市来. B. III. 2(182)S36. 3. 29	
55	K58	貝輪	タマキガイ	B	II	3	—	7.45	—	6.10	8.25	研磨痕有	市来B. II. 3(251)S36. 3. 30 6回目	
55	K59	貝輪	タマキガイ	B	I	3	—	—	—	—	7.93	研磨痕有	市来. B. I. 3(275)S36. 3. 30	
55	K60	貝輪	タマキガイ	B	II	3	—	—	—	—	3.27	研磨痕有	市来 B. II. 3(259)S36. 3. 30 6回目	
55	K61	貝輪	タマキガイ	B	II	3	—	—	—	—	9.59	研磨痕有	市来. B. II. 3(251)S36. 3. 30 6回目	
55	K62	貝輪	タマキガイ	B	II	3	—	—	—	—	6.01	研磨痕有	市来. B. II. 3(243)S36. 3. 30 6回目	
55	K63	貝輪	タマキガイ				—	—	—	—	11.51	研磨痕有	市来 ? No3	
55	K64	貝輪	タマキガイ	B	I	3	—	—	—	—	8.18	研磨痕有	市来 B. I. 3(276)S36. 3. 30	
55	K65	貝輪	タマキガイ	B	II	みぞ	—	—	—	—	6.78	研磨痕有	市来B. II. みぞ(293)S36. 3. 30	
55	K66	貝輪	タマキガイ	B	I	3	—	—	—	—	3.74	研磨痕有	市来. B. I. 3(284)S36. 3. 30	
55	K67	貝輪	タマキガイ				—	—	—	—	7.53	研磨痕有	市来 ? No24	
55	K68	貝輪	タマキガイ	B	I	2	—	—	—	—	14.36	研磨痕有	市来. B. I. 2(224)S36. 3. 30 6回目	
56	K69	貝輪	タマキガイ	B	I	3	6.09	7.43	4.50	5.65	10.59	研磨痕有	市来B. I. 3(284)S36. 3. 10	
56	K70	貝輪	タマキガイ	B	II	2	—	7.82	—	6.70	10.00	研磨痕有	市来B. II. 2(185)S36. 3. 29	
56	K71	貝輪	タマキガイ	A	VIII	3	—	7.05	—	5.50	9.96	研磨痕有	市来A. VIII. 3(269)S36. 3. 20	
56	K72	貝輪	タマキガイ				—	7.57	—	5.75	10.10	研磨痕有	市来 ? No24	
56	K73	貝輪	タマキガイ	B	II	2	—	8.02	—	6.50	8.20	研磨痕有	市来B. II. 2(216)S36. 3. 30 5回目	
56	K74	貝輪	タマキガイ	B	II	3	—	6.83	—	5.80	5.67	研磨痕有	市来B. II. 3(250)S36. 3. 30 6回目	
56	K75	貝輪	タマキガイ	A	VII	3	—	—	—	—	13.24	研磨痕有		No79 .貝輪. 市来. IV-9. A. VII. 3(270)S36. 3. 30
56	K76	貝輪	タマキガイ	B	I	1	—	—	—	—	4.97	研磨痕有		No7 .貝. 市来. V-9 B. I. 1(129)28
56	K77	貝輪	タマキガイ	A	V	3	—	—	—	—	8.74	研磨痕有	市来 A. V. 3 PS36. 47 S36. 3. 29	
56	K78	貝輪	タマキガイ				—	—	—	—	6.26	研磨痕有	市来 出土区・層・不明?No6	
56	K79	貝輪	タマキガイ	B	I	3	—	—	—	—	6.79	研磨痕有	市来. B. I. 3(276)S36. 3. 30	
56	K80	貝輪	タマキガイ	B	II	3	7.96	—	5.30	—	10.17	研磨痕有	市来. B. II. 3(245)S36. 3. 30 6回目	
56	K81	貝輪	タマキガイ	A	VII	3	—	—	—	—	8.01	研磨痕有	市来 A. VII. 3(271)S36. 3. 30	
56	K82	貝輪	タマキガイ	B	I	3	—	—	—	—	1.64	研磨痕有	市来 B. I. 3(276)S36. 3. 30	
56	K83	貝輪	タマキガイ	B	I	3	—	—	—	—	4.27	研磨痕有	市来B. I. 3(254)S36. 3. 30	
56	K84	貝輪	タマキガイ	B	I	3	—	—	—	—	3.29	研磨痕有	市来. B. I. 3(253)S36. 3. 30	
56	K85	貝輪	マルサルボウ				—	—	—	—	10.02	研磨痕有	市来 ? No24	
56	K86	貝輪	タマキガイ	B	I	2	7.53	—	4.60	—	24.57	研磨痕有	イチキB. I. 2(224)S36. 3. 30 6回目	
56	K87	貝輪	マルサルボウ	B	III	2	—	8.08	—	5.90	16.99	研磨痕有	市来B. III. 2(かくらん)3. 27	
56	K88	貝輪	マルサルボウ	A	IV	3	—	—	—	—	17.97	研磨痕有	市来. A. IV. 3(148)攪乱 S36. 3. 28	

表16 出土骨角製品観察表

挿図	掲載番号	器種	素材	トレ ンチ	区	層	法量 (cm)			重量 (g)	備考	遺物注記	カード注記	
							長さ	幅	厚さ					
							57	H1	筧状骨製品					動物の中足骨
57	H2	筧状骨製品	鳥類の脛骨	B	I	3	11.90	1.50	1.10	11.20		市14市来B. I. 3(276)S36. 3. 30	市来骨No14. B. I. 3(276)36. 3. 30	
57	H3	筧状骨製品	イノシシの牙	A	VI, IX	3混	7.75	2.45	0.70	6.86		市来. 土師片混. A. VI, IX. 3混(164)S36. 3. 29	市来. 骨No10. A. VI, IX. 混(164)36. 3. 29	
57	H4	釣針	鹿角	A	V	3	4.65	0.80	0.72	2.68		針先欠損	注記なし	魚3. 市来. A. V. 3(126)36. 3. 28
57	H5	簪	鳥類の脛骨	A	VIII	2	8.50	1.55	0.60	6.20		市. 9	市来. 骨No9. A. VIII. 2	
57	H6	刺突具	イノシシの牙				6.90	0.80	0.95	6.13		注記なし		
57	H7	刺突具	不明	B	II	1	12.35	0.80	0.75	7.59		市13市来B. II. 1(308)S36. 3. 31	市来骨No13. B. II. 1(308)S36. 3. 31	
57	H8	刺突具	イノシシの牙				5.75	1.00	0.50	3.06		注記なし	6回目	
57	H9	刺突具?	鹿角	A	IV	2	5.55	1.20	0.95	7.44		A. IV. 2	A. IV. 2仮称TWO	
57	H10	擦痕を有する骨製品	イノシシの牙	A	V	2	5.00	2.00	1.40	12.78		注記なし	A. V. 2	
57	H11	擦痕を有する骨製品	イノシシの牙	A	V	3	5.60	2.00	1.50	16.27		A. V. 3(208)S36. 3. 30		
57	H12	擦痕を有する骨製品	イノシシの牙	A	VI	3	5.75	2.15	1.70	19.13		A. VI. 3(242)		
57	H13	切断痕のある骨製品	イノシシの牙	A	VIII	5	4.90	0.90	0.95	5.10		注記なし	第2号付近A. VIII. 5(321)S36. 3. 31	
57	H14	切断痕のある骨製品	イノシシの牙	A	VIII	3	2.70	0.85	0.75	1.70		A. VIII. 3. 29		
57	H15	切断痕のある骨製品	イノシシの牙	A	VII	2	4.50	0.65	0.80	1.69		市. 2	骨市来No2. A. VII. 2 S36. 3	
57	H16	切断痕のある骨製品	イノシシの牙	A	VII	2	3.65	0.65	0.75	1.68		注記なし	A. VII. 2	
57	H17	切断痕のある骨製品	イノシシの牙	A	VIII	2	3.40	1.00	0.70	2.46		注記なし	A. VIII. 2(88)	
57	H18	加工痕のある骨製品	鳥類の橈骨	A	VI	3	5.15	0.80	0.75	1.65		刻み有	注記なし	A. VI. 3(131)S36. 3. 28
57	H19	刺突具	鹿角	B	III	2	10.85	5.00	2.30	37.10		市14市来B. III. 2(217)S36. 3. 30	市来骨No14. B. III. 2(217)36. 3. 30	
57	H20	刺突具	鹿角	A	VII	3	10.80	1.90	1.90	27.39		A. VII. 3(158)S36. 3. 2		
57	H21	垂飾品	イタチザメ椎骨	A	III	2	2.80	3.05	2.10	6.16		中央穿孔	市. 8	市来. 骨. No8. A. III. 2(149)36. 3. 25
57	H22	垂飾品	イタチザメ椎骨	A	VI	4	2.80	2.80	1.32	4.60		中央穿孔	市. 11	市来. 骨. No11. A. VI. 4(292)36. 3. 30
57	H23	垂飾品	魚類の椎骨	A	VI	2	1.60	1.60	1.37	3.07		中央穿孔	市. 9	市来. 骨. No9. A. VI. 2
57	H24	垂飾品	魚類の椎骨	A	VIII	2	1.28	1.28	0.62	0.62		中央穿孔	市. 7	市来. 骨. No7. A. VIII. 2(88)36. 3. 25
58	H25	土器製作台?	クジラ椎骨	B	II	3	19.20	15.10	2.25	0.29		注記なし	市来. B. II. 3. 30	
58	H26	土器製作台?	クジラ椎骨	B	II	2	24.00	27.60	2.55	0.52		注記なし	B. II. 2(185)S36. 3. 29	

(3) 自然遺物および人骨

昭和36(1961)年調査で本貝塚から出土している自然遺物、動物遺体と貝類、人骨について整理しておきたい。

① 動物遺体

動物遺体については、表2文献44の中で報告(西中川駿・松元光春・河口貞徳1991「市来貝塚の動物遺体」『鹿兒島考古』25 鹿兒島県考古学会)されている。この報告を参考に出土状況の概要について整理する。

出土状況 A、B2つのトレンチから出土した動物遺体の総重量は23,359.6g(Aトレンチ16,854.4g、Bトレンチ2,845.2g、いずれか不明分3,660.0g)であった。動物別では哺乳類が22,918.7gと最も多く、全体の98%を占め、次いで魚類の320.2gで、その他(爬虫類・両生類・甲殻類・鳥類)は極めて少量であった。

区画別ではAV区が最も多く5,693.0gで最も多く、次いでAVI区の4,442.7gであった。また、層別では、Aトレンチでは3層(6,959.2g)、Bトレンチでは2層(1,443.7g)が多く、2、3層で全体の70%を占めた。

出土動物種 主な動物種としては以下のようなものが確認されている。

〈哺乳類〉イノシシ・シカ・オオカミ・イヌ・タヌキ・アナグマ・ノウサギ・ニホンザル(鳥類)ヤマドリ・カモ・ツル(爬虫類)ウミガメ・イシガメ(両生類)ヒキガエル(甲殻類)モズクガニ(魚類)タイ類・ハタ科・ブダイ科・サメ

特徴について 報告にある「考察」から出土動物遺体の特徴について引用する。

- 哺乳類の中では、特にイノシシ(64%)、シカ(31%)で全体の95%を占める。
- タヌキやアナグマよりもサルが多いことから、サルも食用とされていた可能性がうかがわれる。
- 本県の遺跡の中で出土類例が少なく珍しいものとして、オオカミ・カモシカがいる。
- 骨格別にみると、後肢骨が30.3%で最も多く、次いで前肢骨26.7%、頭骨・胴骨となる。胴骨の出土が少ないことは、イノシシやシカの解体場所が居住地と異なる場所で行われたと考えられる。
- イノシシ・シカ・サルの頭蓋や長骨は良く割断されていることから、脳や骨髓食の存在が示唆される。

ちなみに表1-6の調査ではイノシシ・シカ等の他に、テンやイタチ、オオヤマネコなどの哺乳類も出土している。特にオオヤマネコの出土は九州初であった(表2文献43)。また、表1-7の調査では、ツキノワグマやクジラ・イルカも出土している(表2文献47)。

また、調査のたびに少量ながらイヌが出土している。イヌについては、「狩猟の伴侶として、また、番犬として、最も古くから家畜化された動物であり、県下でも8か所の縄文遺跡から検出され、骨の大きさから、いずれ

も小型イヌであったことが推測される」と述べられている(表2文献43)。

② 貝類

貝類については、表2文献43と47において、坂下泰典による分析・同定が掲載されている。それぞれ表1-6と7の発掘調査成果としての報告であった。坂下は表2文献47の中で、携わった2回の発掘調査で出土した貝類を整理し、3類61科139種の目録を作成した。

本報告である昭和36(1961)年調査については、独立した分析・同定結果としての報告はないが、出土貝類の同定を行って、種類ごとにサンプルを茶封筒に入れ、赤マジックで名称を付した資料が遺物と共に残されていた。

前述の坂下の目録を参考にしながら、昭和36年調査時の貝類について以下に記す。

〈腹足類〉トコブシ・イシダタミガイ・コシダカガンガラガイ・ヒメクボガイ・ウズイチモンジガイ・サザエ・スガイ・イシマキガイ・カノコガイ・フトヘナタリガイ・ヘナタリガイ・タケノコカワニナ・カワニナ・ツメタガイ・ウニレイシガイ・レイシガイ・イボニシ・バイ・ヤマタニシ・ヘソアキクボガイ・タケノコガイ・チリメンボラ・イタヤガイ

〈斧足類〉

マルサルボウ・クジャクガイ・マガキ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・オキシジミ・アサリ・シオフキガイ・イソシジミ・ヤマトシジミ

また坂下は、表1-6の発掘調査を踏まえ、「貝類から見た川上貝塚の環境」と題する小論を発表している(表2文献45)。その中で「この貝塚周辺を基点として出漁した海岸は変化に富んでいたと想定される」とし、当時の貝塚周辺の海辺の様子について以下のようにイメージ化した。

「まず、生活水の源と想定される八房川に生息するカワニナ、海岸近くの淡水と海水の混じる汽水帯域に棲息するタケノコカワニナ・イシマキガイ・ヤマトシジミがある。さらに川が運んで泥土によって形成された砂泥地帯に棲息するウミニナ・フトヘナタリガイ・オキシジミ等やこの地域より淡水の混入が少ない砂泥と礫まじりの場所を好むアサリ・イソシジミである。同地域の転石や岩礁に着生するマガキや、岩礁地帯で干潮時に見られるヒメクボガイやクボガイ等の多種類の巻貝類、そして干潮時の砂浜でハマグリ・シオフキガイなど、以上6通りもの条件の異なる棲息地が推定できる」と述べ、豊かな周辺環境の様子を具体的に示した。

また、出土量としてはハマグリやマガキが多いこと、フトヘナタリガイ・イシマキガイ・ヤマトシジミがそれに次ぐこと、貝輪として用いられたマルサルボウやタマキガイは貝輪以外では極わずかの出土量しかないことなどの特徴を述べている。

③ 人骨

人骨については、第3章(1)遺構①埋葬遺構の項でも述べたが、昭和36(1961)年調査で3体の縄文人骨が検出されている。

市来式土器期とされる1号と2号の検出状況は図6(P9)に示した。3号人骨の検出状況(図64参照)については、実測図がなく掲載できなかったが、それぞれ



写真1 1号人骨(熟年女性)



写真2 2号人骨(熟年女性)



写真3 3号人骨(熟年男性)

※「河口コレクション」所蔵(撮影者不明)

の検出状況の概略図が図5に掲載されているので参考にさせていただきたい。また、検出状況の写真が図版5(P87)に、全身骨格の写真を図版14(P96)に掲載した。ここでは頭蓋骨の正面写真を掲載する(写真1~3)。

これらの人骨の検討・同定を行った内藤芳篤によると、市来縄文人骨は「女性になお不明な点を残しながらも、従来言われていた南九州の低身・短頭の集団とは異なり、ほかの九州縄文人骨との類似性が強いこと」が明らかになったとした。

特に推定身長については、「縄文人の平均は160cm未満のことが多いが、九州では、御領、西北九州両縄文人に見られるように多少高いようである。この中でも市来縄文人は163.46cmで、かなり高身である」「女性では一般に縄文人の身長は150cm未満であるが、市来縄文人も147.54cm(平均)であり、他の縄文人と大きな差はない」と述べ、3号人骨の高身長について述べている。

ところで、この3体以外にも、市来貝塚出土の人骨についての記載が2つある。

1つは清野謙次の論考である(表2文献2)。この中で清野が発掘調査した際に女性の人骨が検出されたことが記されている。そしてそれは田幡丈夫によって報告されたことも記されている。表2において文献3としたのがそれである。ただし残念ながら今回実見することができず、報告の詳細について触れることができなかった。機会をとらえて、確認作業を行いたいと考えている。

もう1つは表1-6の発掘調査で検出された事例で、小片丘彦・竹中正巳・佐熊正史によって報告されている(表2文献43)。

頭蓋骨の一部と左側と考えられる肋骨片が遺るのみの資料で、8トレンチから検出されたもので、「遺存骨格は混泥土層中にあり、骨質自体は比較的丈夫である。頭蓋骨片が示す諸形態から女性と推定され、年齢は、歯の咬耗、頭蓋縫合などから壮年期に属すと思われる」との所見が述べられている。

さらに、保存状態は良くないものの、縄文人骨の希少価値を考慮して、可能な限り詳細な計測や観察を行ったとして、以下のような総括がなされている。一部繰り返しになるが、そのまま引用する。

- 1 人骨の所属年代は、考古学資料から縄文時代後期と考えられる。
- 2 残存していたのは同一個体の人骨片で、頭蓋の一部と肋骨片が残っていたにすぎない。
- 3 乳様突起は小さく、下顎体の諸径も小さいことから、女性と考えられる。
- 4 歯の咬耗、頭蓋縫合の所見から壮年期と推定される。
- 5 下顎の歯に、特殊磨耗が認められた。

以上、これまで男性1体、女性4体分の人骨が出土しているということになる。

(4) 自然科学分析

放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究センター

① はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5 慢年前までの年代測定が可能である (中村2003)。

② 試料および方法

試料は、市来貝塚の発掘調査 (昭和36年3月) において、河口貞徳氏により採取された炭化材2点および土器 (付着炭化物) の1点の計3点である。表16に試料の詳細を示す。試料の前処理として超音波洗浄、有機溶剤処理 (アセトン使用)、酸-アルカリ-酸処理 (AAA処理) を行い、測定は加速器質量分析法 (AMS法) で行った。

③ 測定結果

AMS法によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。表16にこれらの結果を示し、図58に各試料の暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (0/00) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25 (0/00) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを無計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差 (\pm) は1 σ (68.27%確率) である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正年代値を併記した。また、AD1950年以降の試料については、 $F^{14}\text{C}$ 値 (AD1950年の大気中の ^{14}C 濃度を1として計算した値) を併記した。

暦年代 (Calendar Years)

放射性炭素 (^{14}C) 年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C

濃度の変動や ^{14}C の半減期の違いを較正している。暦年代較正には年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定法および福井県水月湖の年縞堆積物データなどにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは、IntCal 20、較正プログラムはOxCal 4.4である。なお、1950年以降の試料については、Post-bomb atmospheric NH_2 (核実験後の北半球における較正曲線データ) を使用した。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確立法により1 σ (68.27%確立) と2 σ (95.45%確立) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ内の縦軸上の曲線は、 ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

④ 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 (炭化材) では 305 ± 20 年BP (2 σ の暦年代でAD1508~1594, 1618~1646年)、No.3 (土器付着炭化物) では 3810 ± 20 年BP (BC2341~2316, 2309~2196, 2173~2146年) の年代幅が得られた。No.2 (炭化材) については、基点となるAD1950年より以降の試料と考えられ、 $F^{14}\text{C}$ 値は 1.0047 ± 0.0026 (2 σ の暦年代でAD1955~1955年) である。

なお、樹木 (炭化材) による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

【文献】

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会「日本先史時代の14C年代」. 日本第四紀学会, p. 3-20.
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p. 301-322.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), p. 337-360.
- Hua, Q., Barbetti, M., Rakowski, A. Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. Radiocarbon, 55 (4), p. 1-14.
- Paula J Reimer et al., (2020) The Intcal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). Radiocarbon, 62 (4), p. 725-757.

表17 市来貝塚の放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定No. PED-	試料詳細	種類	前処理 測定法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年較正用 年代(年BP)	暦年代(較正年代)	
								1 σ (68.27%確率)	2 σ (95.45%確率)
1	47959	A-VIII区 3層, 98	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.65 ± 0.17	305 ± 20	306 ± 19	cal AD 1523-1573 (56.31%) cal AD 1630-1640 (11.96%)	cal AD 1508-1594 (73.98%) cal AD 1618-1646 (21.47%)
2	47960	B-II区 3層, 250	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.36 ± 0.17	(-37 ± 20) F ^{14}C : 1.0047 ± 0.0026		Post-bomb NH2: cal AD 1955-1955 (68.27%)	Post-bomb NH2: cal AD 1955-1955 (95.45%)
3	47961	B-II区 192	土器付着 炭化物 (内側)	AAA処理 AMS法	-25.77 ± 0.17	3810 ± 20	3812 ± 22	cal BC 2288-2268 (17.28%) cal BC 2261-2204 (50.98%)	cal BC 2341-2316 (5.01%) cal BC 2309-2196 (83.16%) cal BC 2173-2146 (7.27%)

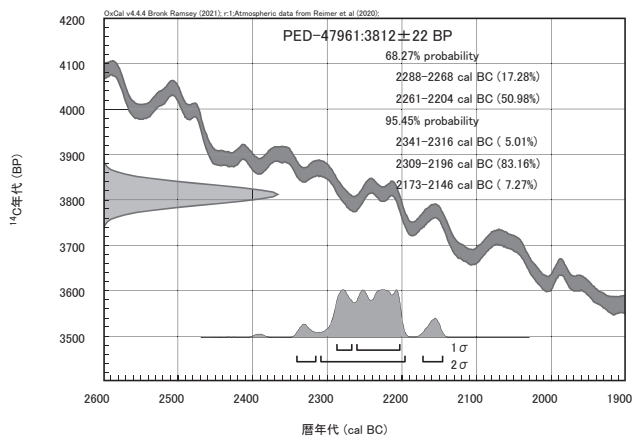
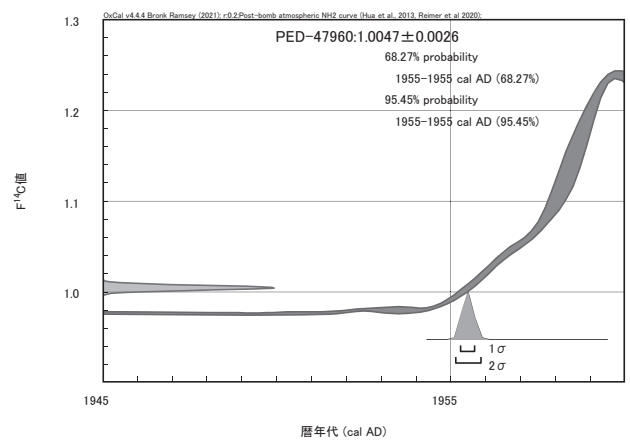
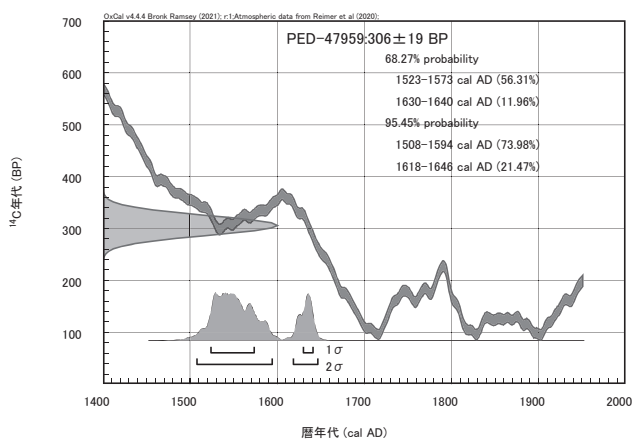


図59 暦年較正結果

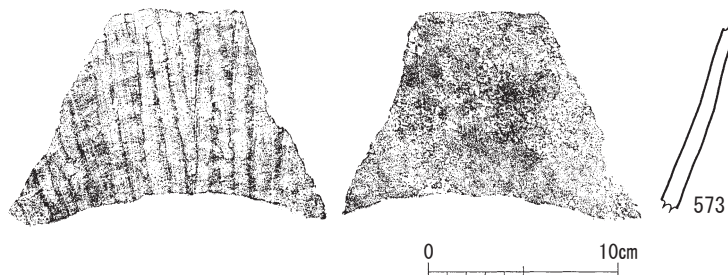


図60 試料No. 3の出水式土器銅部片実測図

第4章 総括

第1節 遺跡としての市来貝塚

市来貝塚は縄文時代後期を代表する遺跡として古くから調査・研究の対象となってきた。表2で示したように、考古学関係事(辞)典や概説書をはじめとする多くの関連文献があることもそれを物語っているといえる。言い換えれば、縄文時代の九州南部の様相を知る上で、欠かせない遺跡ということになる。

そのような評価を受けている今日の市来貝塚の存在を明らかにするきっかけを作った方々に、まずは感謝したい。第2章第1節で紹介したように、遺跡としての認識される最初のきっかけを作ったのが、当時西市来尋常高等小学校の訓導であった有村栄助であった。

有村が当時市来郵便局長であった野田幸男に寄せた手紙に記されており、その要約が『市来町郷土誌』に掲載されている(表2文献33)ので以下で紹介したい。

有村は、地元の江夏盛吉という人物(魚の干物などを川上方面に売りに行く仕事をしていた)に駐車場であった際、「貝殻の出るところは知らないかと聞いたら、川上にある」という情報を得た。そこで有村は同僚の神村武助・矢筈野義直・永尾歳行らを誘い試掘したところ、貝塚であることを確認したため、当時の勝目實楨村長に相談し地代8円をもらい、当時鹿児島専売局に勤務していた考古学研究者の山崎五十麿(のちに市来専売局長)に依頼して発掘調査が実施された。大正10(1921)年3月のことである。これが最初の発掘調査となる。

有村が江夏に尋ねただりから、有村自身もともと考古学に興味があったからこそこのセリフだと考えられる。

市来貝塚に初めて考古学的メスを入れた山崎は、さっそく考古学関係の機関誌である『考古学雑誌』で遺跡の紹介を行っている。その年の8月に刊行されるというスピード感は見習うべき姿勢である。これによって市来貝塚の存在は学会全体に周知されることとなり、全国的な研究活動を行っていた三森定男や清野謙次等の研究対象にも含まれて行くこととなり、鹿児島県のみならず、九州ひいては西日本を代表する縄文貝塚として認識されるようになった(有村と山崎については表2文献36を参照)。

その後、鹿児島地元の考古学研究者である寺師見國や河口貞徳によって、それぞれ昭和12(1937)年、昭和25(1950)年に小発掘が行われ、昭和13(1938)年に三森によって型式設定される市来式土器を中心とした遺物(特に土器)研究の基盤が出来上がっていった。そして発見から30年近く経過した昭和35(1960)年、「貝塚の盗掘が行われ、貝塚が荒らされるという事件」(表2文献44)が起り、県と相談した市来町が学術調査の実施を計画。河口を調査責任者とする発掘調査が実施されることになり、市来貝塚が再び大きく注目されることにな

る(以下、「昭和36年調査」とする)。この調査結果が本報告である。

市来貝塚の位置環境については、第3章第1節で述べた。平成に入って2回の発掘調査が実施されているが、その報告書である表2文献43の中で、市来貝塚の位置と当時の海岸線をイメージし、標高10mラインを提示した図が掲載されている(図61で再掲)。

市来貝塚が形成された場所は、八房川の中流域として入江が発達し、眼下に海面もしくは干潟が、そして背後には標高150~200m程度の低山が広がる自然環境豊かな台地(微高地)縁辺であったと考えられる。特に海や低地との関係性については、第3章第2節(3)で紹介した坂下泰典の環境復元イメージが有効である(表2文献45)。

第2節 発掘調査の成果から

市来貝塚での考古学的な発掘調査は、これまで7回実施されている(表1参照)。今回報告の対象となったのが5回目の調査、「昭和36年調査」である。わずか10日間、調査総面積53.5㎡であるが、A、Bそれぞれのトレ



図61 縄文時代の推定海岸線(表2文献43より)

ンチで多くの成果が得られている。この「昭和36年調査」の成果に、平成に入って市来町教育委員会が遺跡の範囲確認を目的として実施した、平成2（1990）年の調査（以下「平成2年調査」とする）平成4（1992）年の調査（以下「平成4年調査」とする）の成果も加え、遺跡の在り様について整理してみたい。

これら3回の調査地点を示したのが図62である（図4を再掲）。貝塚としての中心部は、「昭和36年調査」のA及びBトレンチの周辺である。また、図63は「平成2年度調査」の報告書（表2文献43）に掲載された、貝塚の推定エリアを図化したものである。「昭和36年調査」のBトレンチにも混土貝層が存在するので、このエリアについて厳密にいうと、純貝層が存在する範囲と捉えていいと考えられる。

これまで調査された各調査区の遺物出土状況から把握できることを改めて整理したい。

貝塚部分の位置から、貝塚は南側の台地縁辺から5m前後の高低差のある斜面へ向けて広がっており、貝塚形成のイメージとして、台地上に生活の根拠地があるものと想定されることは従来から指摘されていることである。平成に入ってから2回の発掘調査は、まさにその生活痕跡を探すことも主たる目的であった。

それによると台地上の16～18、20、22トレンチでは遺

構・遺物ともに確認されていない。ただし正確にいうと、既に削平されていたために縄文時代該当層はなく、本来の状態は確認できなかったということになる。その他の地点の多くでは縄文時代の遺物や遺構が確認されており、遺跡としてはかなりの広がりをもつものと考えられる。

縄文人の活動を時間的に理解するための手段として土器型式がある。やはり本貝塚を標式とする市来式土器が全体的に出土する。そのような中、「昭和36年調査」では、Aトレンチで市来式土器、Bトレンチで出水式土器がそれぞれ主として出土した。平坦面と斜面という違いはあるが、ほぼ隣接しながらも、出土の様相が異なっており、当時の生活空間の在り様を考える上で注目される調査結果と言える。ちなみにBトレンチ南側の台地上の4トレンチ（拡張部分の4-F区を含む）では、出水式土器とともに岩崎上層式や指宿式土器も出土しており、Bトレンチとの関係が考えられる。また、ここでは貝塚部分ではあまり見られない西平式土器も一定程度出土している。これまで把握できた数少ない遺構である土坑（西平式土器・石皿・炭化木の実等が出土）も検出されている。さらには21トレンチからは、丸尾式土器や納骨式土器が多く出土しており、市来式土器前後、あるいは貝塚形成前後の様相が少しずつ明らかになってきている

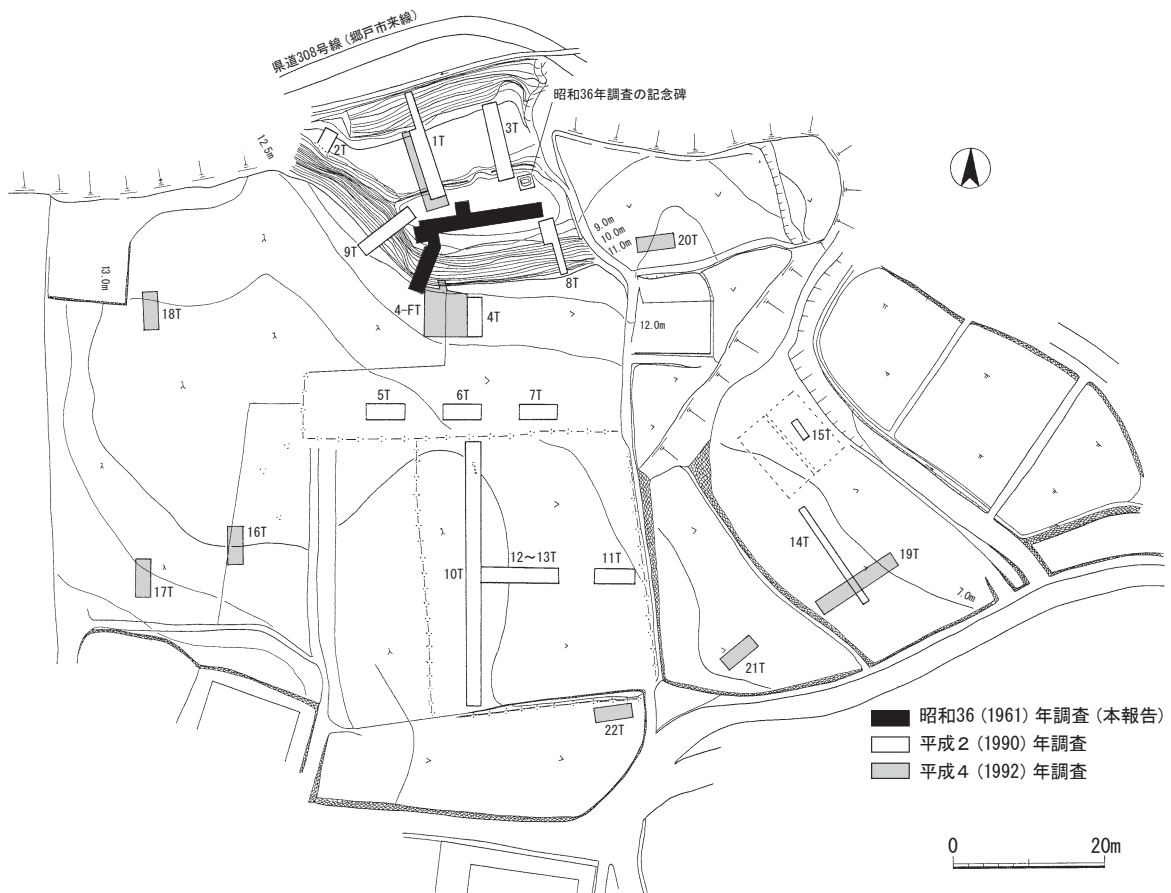


図62 市来貝塚発掘調査地点位置図（表2文献47を参照）



図63 「昭和36年調査」と「平成2年調査」のトレンチ位置と貝塚推定範囲 (表2文献43より)

ことが分かる。

その他の遺物としては、南九州の縄文時代後期前半期によく見られる円盤状土製加工品、いわゆるメンコが本貝塚からも多く出土した(「昭和36年調査」で計218点出土。うち80点掲載)。

また、貝輪の多さも本貝塚の特徴である。「昭和36年調査」分で総数271点(うち85点掲載)出土した。多くはタマキガイ、次いでマルサルボウで、平成に実施された2回の調査とも同様であった。すでに周知されているオオツタノハ製の資料(図51K7)も特筆される。

図62は河口貞徳が記録した、市来貝塚の発掘調査日誌で、昭和36年3月31日(金)の日付がある。つまり、「昭和36年調査」の最終日の記録である。3ミリ方眼メッシュのノートに万年筆で記録されている。日誌には人骨のスケッチが2か所描かれている。これはBトレンチの最下部で検出された3号人骨の出土状況である。注目したいのは、日誌の中に「少量の出水式土器の破片を人骨出土付近に出土」という記述である。第3章第2節(1)でも触れたように、これまで伴ったとされる「沈線文土器」を指宿式土器と捉え、3号人骨は指宿式土器期の人骨と記されている例(表2文献38等)があるが、当時の日誌では出水式土器が近接して出土していたとある。Bトレンチからは指宿式土器も出土しているが、圧倒的に出水式土器が多く出土していることを考慮する

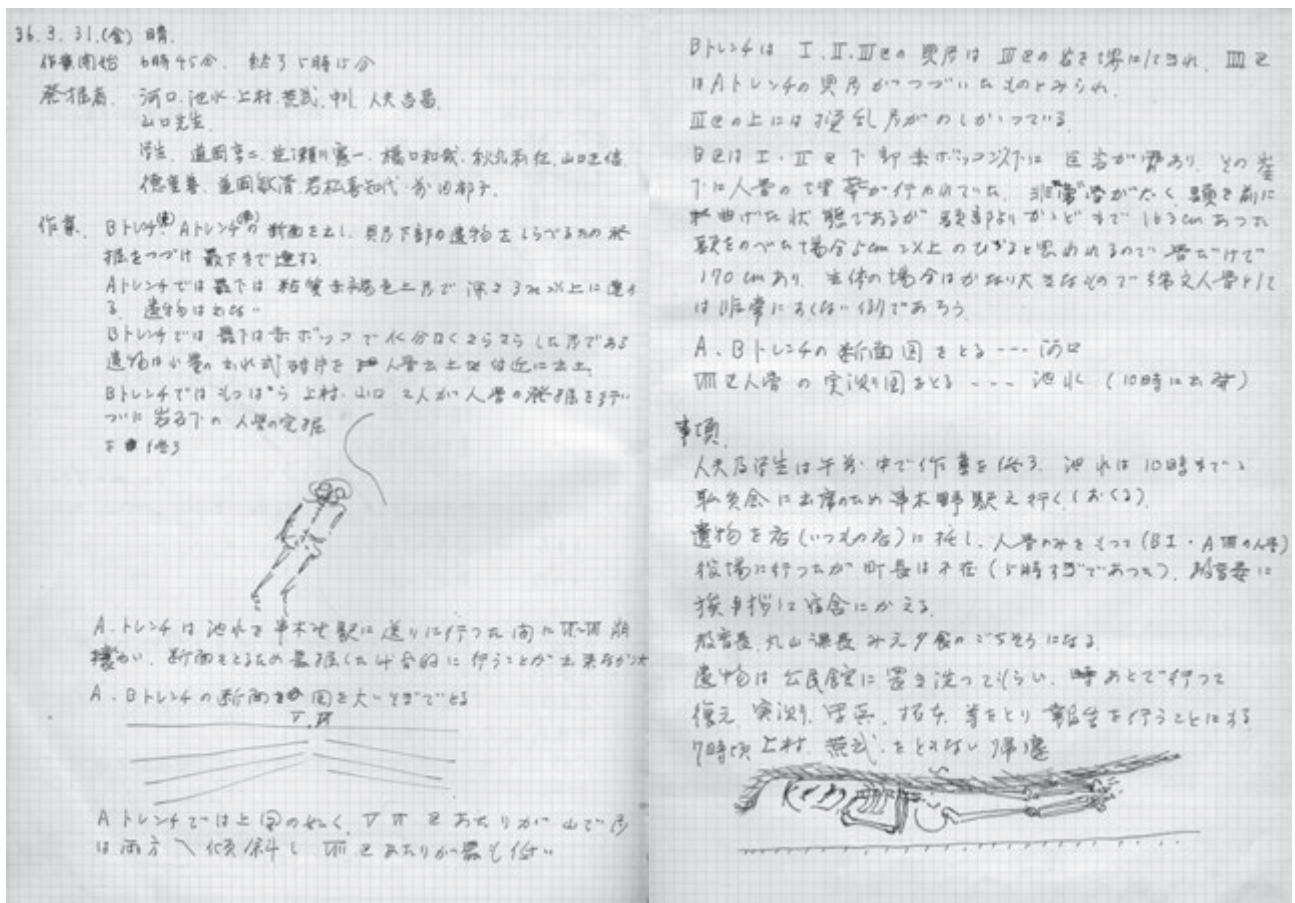


図64 「昭和36年調査」の3月31日付日誌(河口貞徳作成)

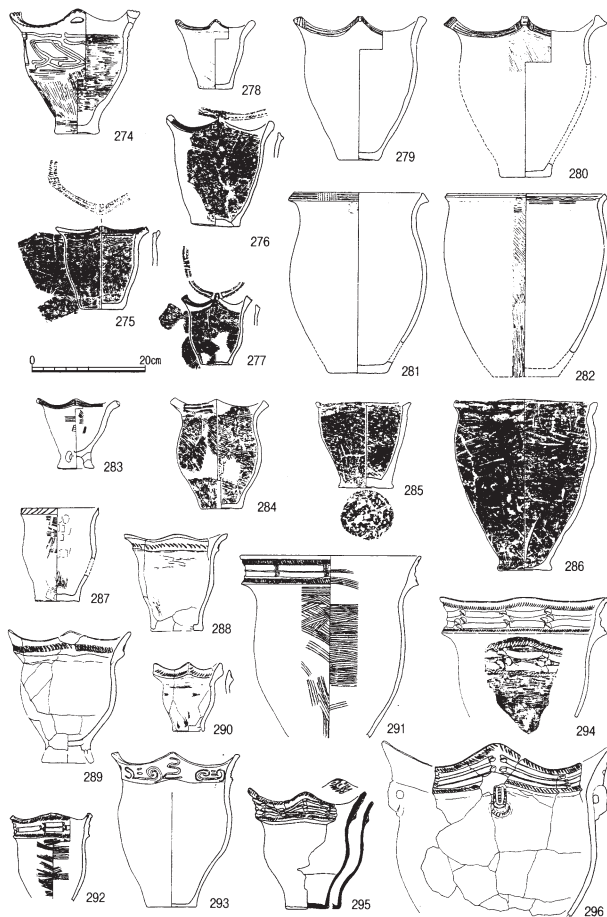


図9 松山式(274~286)、市来式(1)(287~296)

274鹿児島・倉園A、275~277鹿児島・田中堀、278~282鹿児島・一添松山、283~286鹿児島・帖地、288~290・296鹿児島・干迫、287・291~293鹿児島・草野、294鹿児島・市来、295鹿児島・武

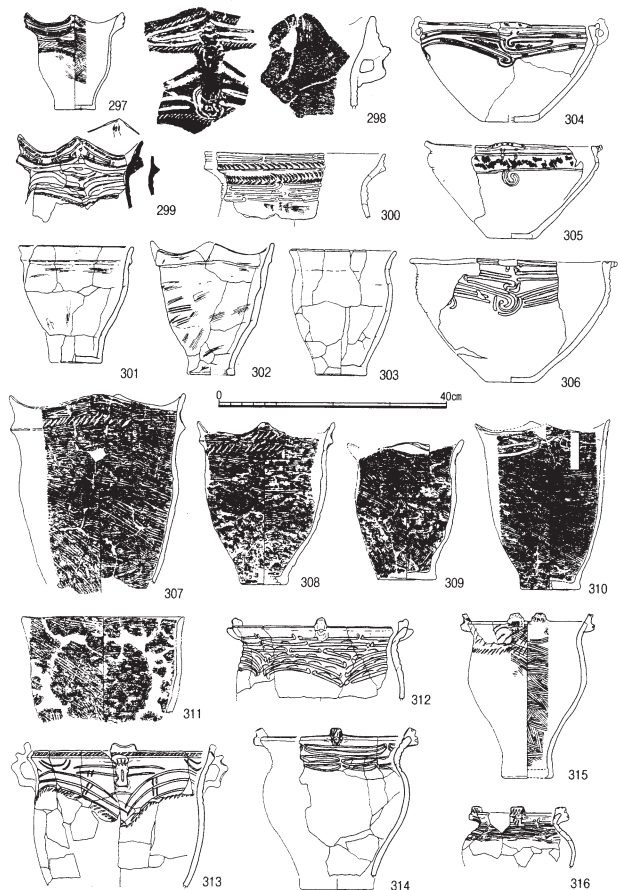


図10 市来式(2)(297~316)

297・315鹿児島・草野、298・301~306・312~314・316鹿児島・干迫、299鹿児島・武、300鹿児島・浅川牧、307~311宮崎・竹ノ内

図65 各地の市来式土器(深鉢)および関連土器(表2文献55より)

と、絶対ではないが、3号人骨の帰属時期は出水式土器期と考えた方が妥当性が高いと考えられよう。

第3節 市来式土器について

本田道輝が整理した市来式土器の研究史(表2文献43等)からもわかるように、「市来貝塚」と共に「市来式土器」という名称も、古くから研究の対象となってきた。表2をもみても、その重要性を知ることができよう。

型式設定者の三森定男以来、小林久雄・寺師見國・木村幹夫・河口貞徳・賀川光夫・小林行雄・乙益重隆・前川威洋・本田道輝・松永幸男他、多数の研究者によって研究対象として取り扱われてきた。その間に確認された、沖縄本島にある浦添貝塚での出土(表2文献25)は衝撃的である。九州島の南に展開する南西諸島や、五島列島あるいは西四国まで、市来式あるいは市来式的な土器の広がりが知られており(表2文献41等)「市来縄文人」たちの在り様も古くから注目されてきた。

図65は近年の考古学的成果をもとに市来式土器及びその周辺の土器をまとめたものである(表2文献55)。

274~286は市来式土器の祖形とされる松山式土器である。中でも274はその原形と考えられる資料で、胴部に

は指宿式的な沈線文が展開する。304~306は市来式土器と一部の地域で共伴すると考えられる鐘崎式土器である。312~316は従来草野式土器と呼ばれ、市来式土器の後続型とされたものであるが、今日は市来式土器の範疇で捉えられる資料である。現在ではこの後に丸尾式土器が続くものと考えられている(表2文献49)。

古くから市来式土器との関係が取りざたされてきた磨消縄文系の土器については、小池原上層式土器の後半から鐘崎式土器、そして北久根山式土器へと続く流れが想定される。その後の様々な遺跡の調査成果から、従来から言われている「西平式土器まで」という併行関係については、重複する時期は無いもの捉えてよさそうである(表2文献55等参照)。とは言え、北久根山式土器との関係性をはじめ、遺跡数や出土量が多い割にはまだまだ不明な部分も多く、研究の余地が多く残されている点は他の考古資料と同じである。

市来貝塚は平成6(1994)年3月16日付で県の史跡に指定されている。本報告が市来貝塚や市来式土器をはじめとする多くの出土品に対する、さらなる研究・評価へ向けた新たな一歩となれば幸いである。

写真図版



市来貝塚の現況 1
： 県指定史跡の標柱と説明板



市来貝塚の現況 2
： 昭和 36 年調査の記念碑



市来貝塚の現況 3
： 昭和 36 年調査の A トレンチ跡

遺跡の近景 (2020 年 3 月)



発掘調査前の状況 1
: A トレンチの位置 (北東側から)



発掘調査前の状況 2
: A トレンチの位置 (南東側から)



発掘調査前の状況 3
: A トレンチの位置 (南西側から)

遺跡の遠景・近景 (1961年3月)



市来貝塚の遠景
：北東側の平地より



発掘調査風景 1
：Aトレンチ（東側から）



発掘調査風景 2
：Aトレンチ（東側から）

遺跡の遠景及び発掘調査風景



発掘調査風景 3
： Bトレンチ（南側から）



発掘調査風景 4
： Bトレンチ（北側から）



発掘調査風景 5
： Bトレンチ（北側から）

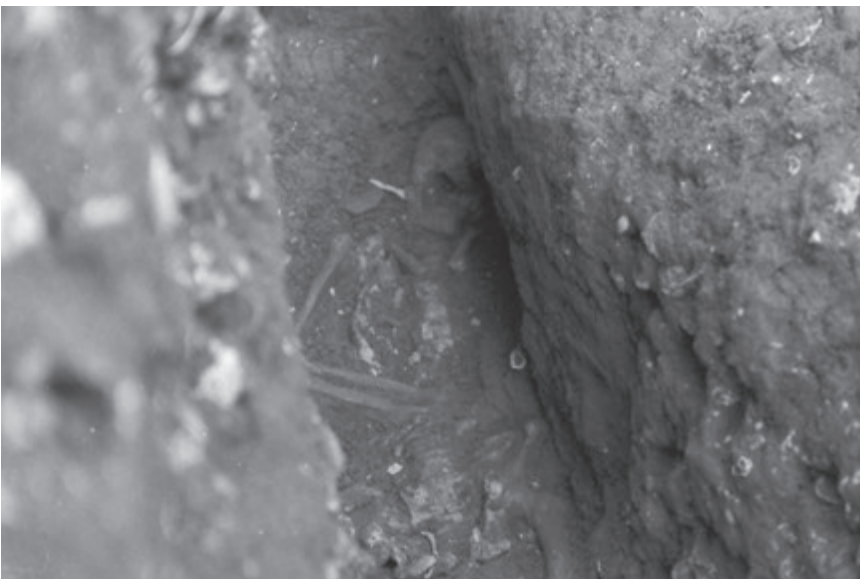
発掘調査風景



1号人骨検出状況（Aトレンチ）

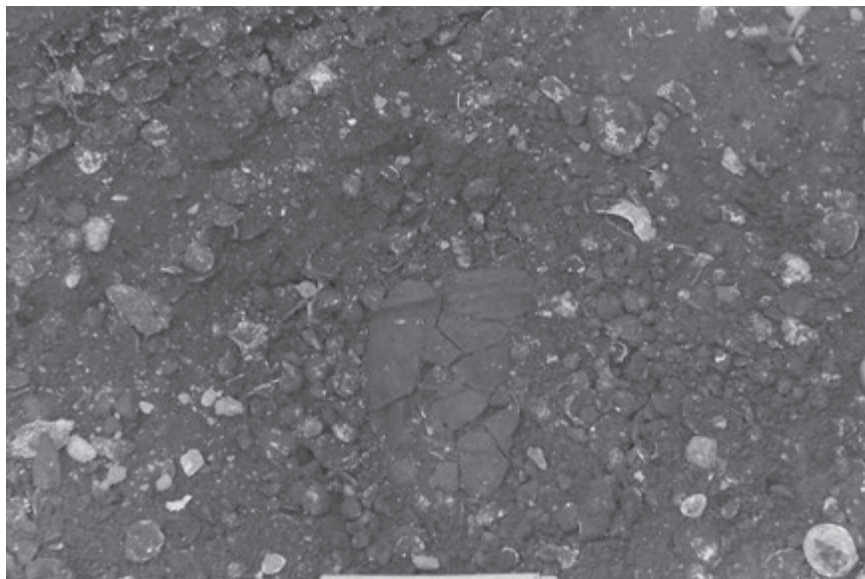


2号人骨検出状況（Aトレンチ）

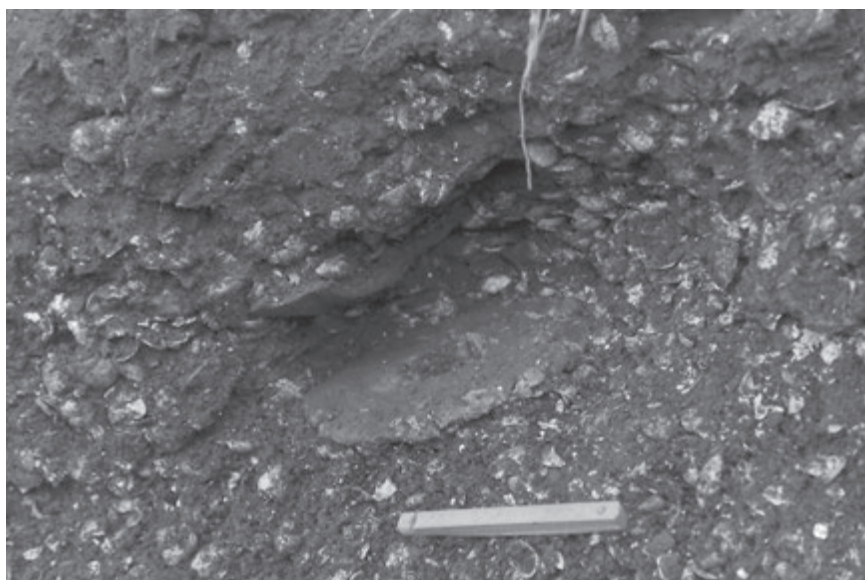


3号人骨検出状況（Bトレンチ）

人骨の検出状況



遺物出土状況 1 : 市来式土器他



遺物出土状況 2 : 鯨の脊椎骨他



遺物出土状況 3 : 鹿角他

遺物出土状況



443



329



164



47



50

市来貝塚出土の土器 1



市来貝塚出土の土器 2 (Aトレンチ)



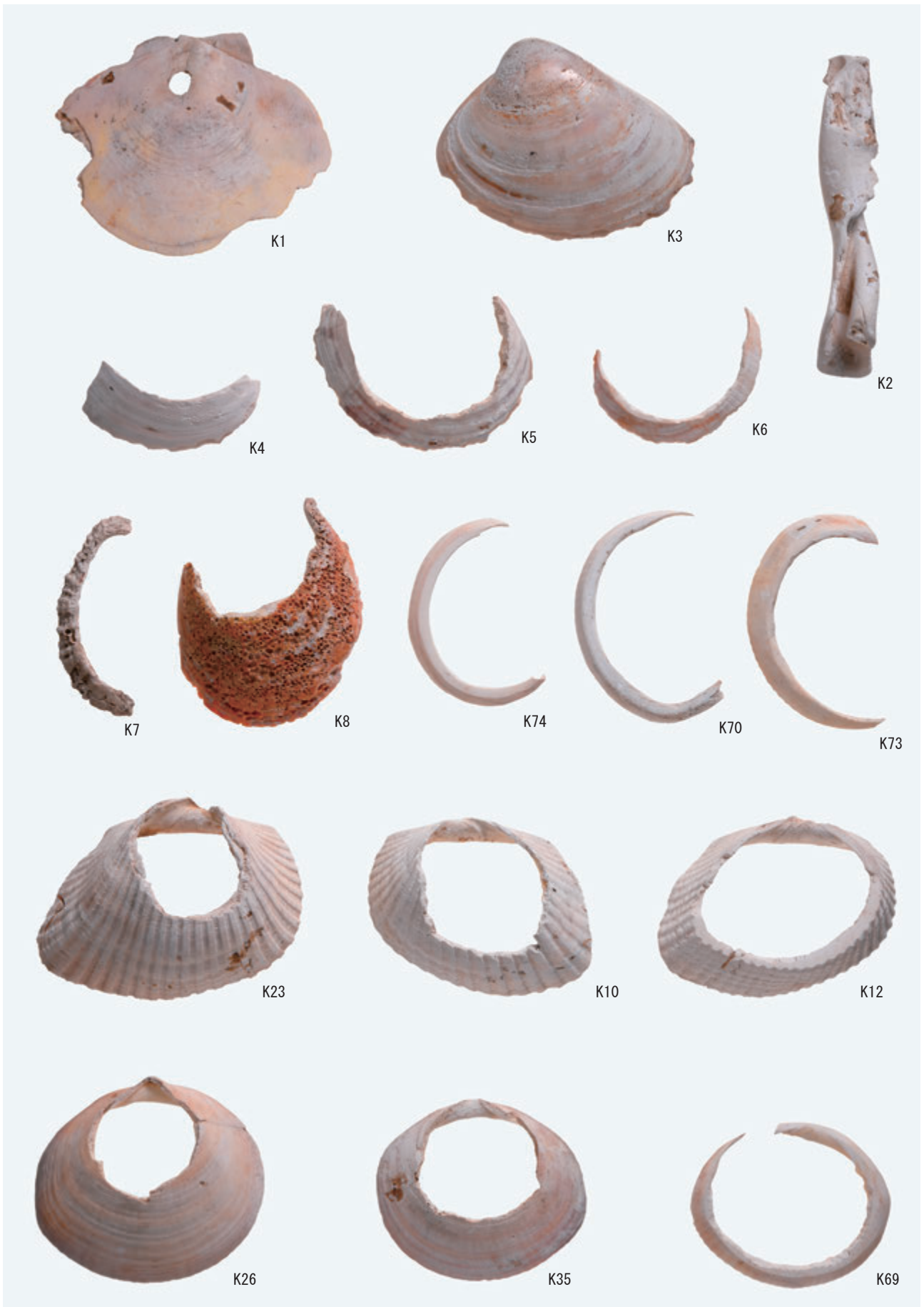
市来貝塚出土の土器 3 (Bトレンチ)



市来貝塚出土の土器4（その他）



市来貝塚出土の石器・石製品



市来貝塚出土の貝製品



市来貝塚出土の骨角製品



市来貝塚検出の
縄文人骨3体



1号人骨



3号人骨



2号人骨

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(218)

市来貝塚

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口コレクション発掘調査報告書(6)

発行年月 令和5年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印刷 株式会社イースト朝日
〒891-0122
鹿児島県鹿児島市南栄3丁目30-7
TEL 099-266-5522 FAX 099-266-5523



鹿児島県